

研究紀要

第19号

2004

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

序

〔論文〕

砂川期の基礎的研究(2) —ナイフ形石器を廻る諸問題 (上) —

……………西井 幸雄 (1)

押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性

—絡条体圧痕文土器の分析を通して画期を探る—

……………金子 直行 (25)

加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック (前) ……………橋本 勉 (87)

瓢箪形注口土器の成立と展開……………上野真由美 (109)

方形周溝墓と土器Ⅱ —概観 その1—……………福田 聖 (133)

埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器

……………永井いずみ (169)

押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性

—絡条体圧痕文土器の分析を通して画期を探る—

金子 直行

要旨 本分析は縄文時代早期中葉において、およそ中央構造線を境に東西を二分していた押型文系土器群と沈線文系土器群が、いかに後半期の条痕文系土器群へと変遷したかを明らかにしようと試みたものである。特に、押型文系土器群と沈線文系土器群の接触地域である中部地方を中心にして、その終末期における両系統の土器群の組成と関係性を分析し、地域的な様相の相違をも比較検討の上、条痕文系土器群への構造的変革を明らかにすることを目的とした。

その結果、田戸上層式の終末期に、押型文土器と沈線文土器とのキメラあるいはハイブリッドとして相木式、穂谷式が成立し、系統的な変遷を示す高山寺式終末の土器群とともに地域的に併存していた可能性を指摘することができた。そして、この段階には明らかに絡条体圧痕文が成立しており、土器群の変革と合わせて田戸上層式からの分離が必要とされ、この段階に相当する城ノ台北貝塚第五類土器が「城ノ台北式」と呼ばれたことから、この名称を使用することとした。近年、この段階は移行期の様相を持つ段階として「田戸上層式新段階」の名称が与えられているが、各地域における実態的土器群の変革と、絡条体圧痕文の存在をもって画期とすべきとの認識に至り、子母口式の前段階としての意義付けを行い、その後の土器群の変遷と合わせて検討した。押型文の主体的な分布地域における土器群の流れにも注視しながら検討した結果、子母口式段階まで押型文系土器が存在する明確な証左は得られなかったが、残存する可能性が十分にあることを指摘することができた。

1 はじめに

縄文時代早期の土器群は比較的広範な分布圏を持ち、しかも独自性の強い土器群で、他型式との明瞭な型式間交渉を行わず、その終末段階にて他型式と折衷・融合する姿を見せることがある。そのため、成立期及び終末期段階では他型式との関係性を把握することが可能となるが、盛行期においては併行型式の認定や、編年作業に窮する場合が多い。また、土器群の伴出関係を保証する遺構が少ないことも、その一要因となっている。しかし、その一方で、系統的な土器群における内在的な変化変遷過程については、単純進化論的な型式学的手法により痒いところに手が届く程の、微に入り細をうがう変化変遷過程が復元され、多くの段階型式が設定されている場合が多い。遺構が少ない時期ほど、その傾向が顕著に見受けられる。

ここで対象とする押型文系土器群は沈線文系土器群と共に、日本列島の縄文時代早期中葉を東西に二分する土器群であるが、今日では押型文系土器群の成立を早期初頭にまで遡らせる見解も出されていることから、早期の前半を二分する土器群であると把握することも可能である。押型文系土器群の成立を以って早期とする立場もあり、押型文系土器群最古段階に位置付けられている大鼻式を関東の井草Ⅰ式に併行させる見解からでは、今日の時期区分に対して区分基準が的を射ていたことになる。しかし、本来的には意味合いが全く異なるものであることは明白である。また、撚糸文の後半段階までを草創期と認識する立場では、現行の大鼻式押型文土器の位置付けを是認すれば草創期の土器群と認識せざるを得ない状況となる。いずれにしても、草創期と早期の時期区分、井草式と大鼻式の併行関係については水掛け論的な部分を含み、結論の出せない問

題として残されているが、かつて、宮崎朝雄と筆者は井草Ⅰ式を早期初頭に位置付け、稲荷台式段階で表裏縄文系土器群の延長上に押型文土器の成立を見る立場から（宮崎・金子1989）、撚糸文と押型文を回転文様という視点で分析し、両土器群の関係性について押型文土器前半期までの土器群について、その流れを検討してきた経緯がある（宮崎・金子1995）。

ここでは、押型文系土器群終末期における様相を地域的に検討し、回転文様系土器群の一つである押型文系土器群の終焉の姿を明らかにするとともに、沈線文系土器群との関係性を検討する。押型文系土器群、沈線文系土器群終焉後の後継土器群として、貝殻条痕文系土器群が凡日本的に展開するが、地域的にどのような構造的変換を経て条痕文系土器群へと変遷してきたか、また、その変換原理は何かという観点からこの変換期の分析を行う。

なお、同様な視点で関東地方の条痕文系土器群の成立について分析を行ったのが「野島式土器の成立について」（金子2000a）であり、野島式土器成立前夜の子母口式段階における地域的な様相のアウトラインも示して置いた。また、条痕文系土器群の文様要素の一つである細隆起線文の出自と変遷過程を分析し、子母口式の最新段階に位置付けられていた土器群を条痕文系土器群初頭期の野島式に組み込む作業を行ったのが「子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討」（金子1993）で、子母口式を東北地方の沈線文系終末期の土器群と比較検討し、沈線文系土器群の範疇に位置付け直す作業を行ったのが「貝殻沈線文系土器群終末期の様相」（金子1994）である。これらの作業を通じて、沈線文系土器群終末期の子母口式を題材とし、沈線文系土器群から条痕文系土器群への構造的変換を明らかにしようとしてきたが、押型文系土器群からの構造的変換についての分析は手が付かないままで、課題として残っていた。

また、上述の理由から、沈線文系土器群終焉期の子母口式土器と、押型文系土器群の終焉がどのように関係するかについては大変な興味を抱いており、両者が直接的に伴出することはかつて無く、直接比較することもできないでいたが、型式学的に種々の要素に関連性が見られることについては指摘してきたところである（金子1998、2000b）。これら等の指摘に対して、守屋豊人氏からは「子母口式に併行する押型文土器が存在する可能性は少ない」（守屋1999）という貴重な指摘が寄せられている。現状の状況分析からすれば、筆者も守屋氏の見解を首肯せざるを得ないが、視点を変えて広範囲に亘る土器群に対して関係性の分析から該期土器群の再検討を行い、特に絡条体圧痕文の要素を中心的に分析することによって、問題の一端を明らかにしながら守屋氏の指摘に答えていきたいと考えている。さらに、現在九州の押型文系土器群の後継者として位置付けられている平椀式系土器群についても、押型文系土器群終末期の土器群との関係性において検討し直してみたい。

早期後半の条痕文系土器群は、押型文系土器群、沈線文系土器群の後継として成立し、まさしく日本列島を二分していた土器群を糾合して成立した土器群であると思われる。その過程は系統性を強固に保守していた土器群が、あたかも互いに迎合するか如く折衷・融合して条痕文系土器へと構造的な変換を遂げているが、中部・近畿・中国地方にかけての地域では、押型文系土器群の後継者である条痕文系土器群初頭期の土器群が不明瞭となっている。今後、発見される可能性も高いが、現時点での資料の検討から、押型文という要素がどこまで残存するかについても検討

を加えたい。

なお、当該期の土器群の研究は、言うまでも無く1997年1月18日から19日にかけて長野県考古学会主催で行われたシンポジウム「押型文と沈線文」の成果に負う部分が多く、その後において格段の進歩を遂げてきたと評価される。その後、シンポジウム関係者による論考が提示されるなど、さらなる深化が図られているが、それらについては本文中で逐次触れて行きたいと考えている。筆者の見解も諸氏の業績の上に成り立っている部分も多く、これらの論考を基に屋上屋を架す懸念もあるが、新資料等を加え、筆者なりの視点で関係性の分析を行いたいと思う。

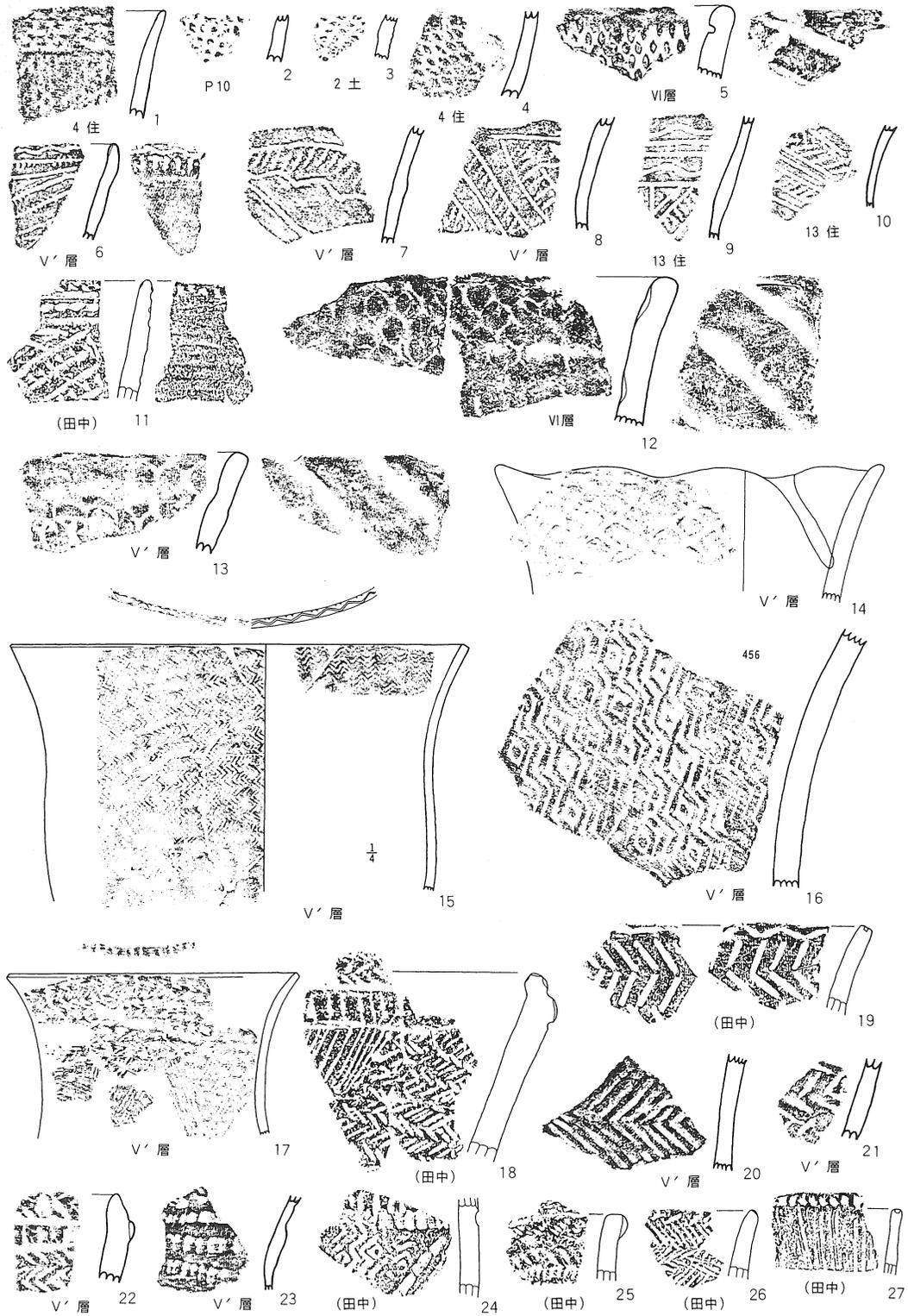
2 終末期の押型文系土器と沈線文系土器

(1) 向畑遺跡の提起する諸問題

押型文土器と沈線文土器の共伴資料として、最初に検討しなければならない遺跡に向畑遺跡がある。遺跡は岐阜県高山市に所在し、1983年と1984年に報告書が2冊刊行されている（吉朝1983、1984）。また、出土土器は田中聡氏によって丁寧に再資料化が図られ（田中1999）、当該期土器群の研究に資するところが大きい。

遺跡は前期を中心とした早期から中期の遺構が検出されており、特に、早期中葉の押型文土器と沈線文土器が伴出したことで注目を浴びた。高山寺式期の押型文土器を出土する住居跡と、土壌が検出されているが、早期の遺構が集中した地点よりやや北東に離れた地点に包含層が形成されていた。問題となる土器群が出土した地点が、この北東地点と呼ばれる地点で、この地点から出土した土器群については、第1図中で層位番号を付してある。北東地点の包含層はV層のアカホヤ層を境に、下層のVI層から高山寺式が主体的に出土し、直上層のV'層から山形押型文土器(15)と沈線文土器(17)が共伴している。その出土状況も写真で確認できるが、大形破片が2個体分伴って出土しているのは明らかである。しかし、V'層は前期の土器群も含まれ、アカホヤ層の上層であることから、早期中葉のプライマリーな層ではなく、この層の形成理由と、両土器の共伴関係が疑問視されている。出土状況写真で見ると、V'層から出土する理由は不明であるとしても、廃棄時における一括性は看守されよう。また、15と17が共伴ではないとしても、他の遺跡での様相を考慮すると、同時期性の高いものと判断される。

向畑遺跡からは早期中葉各時期の土器群が出土しており、押型文土器と沈線文土器の組み合わせは不明瞭であるが、田戸上層式古段階に比定される沈線文土器(9、10)は住居に混在しながら、また、V'層からも出土している(6~8)。古手の高山寺式は住居跡の混在(4)と第VI層から(5)出土しており、楕円の大きいやや新しいもの(12)も出土している。V'層からは楕円の大きい高山寺式(13)や大きな菱形押型文(14)、「玉抱き山形文」(16)、大形の山形文(20)、縦位密接の山形文(15)、押引沈線と山形文を併施文する相木式(23、24)と、矢羽根状沈線を施文する土器群(17~19、21、22、25、26)、判ノ木山西式(27)が出土している。これ等の土器群に対して、縦位密接山形文土器と高山寺式を層位的に捉える考え（神村1986、宮下1988）や、山形押型文土器を沈線文土器より古く捉える考え（遠部・柳田2001）、層位的関係を否定し、ほぼこれ等の土器群を一括的に捉える考え（田中1999）がある。



第1図 向畑遺跡出土土器

土器群の詳細な観察は田中氏の論文に譲るとして、15の山形押型文土器は胴上半部までを施文域とし、角頭状口唇内端部には2個対の小さな刻みを、口唇上には山形文を施文する。この構成は6の沈線文土器の口縁部の構成と類似し、また19の口縁部とも類似する。縦位密接山形文を古相と見れば、田戸上層式古段階にまで遡る可能性がある。また、大形楕円文や菱形文は内面斜行沈線等から高山寺式でも新しいものと判断され、田戸上層式直後段階にまで下る可能性がある。しかし、15が17の沈線文土器と共伴であると捉えれば、田戸上層式直後段階までの併行関係を考えることも可能となる。17、18、22、25は矢羽根状沈線や集合鋸歯状沈線、隆帯及び隆帯上の刻みが類似し、ほぼ同段階と認定される。

さらに、注目しなければならないのは、17の口唇部、25の口縁部隆帯に絡条体圧痕文を施文することである。V'層の土器群が田戸上層式段階の土器群であれば、撚糸文土器、もしくは条線文土器を多く出土するはずであるが、これらを欠き、絡条体圧痕文を文様要素として使用していることから、より子母口式に近い位置付けが可能となろう。17の胴部に施文する鋸歯状集合沈線文は半截竹管内面施文の併行沈線と、刺突状の短沈線を交互に組み合わせたもので、後に説明する子母口式段階の出流原小学校内遺跡出土土器（第19図40、41）の胴部文様に酷似する。また、要素の連鎖で捉えれば、16の「玉抱き山形文」は相木式にも見られ、24の相木式の胴部の押引沈線文は17の構成へと連鎖する。11の併行沈線間に刺突列を施文する手法は17の胴部文様と類似し、11の口唇両端部への刻みはいわゆる常世式へと連鎖する。

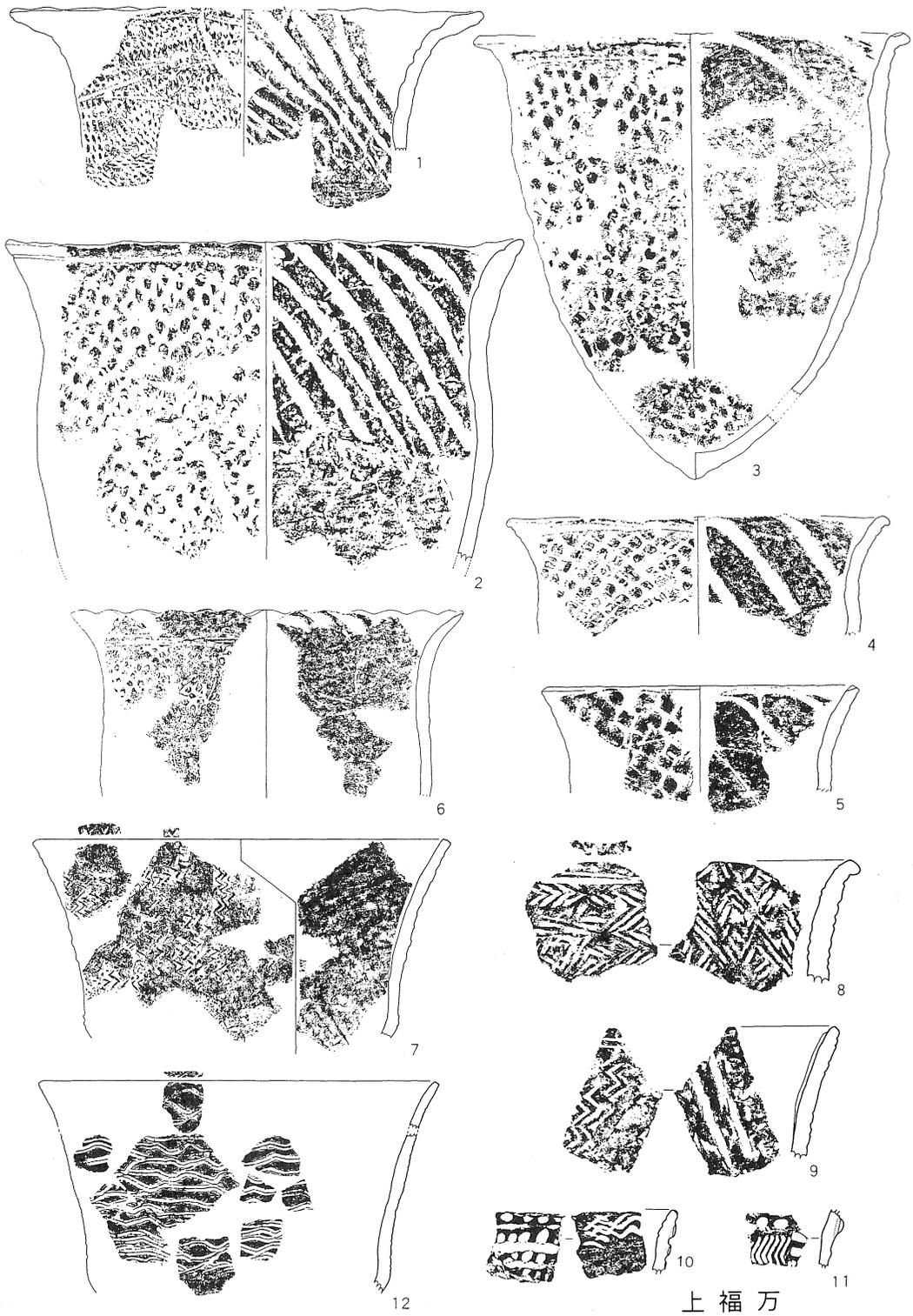
田戸上層式新段階で絡条体圧痕文の存在を認める見解もある（阿部1998）が、文様要素として施文される絡条体圧痕文は重要な意味を持つであろう。従って、向畑遺跡V'層出土の土器群は田戸上層式新段階以降子母口式までの位置付けが可能となり、15と17の供出関係を重視すれば、縦位密接山形文土器もその幅で捉えられる。また、高山寺式土器もほぼ終末段階と思われることから、これらの土器群に伴う可能性が高いことを指摘できる。

以上、本遺跡では明らかな田戸上層新段階の土器群を抽出できないが、縦位密接山形文、「玉抱き山形文」、大形楕円文や菱形文の高山寺式、集合押引沈線文と「玉抱き山形文」を併施文する相木式、絡条体圧痕文を施文する沈線文土器、判ノ木山西式の土器群が、要素の連鎖の輪から田戸上層式新段階以降子母口式間の幅に位置付けられるものと予想して置きたい。もちろん、これ等の土器群を細かな時間差として置き換えることも可能である。しかし、15の山形押型文土器が田戸上層古段階に位置付けられるとしても、これ等の土器群が非常に短い時間幅に存在していることを土器群は物語っていよう。山形押型文土器と高山寺式は層位的な関係にあるのか、山形押型文土器と沈線文土器の共伴関係は確かなのか、向畑遺跡の提起する問題は大きいと言える。

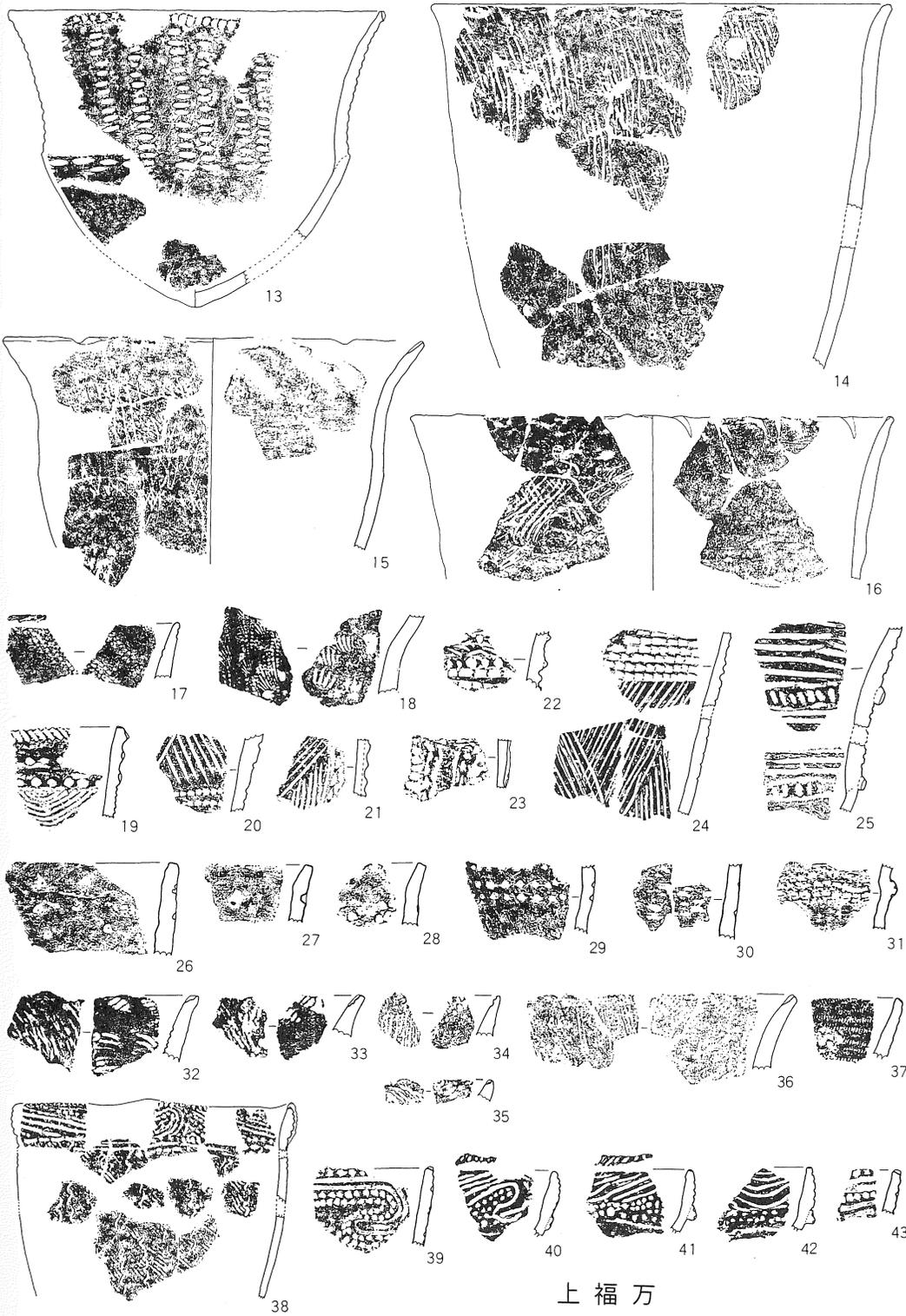
(2) 高山寺式と沈線文土器

〈上福万遺跡〉

上福万遺跡（大田1985、北浦1986）は鳥取県米子市に所在する遺跡で、高山寺式土器が多量に出土した遺跡として知られ、高山寺式土器の細分研究には欠くことのできない遺跡となっている（和田1988、関野1988）。出土土器を第2～3図に示したが、編年的な意味合いではなく、



第2図 上福万遺跡出土土器 (1)



第3図 上福万遺跡出土土器 (2)

土器群のバリエーションを提示した。内面斜行沈線を持ついわゆる高山寺式は、楕円文が小さく内面斜行沈線を内面深くまで施文するもの（1）、楕円文が大きくなり内面斜行沈線の間隔がやや開き、内面深くまで施文するもの（2）、楕円文の大きさはほぼ同じであるが内面斜行沈線の間隔が開き、内面にやや浅く施文するもの（3）、内面施文が同じような特徴で、菱形文となるもの（4、5）、比較的小さな楕円文をまばらに施文し、内面斜行沈線を口縁部付近に浅く施文するもの（6）などがあり、ある程度の傾向はあるものの、楕円文の大きさや、内面斜行沈線の状況のみでは編年が難しいことを示している。上福万遺跡出土の高山寺式土器は、口唇直下の口縁部に沈線を廻らせ、口縁部を区画する点が特徴的で、この区画部分が穂谷式や手向山式の口縁部突帯及び肥厚帯と相同の部分と認識される。4～6は高山寺式の終末に位置付けられるものと思われ、5は向畑遺跡第1図4に類似する。

他に、縦位山形文を胴屈曲部までに施文するもの（7）、内外面に山形文を縦横に施文するもの（8）、内面斜行沈線を持ち、外面に縦位山形文を施文するもの（9）、穂谷式に相当する（10、11）押型文土器などが存在する。7の山形押型文土器は内面施文がないものの、器形、口唇部形態など向畑遺跡第1図15に類似する。また、9の内面斜行沈線を持つ縦位山形文の存在は、高山寺段階で縦位山形文の存在を示す好例となろう。さらに、8の矢羽根状を呈する山形文は、矢羽根状沈線に置換すると内畑遺跡第1図17、18と同様の効果を示す。上福万遺跡内で山形押型文が高山寺式のどのあたりに編年付けられるかは不明であるが、9の内面斜行沈線の様相から、中位ほどの段階には存在しているようである。さらに、7と同様な器形で、横位の波状沈線を施文するもの（12）、横長の刺突文を胴屈曲部まで縦列施文するもの（13）があり、特に13は縦位の方向性が明瞭で、意識が山形文とも共通する。従って、12、13は7と関連し、高山寺式と組成する土器群と認識され、押型文の規制が崩れているところから、高山寺式でも終末の段階に位置付けられるものと仮定して置きたい。12の不規則な横位波状文は、手向山2式に比定された熊本県山江村狸谷出土土器（横手1998）との連鎖で捉えられよう。

また、高山寺式には撚糸文土器が伴うが、整然とした撚糸文ではなく、施文の乱れたものを取り上げた。撚糸文が短く五月雨状のもの（14）、粗い格子目を描くもの（15、16）などで、内面沈線の形状から、高山寺式でも終末段階に位置付けられるものと認識される。

撚糸文と関連するものとして、32～37の絡条体圧痕文土器が存在する。32～35は撚糸文土器の、36は擦痕文土器の口縁部内端刻みとして絡条体圧痕文を施文しており、37は横位の線状施文を施すいわゆる絡条体圧痕文土器である。向畑遺跡でも存在していたが、絡条体圧痕文の存在自体が重要で、問題になるものと思われる。

さらに、上福万遺跡からは、貝殻背圧痕文土器（17、18）や沈線文系土器群（22～31）、いわゆる平椀式に比定される土器群（38～43）が出土している。いずれの土器群も併行関係が明瞭ではないが、貝殻背圧痕文土器は施文手法から高山寺式の新しい段階に対応するものと思われる。押引沈線文と集合鋸歯状沈線文を組み合わせる土器群（20、24）は、刻みを施す隆帯を区画要素に使用するもの（19、22、21、23、25）が多く、押型文を併施文すれば相木式、押型文を施文しなければ田戸上層式直後の土器群に類似する。向畑遺跡の第1図17の全体の文様構成は、

24に類似する。また、19の口縁部隆帯は刻みを持ち、10の穂谷式とも連鎖する。円形刺突文列を施文するもの(26~29)、横長の刺突文を施文するもの(30)、それが隆帯と組み合わせるもの(31)なども存在し、これ等の土器群が高山寺式最終末に絡む土器群と認識される。

さらに、38~43の平椀式に比定される土器群は、曲線的な沈線文とそれに沿うか、または充填要素として刺突文を施すもので、曲線的なモチーフと器形、口縁部形態が田戸上層式に系譜を引く要素と考えることもできる。本遺跡では、19~24のような田戸上層式直後と思われる土器群と、おそらくその影響を受けて九州地方で成立するであろう平椀式土器の両者が共存し、なおかつ、高山寺式の最終末に組成していた可能性が高いことを指摘して置きたい。現在、平椀式が手向山式以降の条痕文系土器群と併行段階に位置付けられることが多い(中村2000)中で、絡条体圧痕文土器37と合わせて、高山寺式直後と捉えることも可能であり、両者を分離する積極的な根拠もない。これ等の土器群は、田戸上層式直後段階としての位相を与えることで、その影響関係と変遷関係がスムーズに理解できるのではなかろうか。

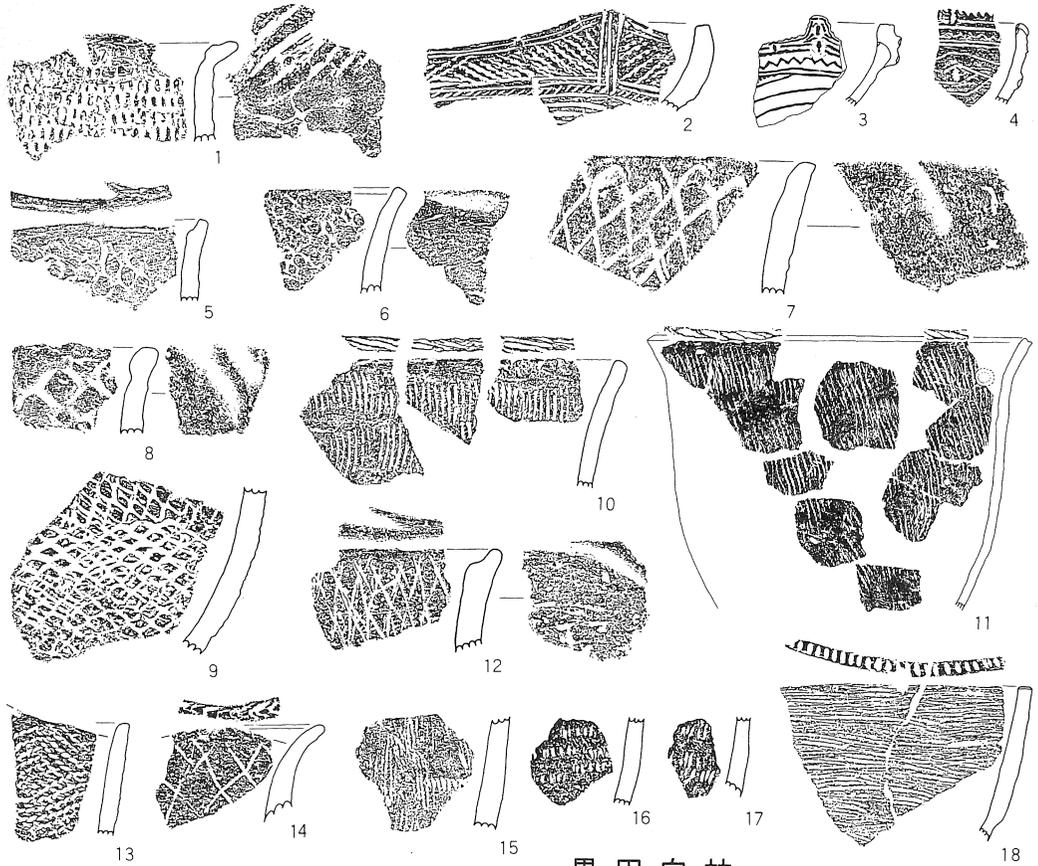
以上、向畑遺跡と上福万遺跡の高山寺式終末に絡みそうな土器群を検討してきたが、そこでは穂谷式、相木式、田戸上層式直後段階の土器群に加えて、絡条体圧痕文土器、平椀式土器が射程に入り、それぞれどのような関係性を保っていたかが、改めて問題となってきた。

〈黒田向林遺跡〉

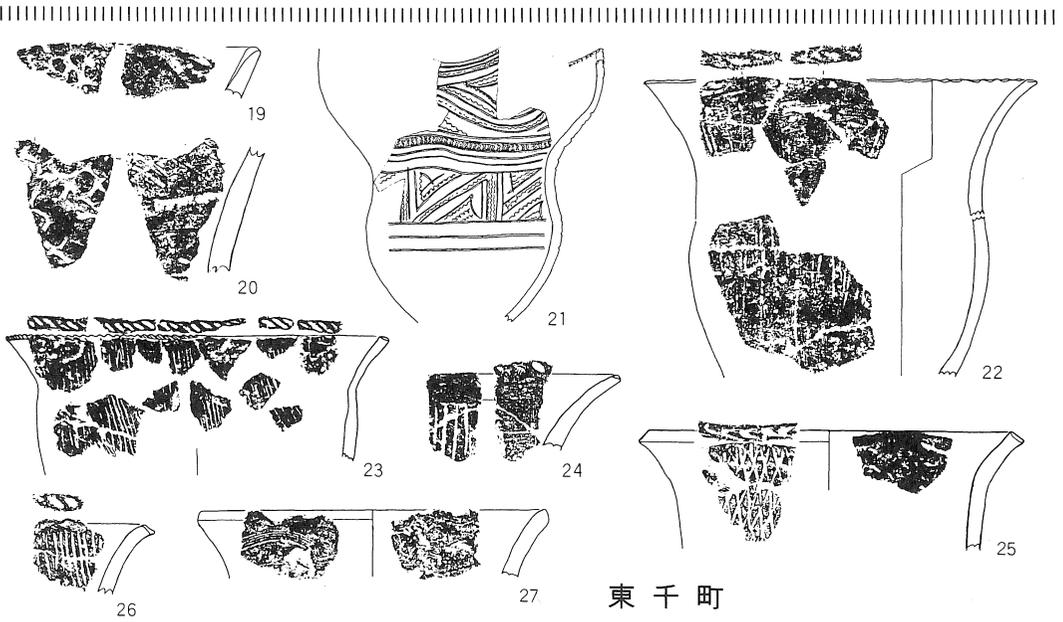
黒田向林遺跡(馬飼野1986)は静岡県富士宮市に所在する遺跡で、調査面積は少ないものの高山寺式期の良好な土器群が出土しており、高山寺式の細分には欠かせない遺跡である。出土土器は高山寺式の全体に亘っての土器群で、高山寺式終末段階の土器群を主体として第4図1~18に示した。1は楕円文が細かく内面斜行沈線も深いことから、高山寺式の古から中段階に位置付けられ、2~4はそれに伴う田戸上層式古段階の土器群と思われる。5、6は中型の楕円文であるが、内面斜行沈線は口縁部付近に限られる。8は大きな楕円文、7は大きな菱形文を施文するが、内面斜行沈線は口縁部付近に集約されている。9は胴部に楕円文を横位施文するもので、胴部の区画意識が看守される。これ等の高山寺式土器は、終末段階に位置付けられよう。

黒田向林遺跡では撚糸文土器が多く出土しており、11のように整然と施文するものは古い傾向にあらう。これは岐阜県上矢作町の東千町遺跡(増子1998)で出土した、田戸上層式古段階の土器(第4図21)に伴う撚糸文土器(同22~26)が整然としていることから判断される。第4図10は撚糸文を五月雨状に短く施文するもので、その胴部が15になる。12の格子目撚糸文は内面斜行沈線が口縁部のみに見られ、14は大きな格子目で、口唇部に押引状の刺突文を施す。高山寺式の中にあっても新しい段階に位置付けられよう。また、13は太くて明瞭な撚糸文で、入り組み状の菱形文を施文する。この撚糸文の構成に注意を払っておきたい。18は頸部に括れを持ち、絡条体条痕を横位施文するものである。

さらに、16、17の絡条体圧痕土器が存在することに注目したい。高山寺式の細分を検討した関野哲夫氏も、この絡条体圧痕文土器を子母口式との関連で注目している(関野1988)。16、17は混在するいわゆる東海地方の絡条体圧痕文土器であるのか、15のような撚糸文の間に施されるトメ文の効果としての施文から変化したものかは判断つかないが、非常に関連深いものと思



黒田向林



東千町

第4図 黒田向林遺跡・東千町遺跡出土土器

われ、高山寺式終末に関わる土器群であることは間違いないであろう。

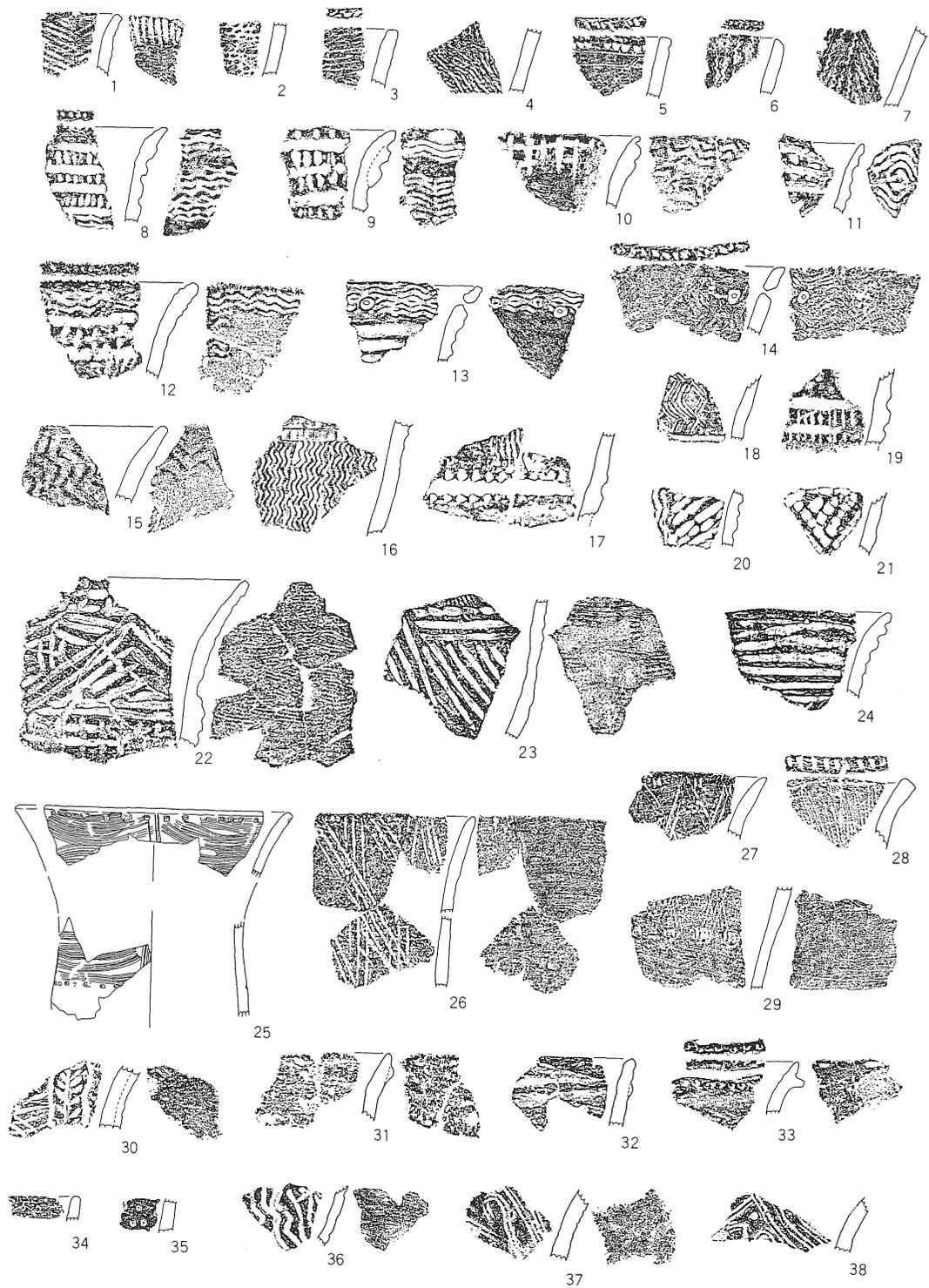
以上、向畑遺跡、上福万遺跡、黒田向林遺跡の分析から、高山寺式終末には撚糸文の変形したものや、絡条体圧痕文の要素が成立している可能性が高くなったと判断される。一方で、高山寺式古・中段階では田戸上層式古段階の土器群が伴うことが明瞭であるが、高山寺式新段階に伴う沈線文系土器群が不明瞭となっている。1997年の「押型文と沈線文」以降、田戸上層式新段階以降の在地化した沈線文土器が注目されているが、高山寺式土器を介して田戸上層式新段階及び田戸上層式直後段階の土器群を抽出することは、大変難しい状況となっている。向畑遺跡、上福万遺跡で田戸上層式直後段階から子母口式の幅で捉えた土器群が、一部田戸上層式新段階に位置付けられたとしても、絡条体圧痕文を特徴とする子母口式への変遷は非常に短期間であることが想定される。その間に、田戸上層式新段階がどのように介在するのであろうか。

(3) 相木式と沈線文土器

〈石敷遺跡〉

石敷遺跡（佐野2000）は静岡県富士宮市に所在し、潤井川を挟んで南西方向直線距離約2.5kmのところ黒田向林遺跡が存在する。石敷遺跡からは穂谷式や相木式の押型文土器と、いわゆる判ノ木山西式の沈線文土器が出土している（第5図）。1は平行押型文、2は小粒の楕円文を施文し、高山寺式以前の土器群と思われる。3、4は撚糸文土器、5～7は平行沈線文間に貝殻腹縁文を施文するもので、物見台式系土器の在地化した土器であろう。8～13は口縁部に刻み隆帯を廻らし、山形押型文を施す穂谷式である。14、15は外面縦位、内面横位の山形文土器で、口縁部は角頭状を呈する。向畑遺跡第1図15や、上福万遺跡第2図7に類似し、この段階に素口縁の山形文土器が存在することは確かなこととなろう。17～19は胴部の器形変換部分の肥厚帯で、沈線を施した背割状隆帯で胴部を区画する破片である。この背割状隆帯にも刻みが施され、この刻みは9、12の隆帯上の刻みと同様で、丸棒状や角棒状工具を押し付けるか、軽く回転させて施文するものである。この隆帯間を一度に刻む手法は、10の口縁部における縦位短沈線の施文に通じるところがある。10の口縁部が肥厚することから、口縁部の肥厚帯と同じ効果を持つものと思われ、口縁部の2条の隆帯貼付と、口縁肥厚帯は同時に存在し、表現の異なる口縁部の2形態と認識される。もちろん、間隔の開いた2本隆帯→背割状2本隆帯→背割状隆帯の融合した肥厚帯へという変遷過程も考えられるが、石敷遺跡ではこれ等が時期差ではなく、2形態として同時併存していた可能性が十分に考えられる。この刻み手法は、22の沈線文土器の口縁部と胴部の刻みにも採用されている。これ等の穂谷式的な要素を持つ土器は、口縁部裏面に横位の山形押型文を、胴部に縦位の山形文を施文する場合が多い（17、18）。

また、押引沈線文を併施文する山形押型文土器は相木式に相当し、16は口縁部の押引沈線文下に密接の山形文を縦位施文する。20は縦位の山形文と集合押引沈線を併施文し、21は集合鋸歯状押引沈線を施文する。22は裏面が条痕整形で、口縁部と胴部の背割状隆帯部分に刻みを施し、太沈線で集合鋸歯状文を施文する。23は胴部破片で、縦位横位の区画が入り組んでいる。24は外反する口縁部に、押引沈線ではない太沈線を施文するが、いずれも相木式の変形か、相木式、穂谷式の融合した土器群である。



石 敷

第5図 石敷遺跡出土土器

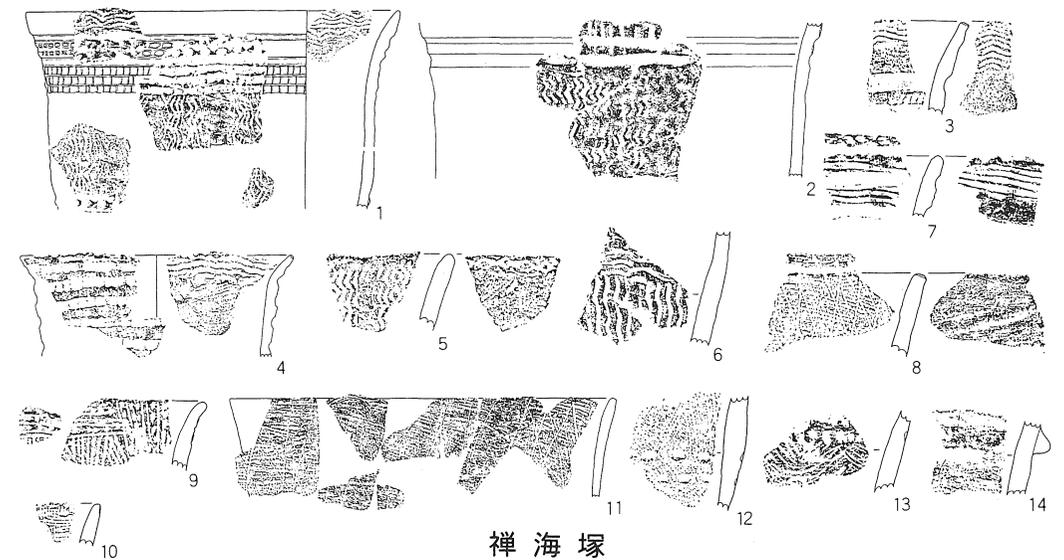
25～29は条線状沈線でモチーフを描く判ノ木山西式土器で、上下対弧状のモチーフ（25）、斜格子目文（26～29）を描き、29は文様帯の下端を櫛歯状工具のトメ文で区画する。29の櫛歯状のトメ文は、黒田向林遺跡第4図15の絡条体圧痕文と酷似する。30～33は隆帯の付く土器群で、30は沈線文のモチーフ上に背割状隆帯が垂下し、隆帯上には矢羽根状の刻みを施す。矢羽根状の刻みを絡条体圧痕文に置き換えれば、子母口式となる。31、32は口縁部に低隆帯を、33は背高の隆帯を廻らし、33は隆帯上と口唇上に円形刺突文列を施す。34、35は円形刺突文を施すもので、この円形刺突文は上福万遺跡第3図26～29と類似し、子母口式にも通じる要素である。さらに、36～38は曲線の沈線文を施文するもので、田戸上層式直後段階の様相と捉えることも可能であろう。

以上、石敷遺跡出土土器群は、穂谷式、相木式、判ノ木山西式を介して子母口式へと繋がる要素を抽出できるが、これらの要素連鎖が共時態としてなのか、通時態としてなのかは即断が下せない。高山寺式と子母口式の関係でも述べたが、非常に短時間的な推移の中で変遷していることが推察されるのである。近隣に位置する高山寺式期の黒田向林遺跡でも、子母口式への連鎖が短時間的であることを推察してきた。両遺跡の土器群とも子母口式への連鎖が短時間的な中で、両遺跡に時間差を設けることは難しい。強いて違いを述べるならば、黒田向林遺跡は高山寺式系土器群であるため、撚糸文が組成し、その延長上に絡条体圧痕文が見え隠れする。一方、石敷遺跡は相木式系土器群で、撚糸文を殆ど持たず、かわりに条線文土器が組成することから、その結果絡条体圧痕文がなく、刻みには絡条体圧痕文に類似した条線文の工具である櫛歯状文を施文することとなる。石敷遺跡の方をより新しく位置付ける見解が多い中、絡条体圧痕文への接近からでは、黒田向林遺跡の方が石敷遺跡より終末が新しくなると判断することも可能である。従って、現時点では両遺跡の違いは新旧の差ではなく系統差であり、両遺跡は一時期併存していた可能性が高いものと判断されるのである。

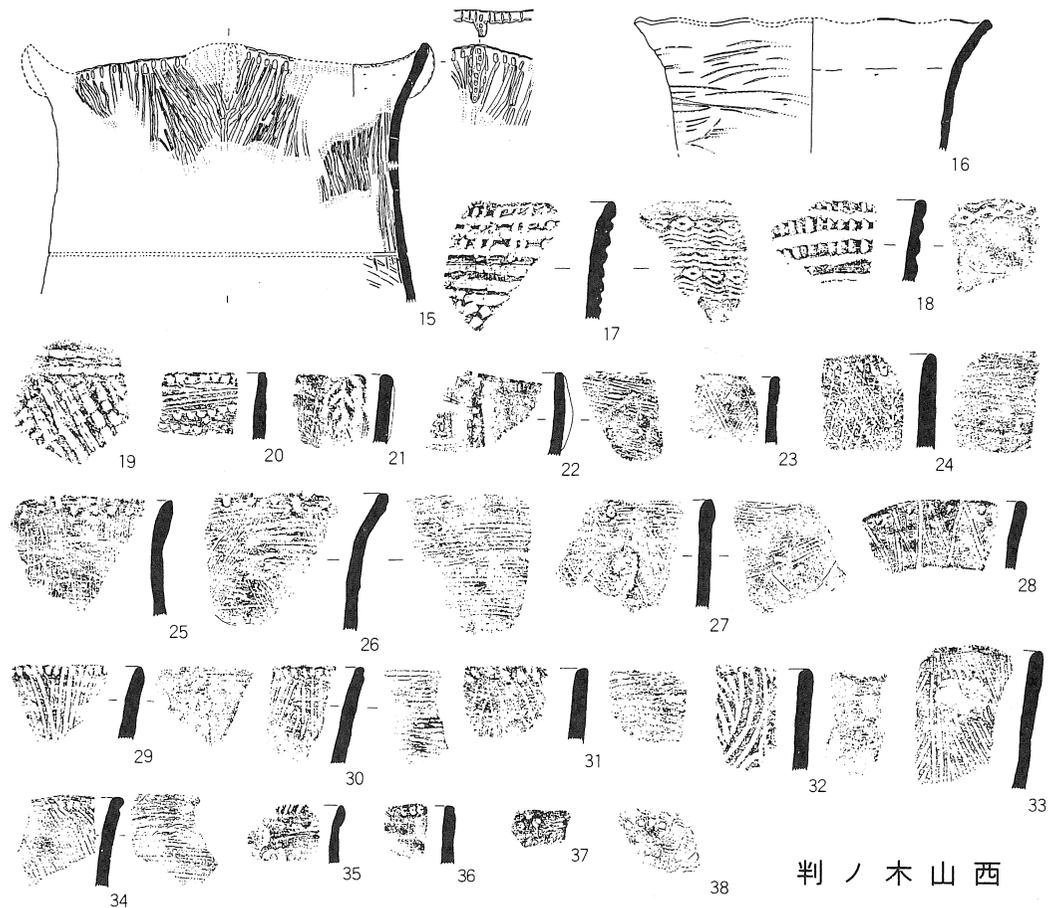
〈禅海塚遺跡〉

禅海塚遺跡（会田1998）は長野県岡谷市に所在し、遺構及び包含層から良好な相木式と沈線文土器の判ノ木山西式土器が出土している（第6図）。1～3、7は穂谷式に相当し、1口縁部の横位山形文下に刻みを施す隆帯2本を廻らせ、文様帯下端部に刻み隆帯を廻らしている。胴部には3条の押引沈線を施文後、縦走山形文をやや間隔を開けて施文する。穂谷式と相木式の折衷形であろう。2、3、7は口縁部に幅広の沈線を廻らし、2は沈線間の隆起部分にキャタピラ状の刻みを施す。7は平行押型文を内外面に横位施文し、口縁部に押型文原体で刻みを施す。この刻みは、絡条体圧痕文と良く類似する。5は素口縁で口縁部から「玉抱き山形文」を縦位施文し、口縁裏には横位施文する。本遺跡においても縦位山形文は存在し、しかも「球抱き山形文」は向畑遺跡第1図16と連鎖する。6は緩い山形文を施文するもので平行押型文に近い。4は口縁部に押引沈線文を5条施文し、外反する口縁部内面に山形押型文を横位施文する、典型的な相木式と言えよう。

9は刺突文を挟む集合平行沈線を口縁部に廻らし、部分的に同種の集合沈線で口縁部から縦位区画を行っている。胴部には集合鋸歯状沈線を施文する。縦位区画が口縁部区画を貫いて口唇直下まで延びている点が特徴的で、この構成は石敷遺跡第5図23と共通する。8、11、12は比較

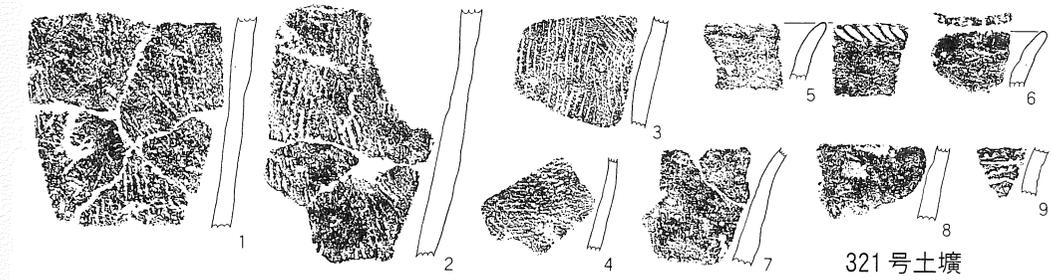


禅海塚

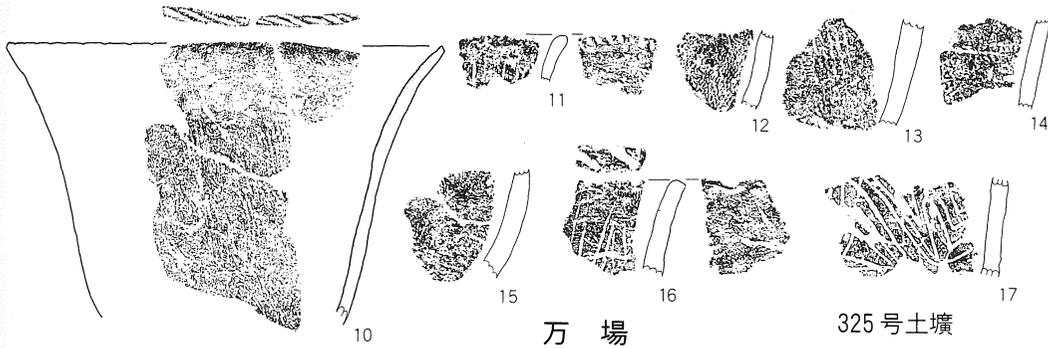


判ノ木山西

第6图 禅海塚遺跡・判ノ木山西遺跡出土

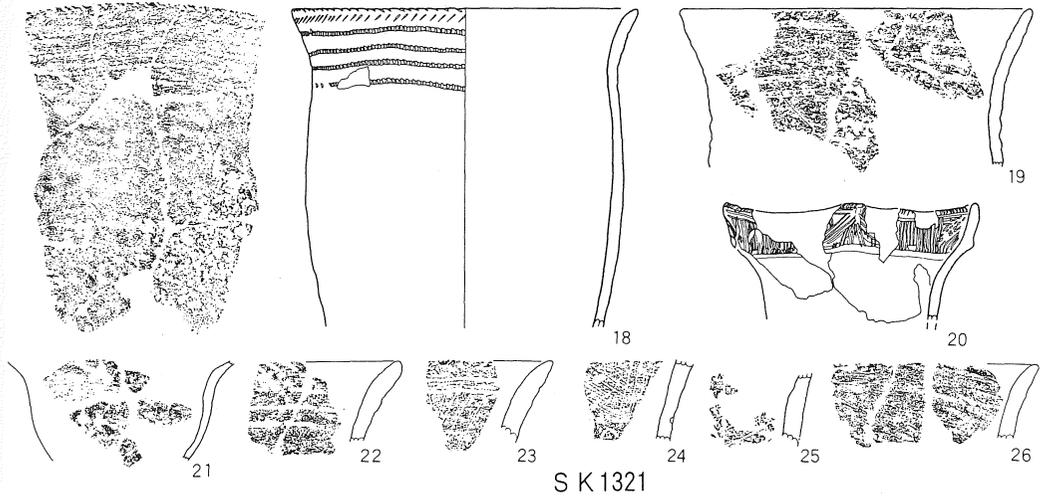


321号土壙

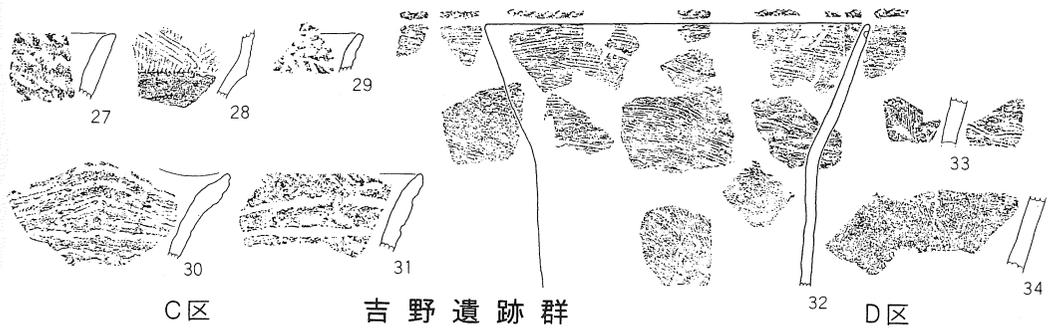


万場

325号土壙



S K 1321



C区

吉野遺跡群

D区

第7図 万場遺跡・吉野遺跡群出土土器

的細い沈線で格子目文を描く判ノ木山西式で、12は櫛歯状工具のトメ文を施す。10は口縁部にトメ状の刺突文を施す。このトメ文は絡条体圧痕文に類似する。13は刺突文下に連弧文状の条線文を施文し、上福万遺跡第3図19の弧状沈線文と構成が類似する。14は丸木の隆帯文を施文するもので、田戸上層新段階から子母口式にかけて存在する隆帯文に近い感じを受ける。

以上、土器群の全体的な様相が向畑遺跡、上福万遺跡、石敷遺跡と連鎖する。

〈判ノ木山西遺跡〉

判ノ木山西遺跡（小林1981）は長野県茅野市に位置し、出土沈線文土器が阿部芳郎氏によって判ノ木山西式と型式設定された（阿部1997）遺跡である（第6図15～38）。型式学的な特徴は阿部氏の論考に譲るとして、ここでは土器群の組み合わせを検討したい。17、18は口縁部沈線間の半隆起部分に一度に隆起間を貫く棒状工具による刻みを施し、口縁部裏面には「玉抱き山形文」を17は2段に、18は1段横位施文する。胴部は集合押引鋸歯状沈線文を施文し、19はその胴部破片と思われる。20は沈線の区画線に沿って、貝殻腹縁文に類似する刺突文を施すものである。

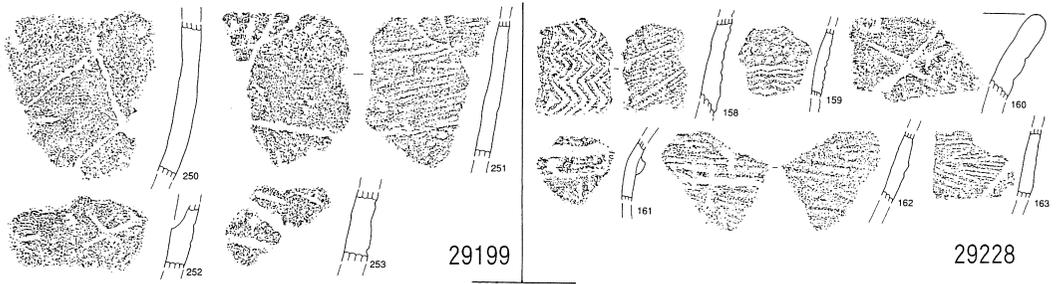
21、22、は口縁部に隆帯が垂下するもので、21の背割状隆帯には矢羽根状の刻みを施し、石敷遺跡第5図30と類似する。

15、23～35は判ノ木山西式土器で、格子目文を基調としたモチーフを描き（23～28）、集合鋸歯状沈線文（29～31）や曲線文（32）を描く。15は緩い波状口縁を呈し、波頂部から短隆帯を垂下する。幅広の胴部文様帯を沈線で区画し、縦長の集合鋸歯状沈線文を施文する。33は15同様に幅広の文様帯を設定するものと思われ、縦位区画と縦長の集合鋸歯状沈線文を組み合わせで施文する。35、36は円形刺突文を施すもので、38は円形刺突文と波状条線文を併施文する常世式系の土器と思われる。

以上、土器群の構成は比較的単純であるが、沈線文土器の文様バリエーションが増えている。相木式土器は「玉抱き山形文」を施し、禅海塚遺跡、石敷遺跡、向畑遺跡と連鎖する。沈線文土器にはトメ文が見られないが、現在では遺跡差として認識される。同じ長野県でも木曾地方では様相がやや異なり、大桑町万場遺跡（贅田2001a）では撚糸文土器が増え、第325号土壙（第7図10～17）では撚糸文土器（10～13）と沈線で曲線を描く土器（17）が出土している。17のモチーフは、田戸上層式に系譜するものと思われる。また、上松町吉野遺跡群（贅田2001b）では、SK1321から口縁部に4条の押引沈線文を廻らす土器（18）、緩い4単位の波状口縁を呈し、縦位沈線と弧線文を組み合わせた口縁部文様帯を持つ土器（20）、押引沈線文を施文する土器（19、22）、集合鋸歯状沈線文を施文する土器（23～25）が、高山寺式と類似する器形の土器（21）と出土している。さらに、地点の離れたD地区では絡条体圧痕文を口唇部に施す条線文土器が出土しており、贅田明氏は前者を田戸上層式新段階、後者を子母口式とし、これらの土器群を時間差として捕らえている（贅田2001b）。おそらく、高山寺式の影響が現れる地域では撚糸文が増加し、順次撚糸文が減少する傾向が見られ、吉野遺跡群SK1321段階が田戸上層式終末期か、その直後段階と認識されよう。20の土器の分析如何では、時期も異なる可能性がある。

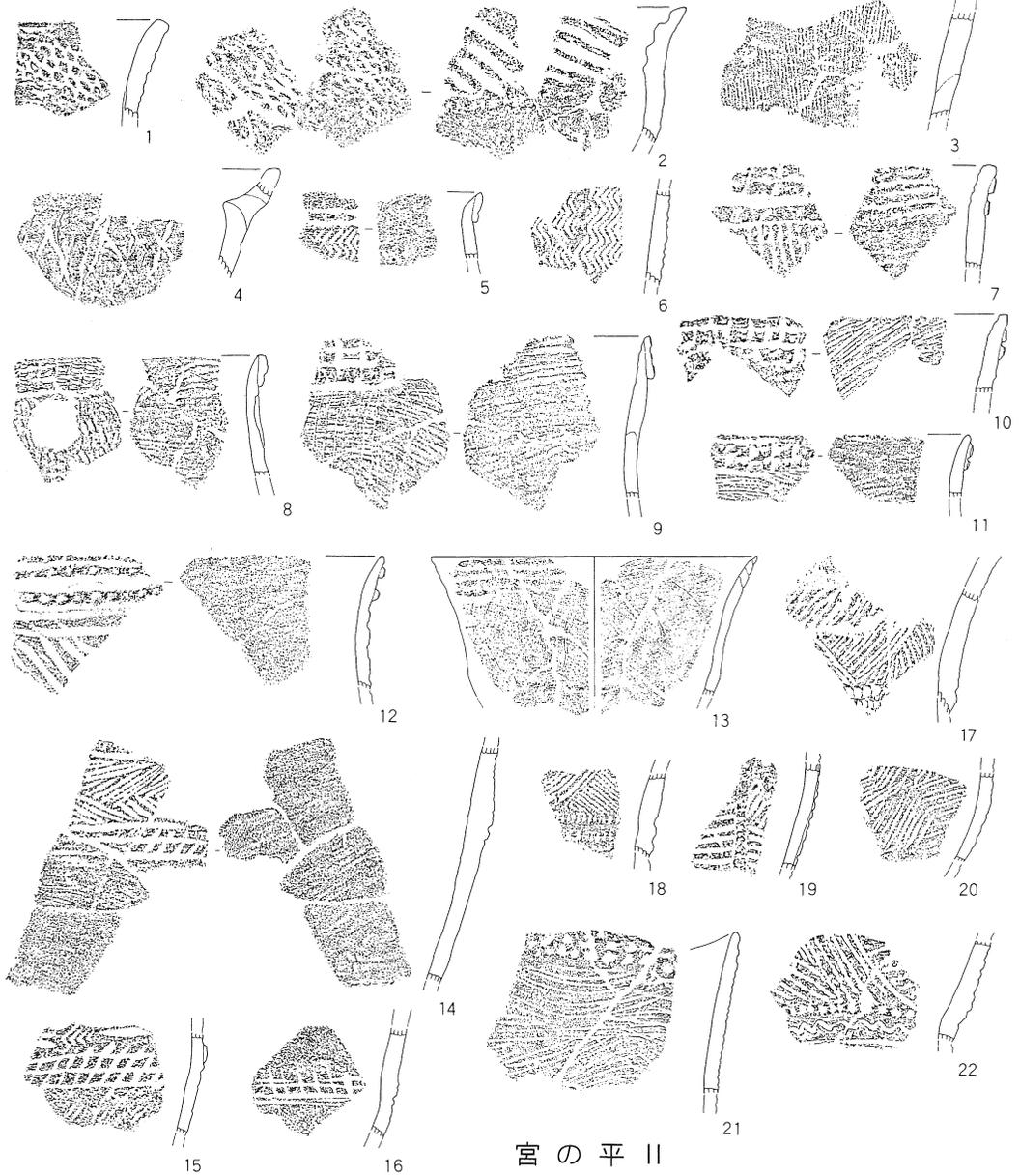
〈宮の平Ⅱ遺跡〉

宮の平Ⅱ遺跡（岡田2003）は奈良県川上村に所在する遺跡で、押型文土器全般が出土してい



29199

29228



宮の平 II

第8図 宮の平II遺跡出土土器

るが、終末段階では高山寺式終末段階と穂谷式、及び「宮の平式」と設定された押型文を施文しない土器群が出土している（第8図）。29199遺構からは大きな菱形文を持つ高山寺式終末段階の土器群が出土しており、29228遺構でも混じりはあるものの、高山寺式終末段階の菱形文土器と穂谷式の縦位山形文土器、胴部に隆帯を貼付する土器が出土しており、それぞれがほぼ共存関係にあることを示している。

包含層からは小さい楕円文を施す高山寺式中段階の土器（1、2）、それに伴うと思われる整然とした撚糸文土器（3）が存在する。4は粗大化した菱形文の高山寺式終末段階の土器で、5～8は穂谷式土器である。9～16が押型文を施文しない宮の平式である。5は口縁部に沈線による背割状の肥厚帯を持ち、胴部に縦位山形文を施文するもので、6はその胴部破片となろう。7は口縁部に低平な隆帯を2本廻らせ、2本隆帯を一度に貫く短沈線状の刻みを施している。地文は振幅の小さい平行押型文状を呈する山形文を縦位施文し、口縁部裏面には横位2段に施文する。この振幅の小さい山形文は禅海塚遺跡第6図6と類似する。8は口縁部に2本沈線による背割状の肥厚帯を持ち、肥厚帯幅を一度で刻む連続した刻みを施している。胴部は弛緩した山形文を縦位密接に施文する。

9は口縁の肥厚帯に2本沈線を廻らせ、縦位の短沈線で刻みを施す。胴部は条痕地文上に細沈線による集合鋸歯状文を描くが、沈線の使い方が判ノ木山西式に類似する。10、11は2本隆帯の間隔を狭めて口縁部に貼付するもので、肥厚帯と同じ効果を示す。10は短沈線で、11は短沈線を押引状に施して刻みとしている。地文には条痕が明瞭である。12は口縁部に間隔の開いた刻み突帯を2本廻らせ、胴部に集合の太沈線を施文するが、鋸歯状文を呈するものと思われる。13は口縁部が輪積み状の段状を呈し、肥厚帯的な効果を示す。胴部にモチーフはない。14～16は胴部破片で、胴部の屈曲部が肥厚し、沈線により背割状の隆起帯と化している。口縁部と同様に斜位の単沈線を施文し、区切文としている。本遺跡においても、口縁部に肥厚帯を持つもの、間隔のつまった隆帯を貼付するもの、間隔の開く刻み突帯を施文するものが存在し、共存しているものと思われる。これ等の口縁部の造りは、石敷遺跡でも同様な現象が見られ、宮の平遺跡第8図9は石敷遺跡第5図10と、同様に第8図10は第5図9と類似する。

これ等の土器群と共に、17～22の沈線文系土器が出土している。17、18は集合鋸歯状沈線と押引沈線文を併施文し、上福万遺跡第3図20、24と連鎖する。19は刻みを持つ縦位の隆帯区画後、集合太沈線文を横位に施文するもので、下荒田遺跡第17図3に類似する。20は集合沈線を菱形状に施文しており、大形の菱形押型文の効果が窺える。21は波状口縁で横位分割された文様帯に集合の弧状文を施文するものであり、手向山式の新しい段階（横手1998）のモチーフに類似する。また、22は頸部に波状沈線を施文し、口縁部に集合押引沈線でモチーフを描くもので、田戸上層式に系譜の辿れる要素であると共に、平椀式との関連も考えられる土器である。また、本遺跡では撚糸文土器が殆ど無く、条痕整形が卓越して存在しており、絡条体圧痕文は存在しないようである。

以上、宮の平遺跡出土土器群は高山寺式終末段階、穂谷式、宮の平式、沈線文系終末期の土器群がほぼ共存関係として捉えられ、宮の平式の提唱者である岡田憲一氏も述べるように（岡田2003）、押型文土器最終末の宮の平式がどの段階の沈線文土器と平行関係にあるかが問題となる。また、平椀式との関係はどのようになるのか、上福万遺跡例とも絡めて問題となろう。土器群全体は石敷遺跡と近似した様相を示し、判ノ木山西式の影響が薄い点が異なる。

3 判ノ木山西式系沈線文土器の検討

〈笹見原遺跡〉

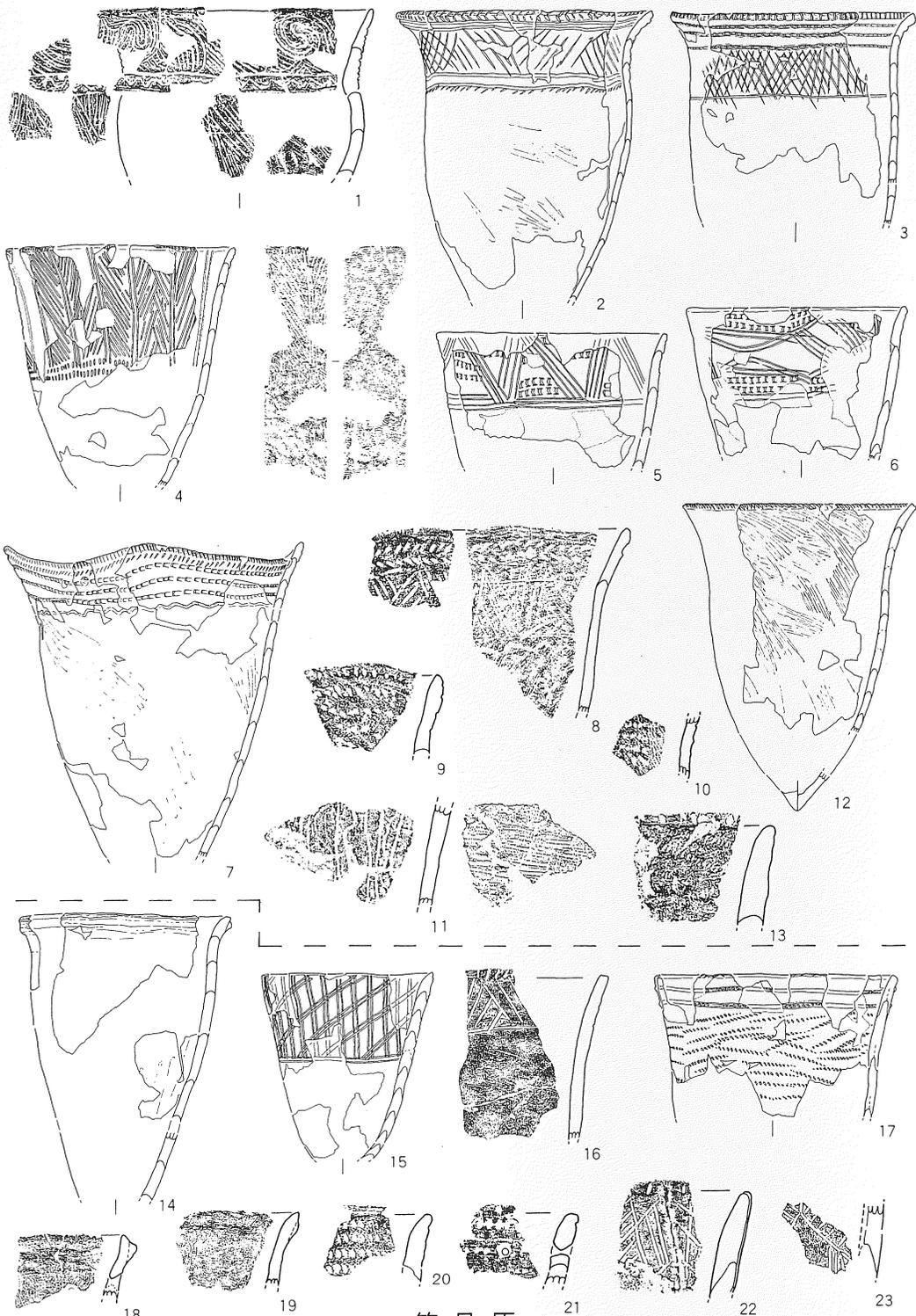
笹見原遺跡は山梨県忍野村に位置し（西本2003）、早期中葉の判ノ木山西式に比定される良好な土器群と、早期後半の清水柳E式土器が出土している（第9図）。報告書において、出土土器群の詳細な検討が行われており、土器群の詳細はそちらに譲るとして、ここでは総体としての位相を検討する。

沈線文を施文する土器群は、胴上半部に曲線文を描き、下半部に集合鋸歯状沈線文を施文するもの（1）、集合鋸歯状沈線文や格子目文を施文するもの（2、3、8）、縦位区画線と集合鋸歯状沈線文を組み合わせるもの（4）、集合沈線の鋸歯状区画や弧状区画を施し、連続刺突文を充填施文するもの（5、6）、横位の押引沈線文や刺突文を施文するもの（7、9）縦位の沈線と波状沈線を組み合わせるもの（11）、条線文と刺突文を併施文するもの（10）、平行沈線で幅広文様帯を区画し、間隔の狭い縦位区画と斜行沈線を組み合わせたモチーフを描くもの（15）、口縁部の幅狭文様帯に集合鋸歯状文を描くもの（16）がある。他に、擦痕状整形の無文土器（12）、器面を磨く無文土器（14、18、19）、斜位の絡条体圧痕文を施文するもの（13）、横位の絡条体圧痕文を施文するもの（20、21）、いわゆる清水柳E式土器（17）、細隆起線と沈線文を組み合わせるもの（22）、沈線区画内に沈線文を充填施文するもの（23）などの土器群が存在する。

報告中の考察では、沈線の曲線文を施文する1は、下荒田遺跡出土の土器群と比較されて田戸上層式新段階に近い位置付が与えられている（三田村2003）。4は判ノ木山西遺跡第6図33と構成が類似し、判ノ木山西式の典型例と言えよう。2、3の大きく外反する口縁部は押型文土器の器形の影響と思われ、2の文様帯下端区画下にはトメ文を施し、判ノ木山西式と連鎖する。また、3の口縁部には3列の押引沈線文を施文することから、7の土器と共通し、相木式とも連鎖する。6の上下対弧状モチーフは石敷遺跡第5図25と類似する。蛇行沈線文も石敷遺跡第5図36と連鎖する。1、7、8は頸部に波状沈線を持つが、それぞれの主要モチーフは異なっており、これ等の土器群が型式学的連鎖で一括性の高い土器群であることを良く示していよう。その場合、1のみ田戸上層式新段階に位置付けることは難しく、むしろ今まで検討してきた土器群と同様に、押型文終末期の影響が窺われる田戸上層式直後段階に位置付けられる可能性が高い。

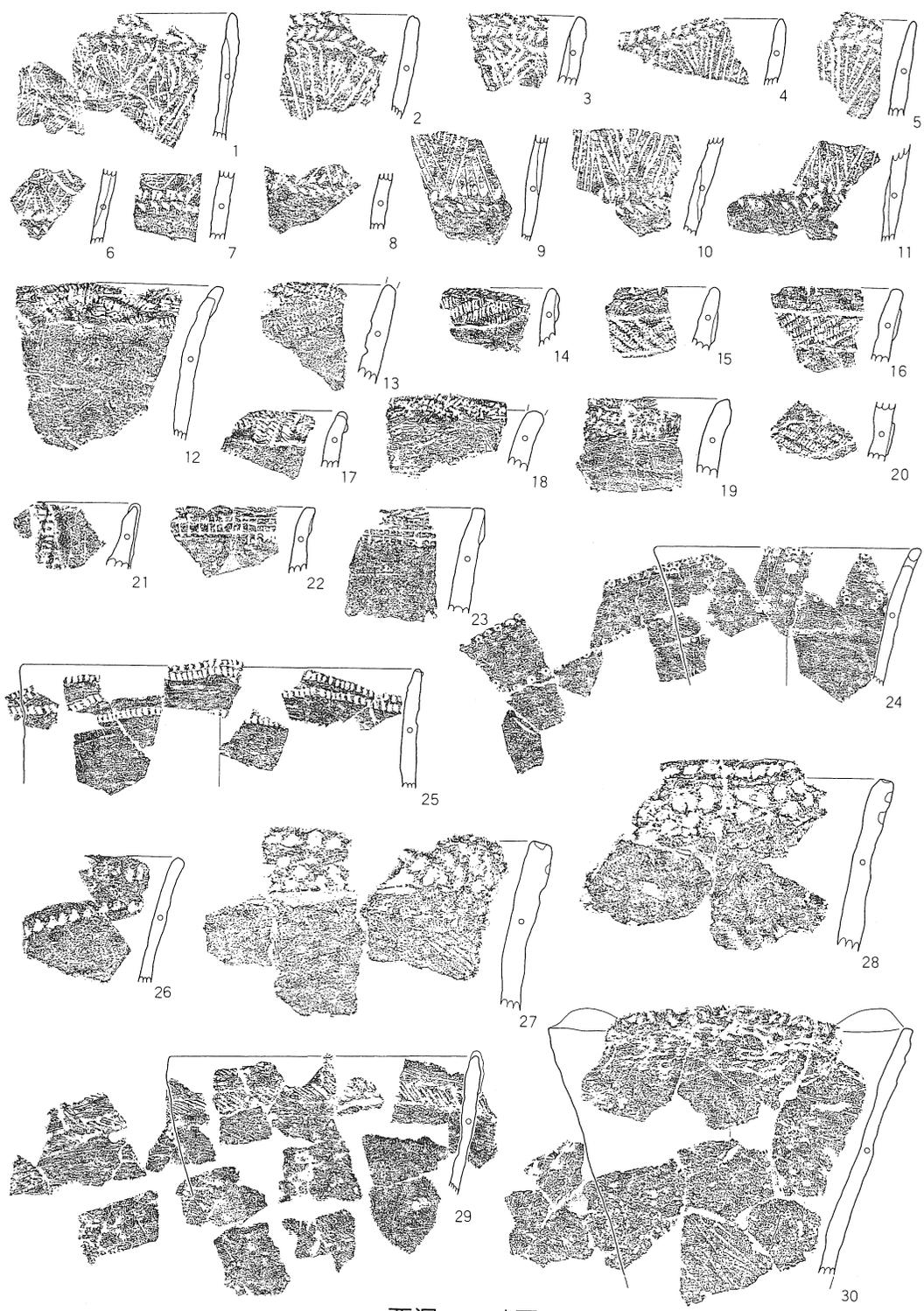
一方、絡条体圧痕文を施文する土器群は、13が口縁部に斜位施文し位置付けが微妙であるが、他は横位線状施文し、17は清水柳E式であることから、明らかに沈線文系土器群より新しく位置付けられよう。17の胴部の線状絡条体圧痕文は大きな菱形もしくは入り組み菱形状に構成されており、モチーフを描いているものと思われる。この菱形状の絡条体圧痕文の祖形は、黒田向林出土第4図13の入り組み菱形状の撚糸文に求めることが可能であろう。

また、無文土器14は口縁部の造りが古屋敷遺跡例（阿部1990）と酷似し、清水柳E式の組成である可能性が高い。また、文様帯を広く区画する15、集合鋸歯状沈線文を施文する16は器面整形が清水柳E式と同様で、判ノ木山西式とは異なる。縦位沈線の間隔も狭くなり、清水柳E式に組成するものと思われる。22、23は野島式段階の土器群である。



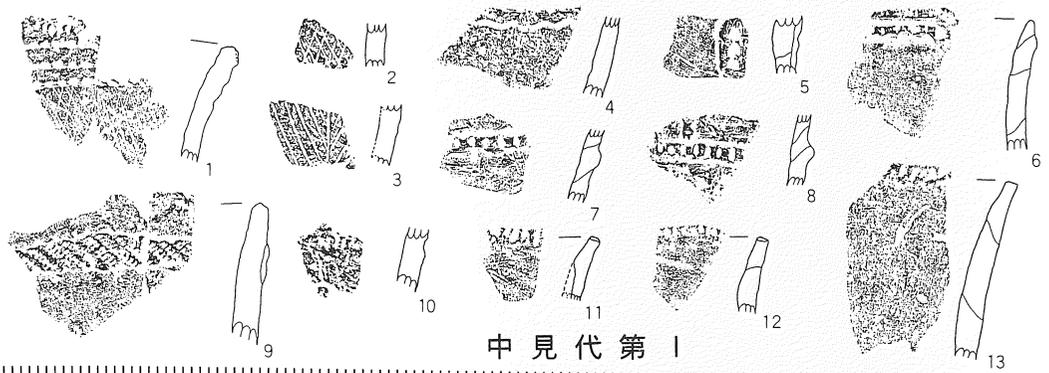
笹見原

第9図 笹見原遺跡出土土器

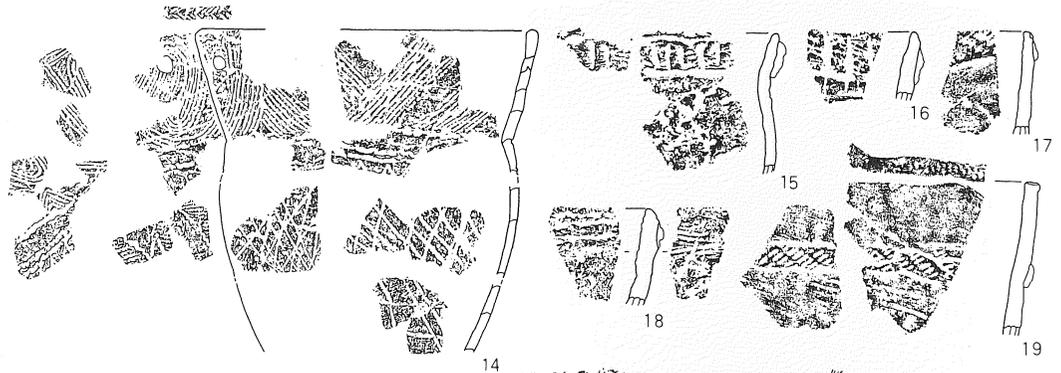


西洞 c · d 区

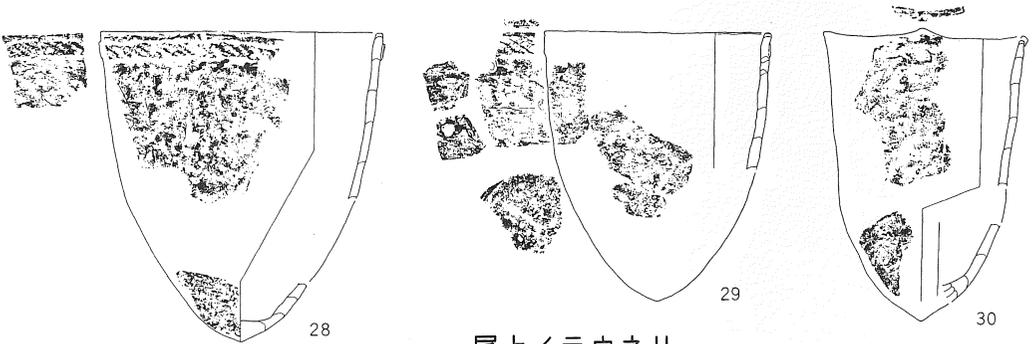
第10图 西洞遗迹 c · d 区出土土器



中見代第 I



清水柳北



尾上イラウネ II

第11図 中見代第 I 遺跡・清水柳北遺跡・尾上イラウネ II 遺跡出土土器

従って、笹見原遺跡出土土器群は大きく2時期に分けられ、この2時期が連続するか、断絶するかが問題となろう。その問題の解決に繋がる遺跡に、西洞遺跡がある

〈西洞遺跡c・d区〉

西洞遺跡c・d区は静岡県沼津市に所在し(池谷2002)、判ノ木山西式系の沈線文土器と、絡条体圧痕文を特徴とする子母口式土器が出土している遺跡である(第10図)。沈線文土器は崩れているが曲線文を表現するもの(1、6)、集合鋸歯状沈線文を施文するもの(2~5、7~11)があり、文様帯の上下端は矢羽根状の刻みを施している。子母口式に比定される土器群は絡条体圧痕文を口縁部に施文するもの(12~20)、垂下する隆帯上に刻み状に施文するもの(21)がある。また、本来絡条体圧痕文を施文する部位の口縁部肥厚帯に横位2条の沈線を巡らし、縦位の短沈線を刻み状に垂下するもの(22、23)も存在する。他に、押引状の角状刺突文を口縁部に施すもの(25、26)、円形刺突文を口縁部に廻らし、部分的に口縁部からも垂下させて区画するもの(24)、円形状の粗い刺突文を肥厚状の口縁部に施文するもの(27、28)、細かな刻みを施す逆T状字状隆帯を施文するもの(29)、半截竹管内面の押引状刺突文で不明瞭なモチーフを施文するもの(30)が存在する。

報告では1~11の沈線文土器は田戸上層式の新しい段階に、29は早期末に位置付けられているが、沈線文土器と子母口式が共伴する好例として認識した。まず、沈線文土器は笹見原遺跡例と比較すると、矢羽根状刺突文を施文するが口縁の外反が弱く、曲線モチーフが崩れているなど、基本形を保ちつつもやや後出の感じを受ける。また、22、23は穂谷式や宮の平式土器の肥厚帯口縁部と同様な処理が行われており、2本沈線を廻らすなど基本を忠実に模倣している。土器群の造りが異なるため、押型文終末段階との時間差が感じられるが、ほぼ大枠では同じ枠組みで繰れ、同じステージで語れる土器群と思われる。

絡条体圧痕文土器は、口縁部の肥厚帯に施文するもの(12、14、17、19)と、口縁部に低隆帯を廻らせて施文するもの(15、16)とがある。後者は、この隆帯部分に背割状沈線、縦位刻み、横位山形押型文などを施すと、穂谷式の低隆帯に類似する。先の口縁部肥厚帯沈線区画文土器と同様に、穂谷式や宮の平式、相木式などとほぼ同時期か、またはその直後型式となる可能性が高い。

また、西洞遺跡c・d区からは、いわゆる清水柳E式土器は出土していない。従って、笹見原遺跡と西洞遺跡c・d区の比較から、(笹見原遺跡の判ノ木山西式・西洞遺跡の判ノ木山西式+子母口式)→(清水柳E式)へという変遷が導き出せる。また、笹見原遺跡の判ノ木山西式に古相を見る立場からでは、{(笹見原遺跡判ノ木山西式古段階)→(西洞遺跡判ノ木山西式新段階+子母口式)}→清水柳E式となろう。前者ならば笹見原遺跡で2時期に分けられた土器群に連続的な変化を認めることになるが、後者ならば断絶を想定せざるを得ない。

黒田向林遺跡における清水柳E式的な絡条体圧痕文の成立過程や、入り組み菱形捺糸文から絡条体圧痕文の菱形文への変化を考慮すると、笹見原遺跡の2時期に分けられた土器群に、大きな断絶を認めることは難しい。また、西洞遺跡でも清水柳E式的な絡条体圧痕文が存在しないことも考慮すると、現時点では笹見原遺跡と西洞遺跡はほぼ同じ段階の土器群であるか、非常に近似的な土器群であると認識して置きたい。ここでも、絡条体圧痕文は大きな鍵を握っている。

4 東海地方の絡条体圧痕文土器の検討

〈西洞遺跡段階の絡条体圧痕文土器〉

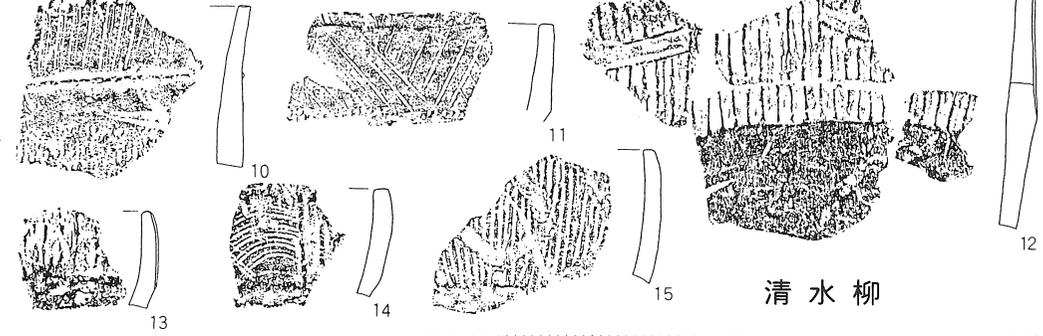
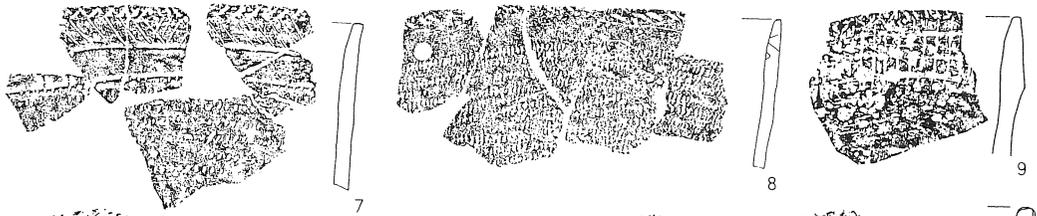
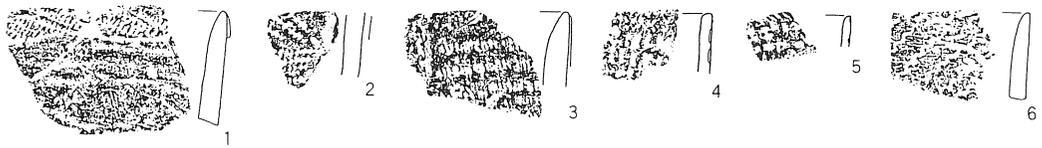
前節で導き出した東海地方の子母口式段階の土器群は、少ないながら類例が増加してきている。神奈川考古主催「早期末前期初頭の諸問題」のシンポジウム（神奈川考古同人会1983）以降、絡条体圧痕文土器の多くが早期末に位置付けられてきた傾向が指摘できるが、そのような状況の中、西洞遺跡の成果は子母口式段階の土器群の存在を明らかにしたのものとして評価される。

西洞遺跡c・d区と同様な土器群の組み合わせを持つ遺跡に、沼津市中身代第I遺跡（高尾1989）がある（第11図1～13）。出土土器は口縁部に押引沈線を3列施文し、細かな斜格子目文を描き、口唇部にはへら状工具で絡条体圧痕文状の刻みを施している。2は同一固体で、3は判ノ木山西式に比定されよう。4は横位の波状沈線を施文する。9は口唇下に低隆帯を廻らし、斜位の絡条体圧痕文を密に施す。10は押引沈線を施文する。隆帯文土器は縦位に垂下するもの（5）や廻らすもの（6）があり、早期末の資料も混じっている可能性がある。7、8は神之木台式に比定されている。他に貝殻腹縁文土器もあり、時期比定が難しい土器群である。

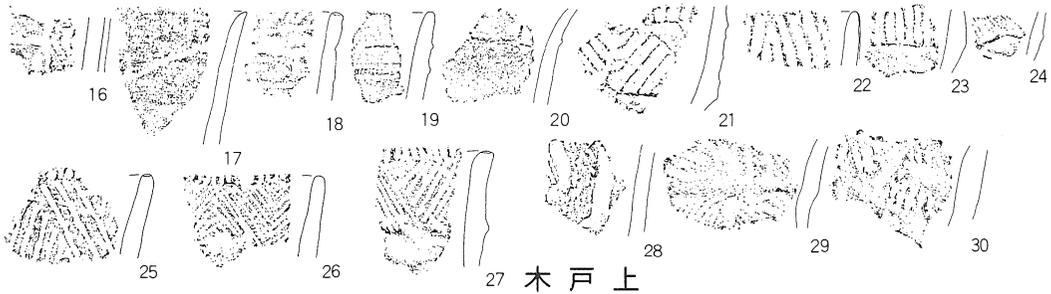
沼津市清水柳北遺跡（関野1990）では、早期各時期の土器群が出土している中で、該期の可能性のある土器群を抽出した（第11図14～27）。14は田戸上層式新段階の土器として著名であり、集合沈線の渦巻状モチーフは、笹見原遺跡第9図1と類似する。この土器で気掛かりなのは器形外の胴部破片として貼付されている拓本に、縄文と波状沈線を垂下するモチーフを持つ拓本が貼られていることである。不鮮明であるが縄文と思われる部分が見られ、小波状沈線は垂下する構成に貼られている。口縁部から頸部にかけての部分で、どこかに縄文が施文されている部分が存在するのであろうか。あるいは、全くの誤認なのであろうか、実見していないので想像の域を出ない。14と同様の時期に位置付けられる下荒田遺跡でも、波状沈線を施す縄文土器が出土している（第17図10、11）。これらの沈線と縄文を施す破片の文様構成が縦位構成であるとすれば、上福万遺跡第3図38の胴部破片の縦位綾線り縄文に類似しており、平椀式の位相も推定されるのであるが、推測の域を出ない。

また、宮の平式に類似する口縁部肥厚帯を持つ土器群では、縦位の刻みを施すもの（15、16）、同様な口縁部形態で絡条体圧痕文を施文するもの（17）、背割状の沈線を施文するもの（18）がある。絡条体圧痕文を施文するものでは、頸部に隆帯を廻らし斜位の絡条体圧痕文を施文するもの（19）、口縁部に斜位の絡条体圧痕文を施文するもの（20）、上下に集合沈線で曲線モチーフを併施文する破片の隆帯上に施文するもの（21）がある。21は上福万遺跡第3図19を髣髴させる。さらに、22の判ノ木山西式土器が存在している。これ等の土器群の組み合わせは宮の平遺跡、笹原遺跡、西洞遺跡出土土器群の総体と連鎖することになり、非常に短い時間内に位置付けられる土器群であることが明らかとなろう。

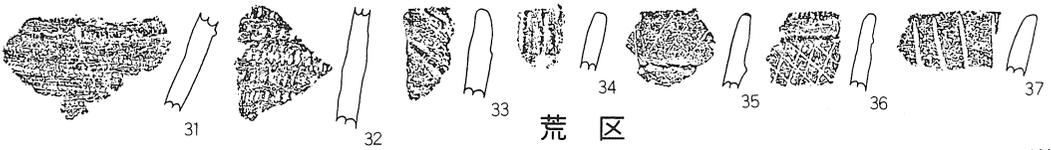
口縁部に低隆帯を廻らし絡条体圧痕文を施文する好例は、尾上イラウネ遺跡II（関野1992）でも出土しており（第11図28、29）、隆帯の貼付位置から宮の平式、穂谷式に連鎖すると思われる。同様な絡条体圧痕文土器は三島市徳倉片平山J遺跡（寺田1992）からも出土しており、他に沈線文の土器はなく、横位線状絡条体圧痕文土器と無文土器が組成している。



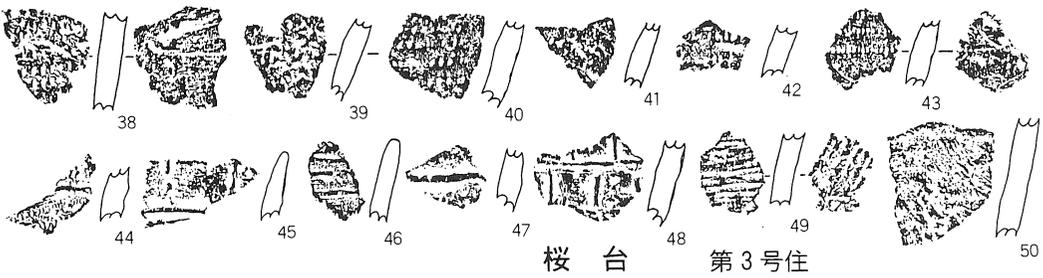
清水柳



木戸上

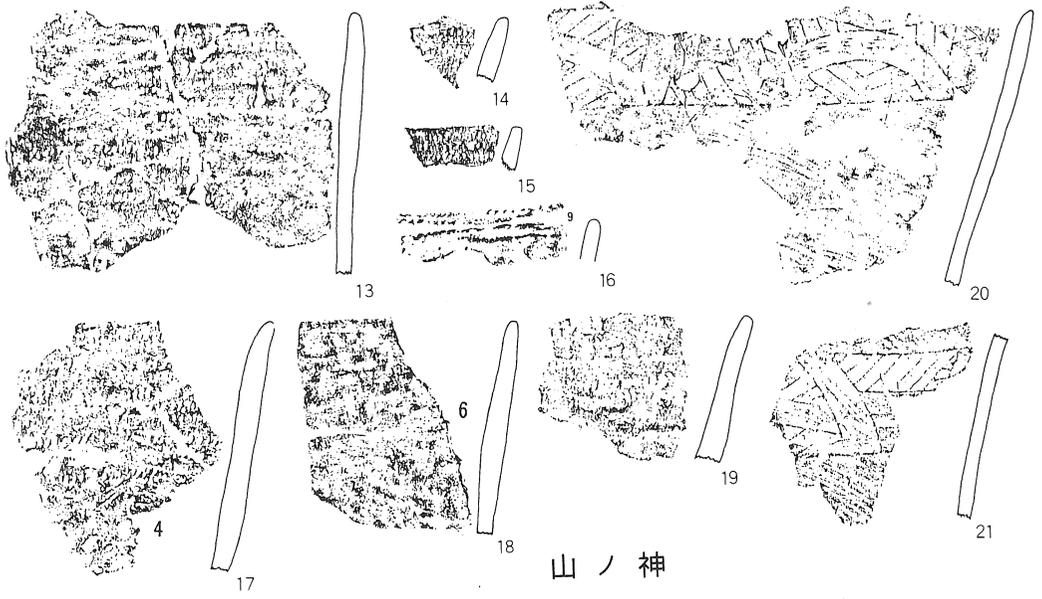
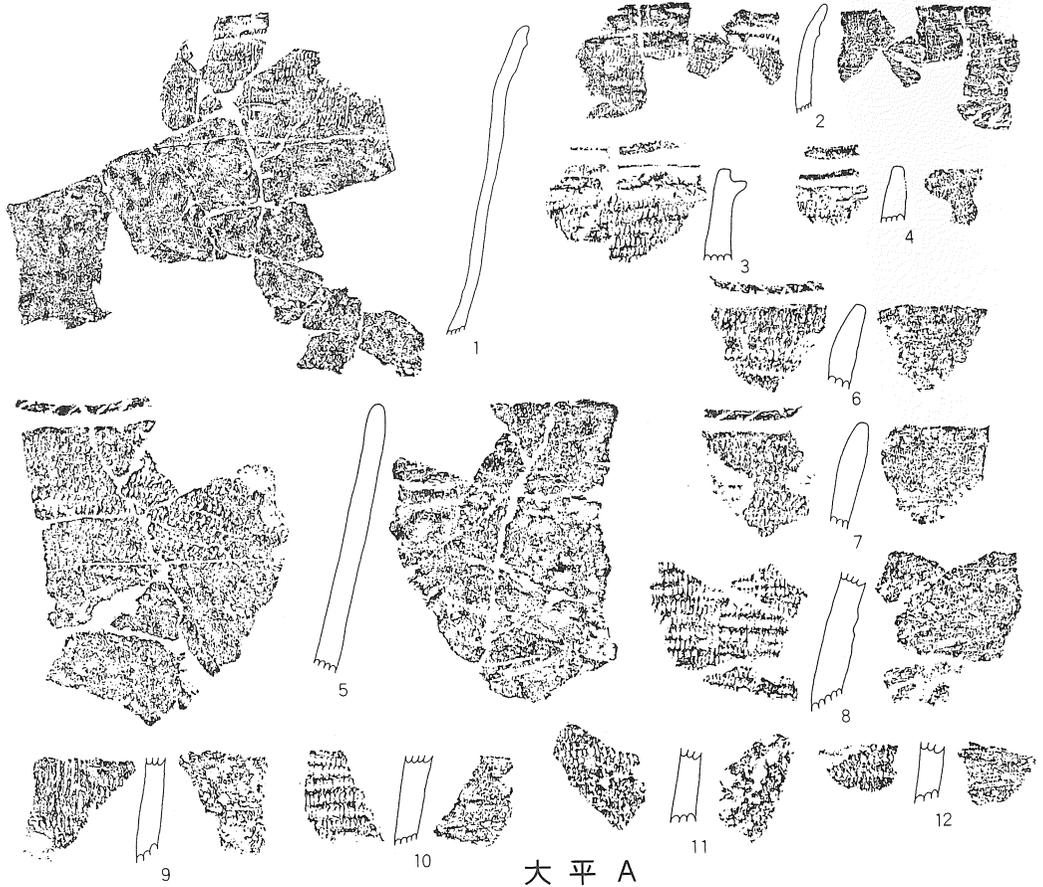


荒区

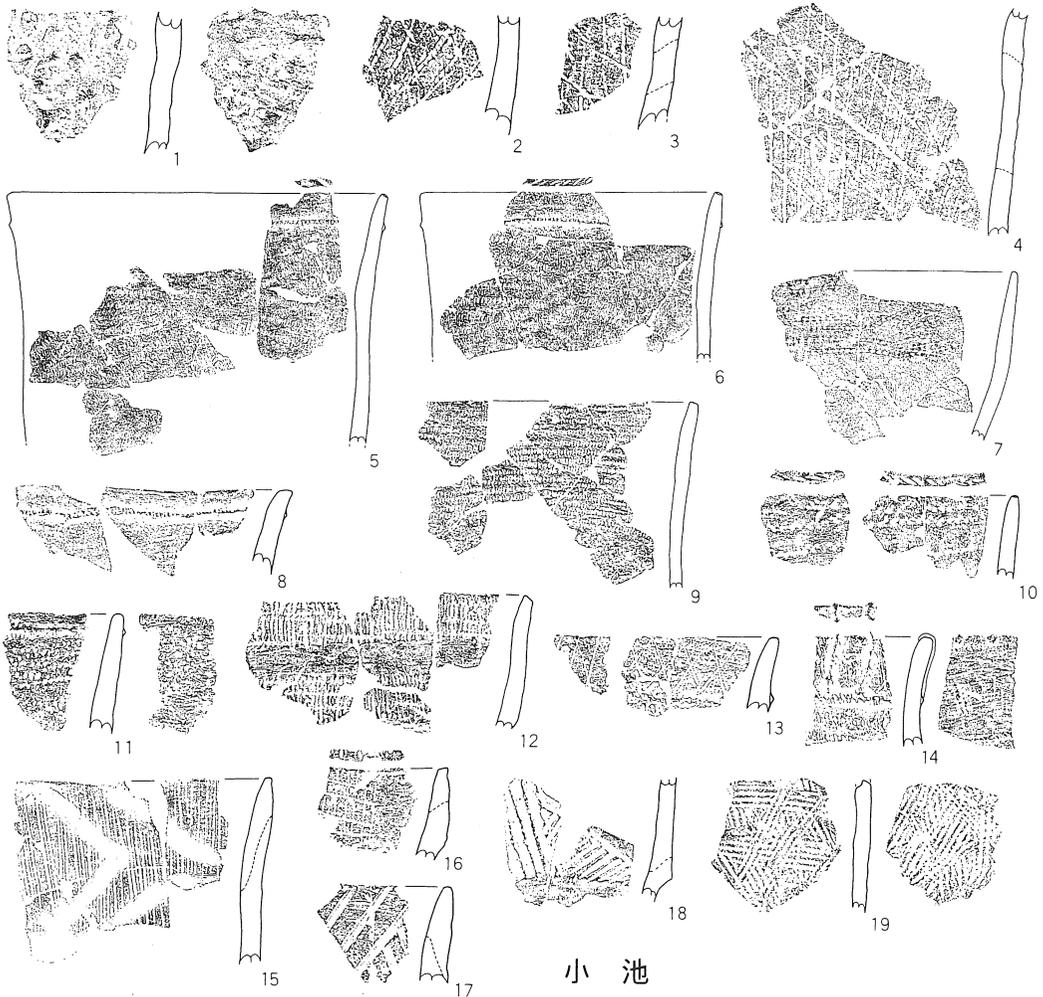


桜台 第3号住

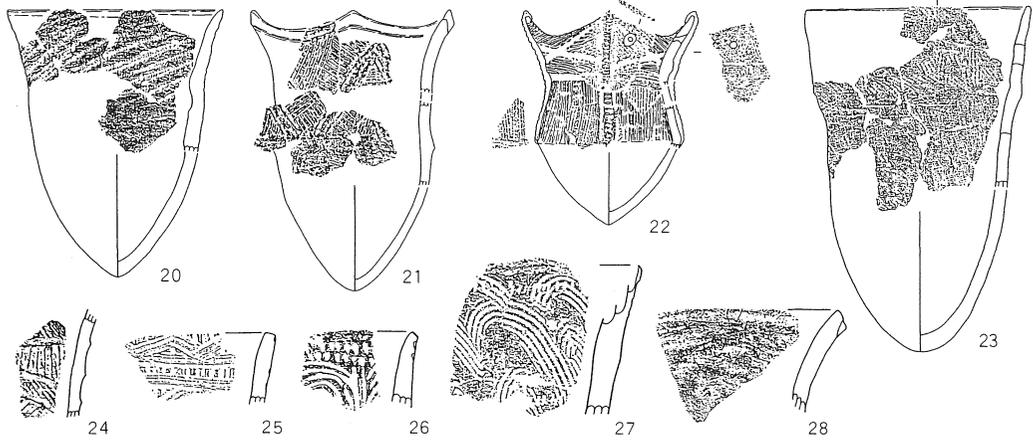
第12図 清水柳遺跡・木戸上遺跡・荒区遺跡・桜台遺跡出土土器



第13図 大平A遺跡・山ノ神遺跡出土土器



小池



古屋敷

第14図 小池遺跡・古屋敷遺跡出土土器

清水柳北遺跡では、西洞遺跡段階の後、清水柳E式へと変遷するものと思われる（第11図23～27）。23は口縁部にT字状細隆起線を施文し、斜位沈線を施文し、胴部に横位の線状絡条体圧痕文を施文する、典型的な清水柳E式土器（23）がある。また、縦位沈線文土器（24）や格子目沈線文土器（25）、集合鋸歯状沈線文土器（26）、細隆起線文土器（27）も存在する。

同様に清水柳遺跡（瀬川1976）では（第12図1～15）、1～6の西洞遺跡段階、10～15の清水柳E式段階の土器群を抽出することが可能である。しかし、ここで問題となるのは、西洞遺跡段階における横位施文の線状絡条体圧痕文土器の存否である。2は口縁部か胴部の破片かは判然としないが、低平な隆帯上に斜位の絡条体圧痕文を施し、胴部に線状絡条体圧痕文を施文するもので、西洞遺跡段階と判断した。3は隆起線が垂下し、口縁部から横位線状絡条体圧痕文を施文するもので、2と同じ位置付けを与えた。これ等の土器群が、西洞遺跡段階より後出の清水柳E式内での新旧の様相を示している可能性もあるが、証左となるような資料は無い。今のところ、黒田向林の絡条体圧痕文を根拠として、西洞遺跡段階に一部存在しているものと捉えておきたい。

〈清水柳E式の検討〉

清水柳E式は子母口式を検討する中で、安孫子昭二氏によって命名された駿豆地方を中心とする絡条体圧痕文を中心とした土器群であり、子母口式の新しいところに位置付けられた土器型式である（安孫子1982）。駿豆地方の絡条体圧痕文土器については長い研究史があり、安孫子氏と瀬川裕市郎氏の論争は記憶に新しいところである。それについては、毒島正明氏が子母口式の研究史を丹念に紐解くことによってトレース作業を行っている（毒島1983）。駿豆地方においてはこの特徴的な絡条体圧痕文土器がミヲ坂第三式（江藤1939）とも木戸上式（須磨他1976、加藤2003）、大越式（山村1995）とも呼ばれてきたが、清水柳遺跡の報告（瀬川1976）後、清水柳E類土器、及び清水柳E式と呼ばれてきた経緯がある。近年、毒島氏はこれ等の土器群に対して、学史を尊重してミヲ坂式の使用を再提唱した（毒島2004）。

これ等の線状絡条体圧痕文は、今日施文手法等が再検討されて子母口式との相違が指摘され、改めて子母口式併行の土器群として位置付ける見解も出されている（下島2003）が、編年の位置付けが確定されているわけではない。ここでは、一般的な呼称となっている清水柳E式という名称を使用し、絡条体圧痕文のみに限定するのではなく、時間的な幅を持たせ、組成するであろう沈線文系の土器群をも含めて清水柳E式を使用することにする。

学史的な変遷については諸氏の論考（須磨他1976、毒島1983、加藤2003、下島2003）に譲るとして、これらの絡条体圧痕文土器は細隆起線文土器と組成することが注目されてきた。沼津市荒区遺跡（小野1971）では（第12図31～37）、線状絡条体圧痕文（31、32）、細隆起線文（33、34、）、細隆起線文と沈線文を組み合わせたもの（35、36）、沈線文（37）を施文する土器群が出土している。35は胴部に線状絡条体圧痕文を施文する可能性が高い。36、37は判ノ木山西式の系譜下にある沈線文を施文する。修善寺町桜台遺跡（小野1976）の第3号住居跡（第12図38～50）からも、線状絡条体圧痕文（38～43）、絡条体圧痕文と細隆起線文を併施文するもの（44）、細隆起線文のもの（45～48）が出土し、これ等の土器群に対して子母口式終末から野島式古段階にかけての位置付けが成されてきた。また、沼津市木戸上遺跡（須磨他1976）では

(第12図16~30)、絡条体圧痕文を施文するもの(16~18)、細隆起線文と組み合わせられるもの(19、20)と、細隆起線文や沈線文を施文する野島式に類似する土器群(21~30)が伴出することから、絡条体圧痕文土器を野島式に併行する在地の土器群として位置付け、田戸上層式併行とされていた木戸上式の、編年の位置付けの変更の必要性が説かれた。絡条体圧痕文土器は何段階かの変遷が示唆され、最終的には瀬川氏はこれ等に10段階の変遷を与えた(瀬川1982)。

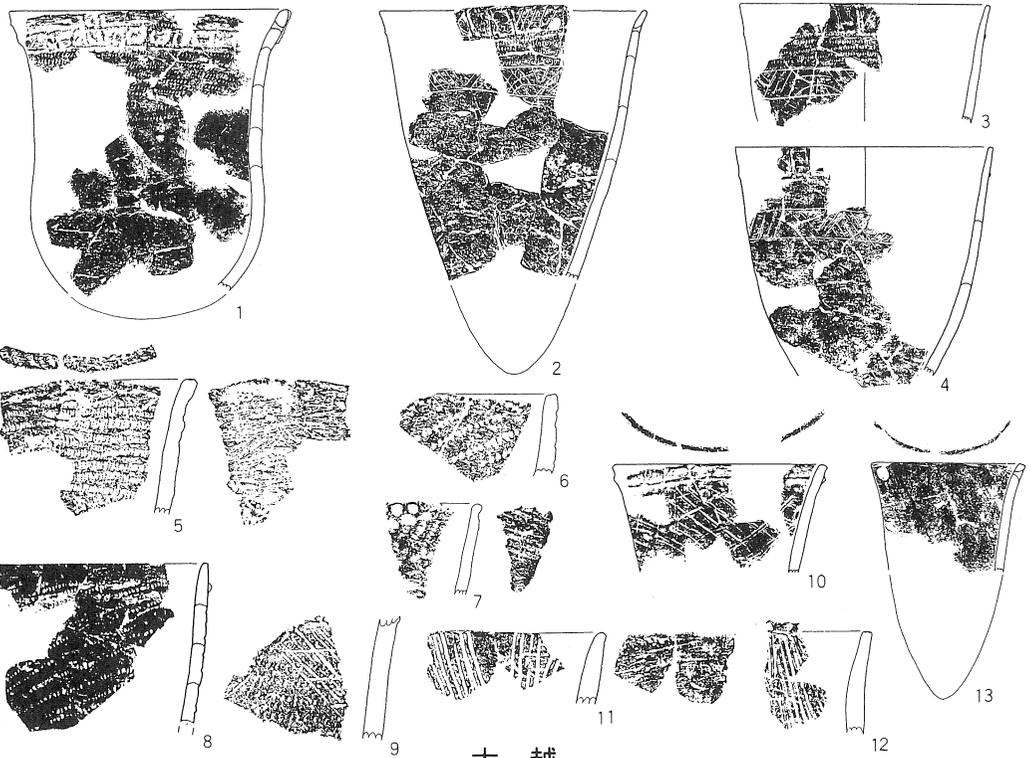
ここで、線状絡条体圧痕文と組成する土器群を明らかにしつつ、幾つかの遺跡を検討する。先に、清水柳遺跡、清水柳北遺跡で土器群の時期差を検討してバリエーションを抽出したが、これから検討する遺跡は、比較的時間的にまとまりのある土器群を出土している。

大仁町大平A遺跡(小野1975)では(第13図1~12)は口唇下に細隆起線を廻らせ、文様帯の下端を沈線で区画し、間隔を開けて縦位の2本沈線を口唇下から文様帯下端区画まで垂下させ、区画内に線状絡条体圧痕文を密に施文するもの(1)、文様帯下端を沈線で区画するが、口縁部に細隆起線を施文しないもの(5)、口唇直下にやや太い隆起線を廻らし、線状絡条体圧痕文土器を施文するもの(3)、口唇下に細隆起線文を廻らし、線状絡条体圧痕文を施文するもの(2)、口縁部から絡条体圧痕文のみを施文するもの(4、6~12)がある。細隆起線文土器や沈線文土器の存在は不明である。御殿場市山ノ神遺跡(第13図13~21)は口縁部から横位の線状絡条体圧痕文を施文するのみの土器(13~19)と、細隆起線のみで弧状のモチーフを描く土器(20、21)が伴出した事で著明である(小野1975)。20は口縁部を欠損している。やはり、沈線文土器の存在は不明である。

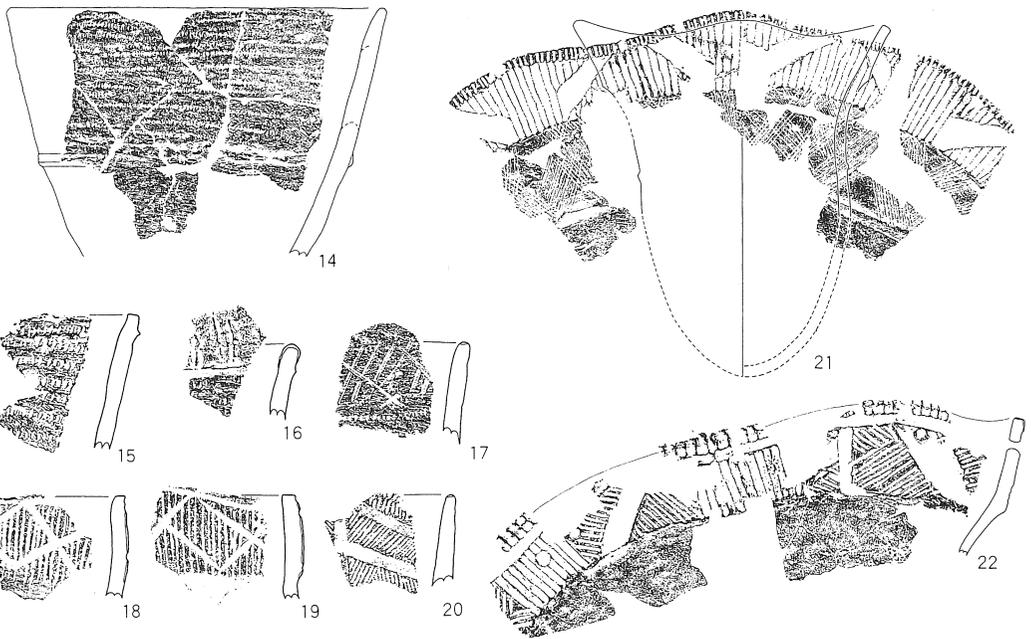
近年では静岡県三島市内の小池遺跡(笹原1998)、徳倉B遺跡(仲家1988)、熱海市大越遺跡(山村1995)で良好な土器群が出土している。

小池遺跡(第14図1~19)では高山寺式終末段階と思われる楕円文土器(1)と、格子目撚糸文土器(2~4)が出土しており、他は清水柳E式のまとまった組成を示している。絡条体圧痕文土器は口縁部に細隆起線を廻らし、菱形状の線状絡条体圧痕文を施文するもの(5、6)、口唇下に細隆起線文を廻らして、胴部に線状絡条体圧痕文を施文するだけのもの(8、9、11)、絡条体圧痕文のみを口縁部から胴上半部に施文するもの(9)、口縁部に細隆起線を廻らし、沈線格子目文(13)や細隆起線文を垂下し(14)、胴部に線状絡条体圧痕文を施文するものなどがある。12は器形の括れで幅広口縁部文様帯が形成され、線状絡条体圧痕文を半置反転状に施文し、2段の縦位沈線状モチーフを口縁部に施文する。

7は貝殻腹縁文を横位多段に施文し、一部を鋸歯状に交差施文させ菱形状のモチーフを構成しており、線状絡条体圧痕文土器で菱形文を描く5、6に共通するモチーフ構成を採る。早期末の位置付けが考えられているが、文様構成上絡条体圧痕文土器と同じ段階の土器と思われる。また、10は刺突文を横位多段に施文し、口縁部に部分的に斜位に垂下する刺突文を施す。やはり同じ段階に位置付けられよう。沈線文土器では縦位沈線文を地文に16は幅狭な口縁部文様帯に格子目状沈線文を、15は横羽状の大柄な指頭状凹線を施している。17は集合鋸歯状沈線、18は集合細隆起線と集合沈線を組み合わせた鋸歯状文を施文する。12、16、18は頸部に段もしくは括れを持つもので、胴部は平滑な器面を呈するものである。絡条体圧痕文を施文する土器では、口縁部を

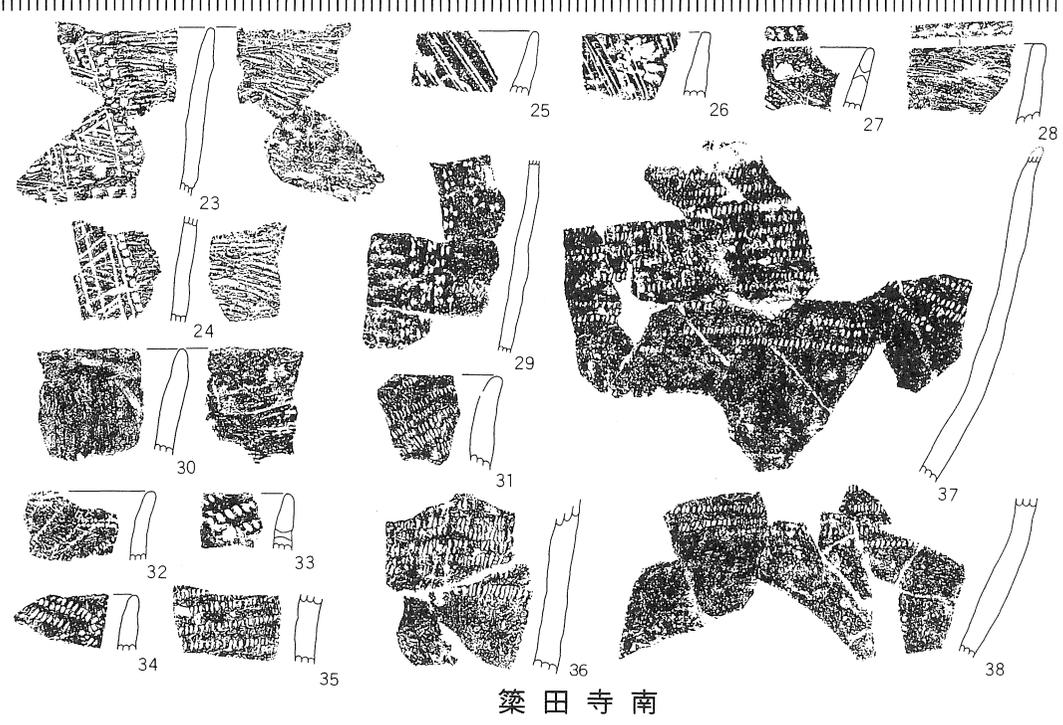
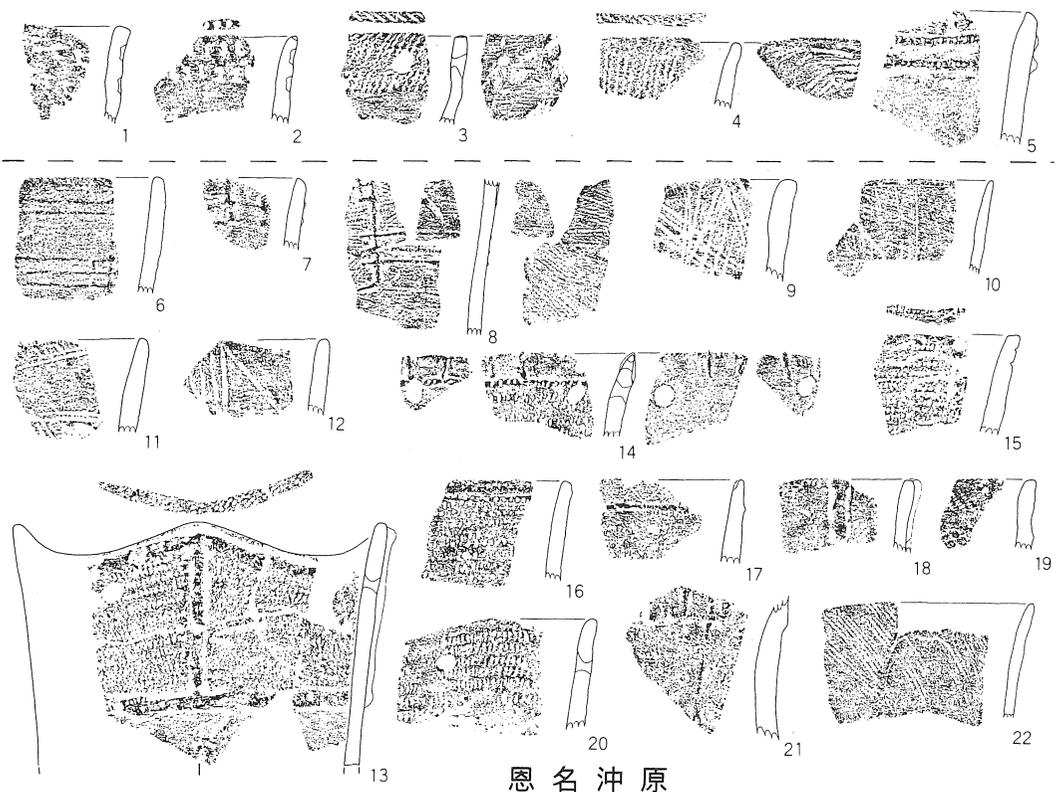


大越



徳倉 B

第15図 大越遺跡・徳倉B遺跡出土土器



第16図 恩名沖原遺跡・築田寺南遺跡出土土器

段状に成形するものは見当たらない。

徳倉B遺跡（第15図14～22）は小池遺跡に隣接し、各種の絡条体圧痕文土器（14～17）、沈線文土器（18～20）、集合細隆起線と集合沈線文を併施文する土器（21、22）が出土している。14は文様帯の下端を隆帯で区画しており、細隆起線を施す16とタイプが異なる。15は口唇下に細隆起線を廻らすもので、これらの絡条体圧痕文土器が同一時期のものかが問題となろう。また、沈線文土器20はやや後出の感があるが、18、19は小池遺跡第14図15と共通の土器で、徳倉B遺跡21、22とも同一時期のものとして認定されよう。

富士山の北側に位置する山梨県富士吉田市の古屋敷遺跡（阿部1990）では（第14図20～28）、やや斜めに施文した線状絡条体圧痕文土器（20）と、野島式土器（21、22、24）、条線文を施文する土器（25～27）、縄文土器（23）、無文土器（28）が出土している。20～28の土器群の共時性は、神奈川県茅ヶ崎市臼久保遺跡（松田1999）J 1号住居跡出土の一括土器群が保障している。

さらに沼津市の東へ渡った熱海市大越遺跡では（第15図1～13）、各種の絡条体圧痕文土器（1～9）と沈線文土器（10～12）、無文土器（13）が出土している。1は丸底状を呈し、一見古相を窺わせるが、口縁部に2本の細隆起線文を廻らし、口唇部から2本対の細隆起線を部分的に垂下して文様帯を区切り、横位細隆起線間は等間隔の梯子状に細隆起線で区切る。胴上半部は区画線がないものの線状絡条体圧痕文を一定の幅で施文する。8は口唇下に細隆起線を廻らし、絡条体圧痕文を施文するもので、5は口唇下を区画せず一定の幅で絡条体圧痕文を施文し、口唇部にも刻み状に施文する。6、7は口縁部に斜位に、9は絡条体圧痕文地上に斜格子沈線文を施文する。2～4は細隆起線を廻らして口縁部を区画し、さらにほぼ同じ幅を沈線で横位区画し、上段に絡条体圧痕文、下段に集合鋸歯状沈線文を施文するものである。2、3は鋸歯状沈線文と弧状沈線文を重複して施文する部分があり、このモチーフは山ノ神遺跡第13図20のモチーフと連鎖する。また、沈線文を施す10は口縁部に細隆起線を廻らせ、粗い斜格子目文を描く。徳倉B遺跡第15図21の胴部の集合格子目沈線文に連鎖するのであろう。文様帯が重畳することに、特徴が見出せる。

さらに東の神奈川県厚木市に所在する恩名沖原遺跡（迫2000）では（第16図1～22）、1～5の子母口式相当の土器群も出土しているが、清水柳E式土器（14～21）がまとまって出土している。清水柳E式土器は太い隆帯で胴部を区画し、波頂部から隆帯を垂下するもの（13）、口縁下に細隆起線を廻らすもの（16）、細隆起線を口縁部に廻らし、口縁部に細隆起線（14）や鋸歯状沈線（17）を施文するもの、胴部にも細隆起線を垂下するもの（21）、線状絡条体圧痕文のみのもの（20）、口縁部に斜位の絡条体圧痕文を施文するもの（19）などがある。14は口縁裏面にも細隆起線を垂下させている。その他伴出土器として細隆起線文のみのもの（6～8）、沈線区画内に粗い充填沈線文を施文するもの（9～12）がある。10の沈線区画内充填手法から、これ等の土器群がいわゆる木の根A式段階の土器群であると判断されるが、13の太い隆帯を施文する土器がこの段階に伴うかどうかは判然としない。その様相は、徳倉B遺跡の太い隆帯を使用する第15図14と、他の土器群との関係と類似する。

さらに東の東京都町田市に所在する築田寺南遺跡（川口1986）では（第16図23～38）、子母

口式的な絡条体圧痕文土器（31～34）とともに、35～38の線状絡条体圧痕文の清水柳E式土器が出土している。伴出している土器群は、平行沈線と刺突文列を縦位の区画線状に垂下させ、沈線間に鋸歯状の区切り線を施文するもの（23、24）、同様に刺突列を垂下するもの（29）、口縁部に斜位の集合沈線文を施文するもの（25、26）などが存在する。東関東の子母口式最終末の土器群に近い様相を持っているものと思われる。

以上、線状絡条体圧痕文を施文する清水柳E式土器を中心として、伴出する土器群を検討してきた。清水柳E式の大半は、関東の子母口式終末から野島式初頭の細隆起線土器を特徴とする、木の根A式段階に対比される土器群であることが改めて明らかとなった。一部子母口式段階にまで遡る可能性のある土器群も存在する。整然と区分できないが、先にも述べた様に、黒田向林遺跡の終末段階で成立する絡条体圧痕文の系譜を引く土器群が、子母口式に併行する段階に存在する可能性は高いものと思われる。また、野島式の全般に亘って線状絡条体圧痕文が存在していたかは不明であるが、否定的にならざるを得ない。これ等の意味合いからも、この木の根A式、清水柳E式段階の土器群は沈線文系土器群終末期における変革期に相当し、筆者が従前より主張してきた条痕文系土器群への胎動期として把握されるのである。

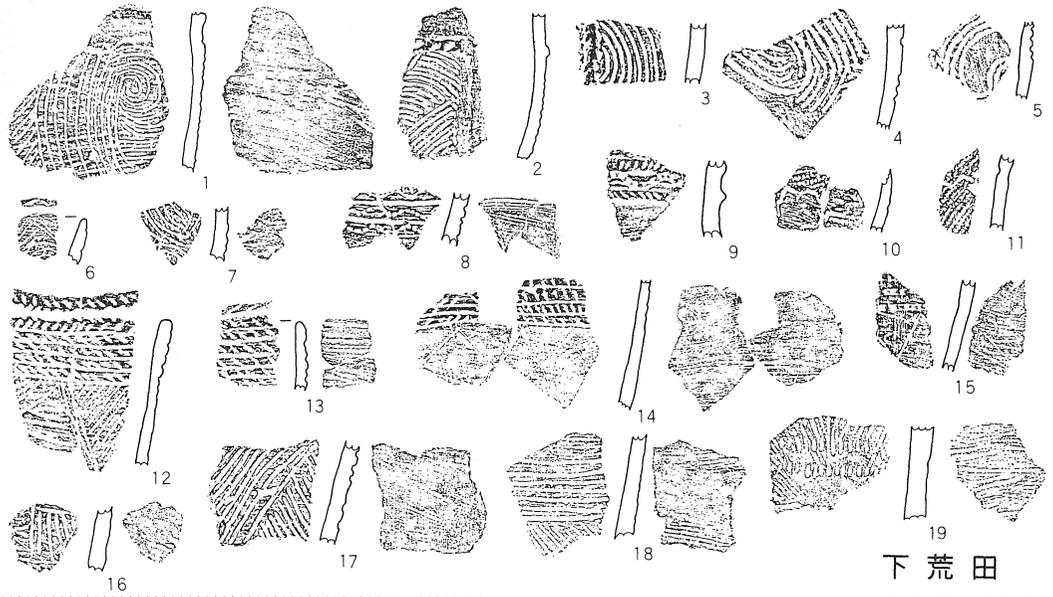
5 沈線文系土器群と絡条体圧痕文土器

〈下荒田遺跡の沈線文系土器群〉

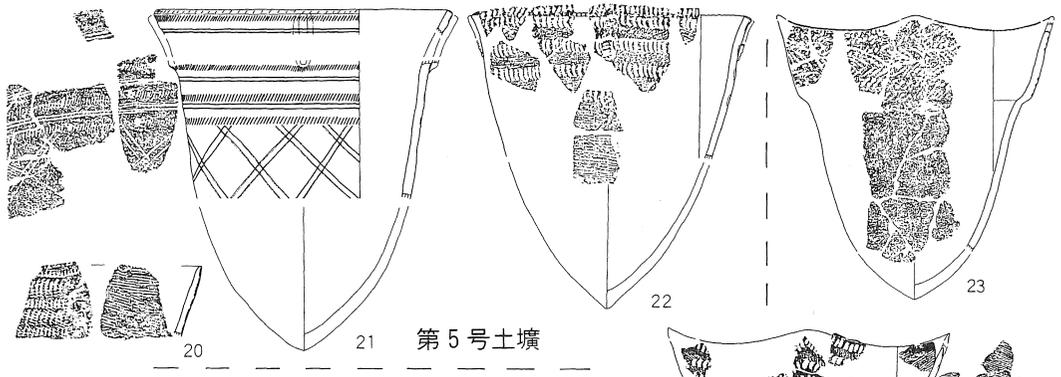
下荒田遺跡（中沢1995）は長野県御代田町に所在し、田戸上層式新段階か直後段階に位置付けられている土器群（第17図1～19）が出土した遺跡で、長野県考古学会によるシンポジウム「押型文と沈線文」開催の一要因となった遺跡である。沈線文系土器群は曲線文をモチーフとする一群（1～5、7）と、口縁部に複列の平行沈線と刺突文列を施文し、胴部に集合鋸歯状沈線文や格子目文を施文するもの（12～18）、胴部区画に鋸歯状沈線文を施文するもの（8、9）、縄文を施文し、鋸歯状沈線文を施文するもの（10、11）、判ノ木山西式（19）が組成する。12、13は複列刻帯文と呼ばれ、刺突列は貝殻腹縁文からの変化として捉えられている（阿部1997）。また、曲線文や、鋸歯状沈線文を施文するところから、田戸上層式の新段階に位置付けられることが多い。

曲線文を持つ類例は笹見原遺跡第9図1、清水柳北遺跡第11図14、上福万遺跡第3図38～42がある。複列の刺突文列と集合鋸歯状沈線文を持つ例は上福万遺跡第3図20～24、判ノ木山西式遺跡第6図19、宮の平Ⅱ遺跡第22図17などに存在し、横位の隆帯文や鋸歯状沈線文区画を持つ土器群（第3図22、第8図22）が伴出している場合が多い。また、これ等の土器群は沈線文系土器群田戸上層式終末の様相を持つと共に、穂谷式、相木式、宮の平式といった押型文系終末期の土器群と組成することが多く、個体においても各種の文様が折衷化もしくは融合しているものが多く見受けられる。

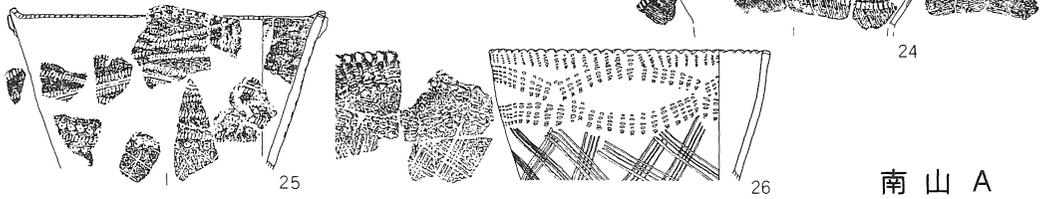
また、重要なことは、押型文系土器群の終末段階には、絡条体圧痕文の要素が既に成立していることである。絡条体圧痕文が存在しない地域では、撚糸土器も少なく、代わりに条線文土器が存在しており、沈線文系土器群の系譜を引く判ノ木山西式は、条線文土器と沈線文土器の融合した姿として成立したものと推測される。従って、条線文の施文具である櫛歯状工具を口唇部と



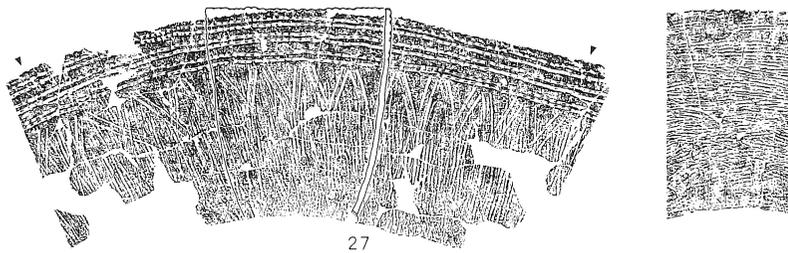
下荒田



第5号土壇

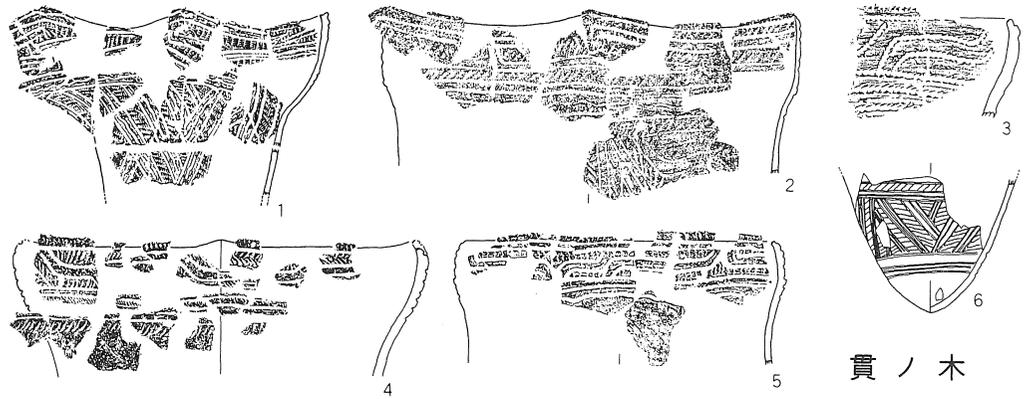


南山A

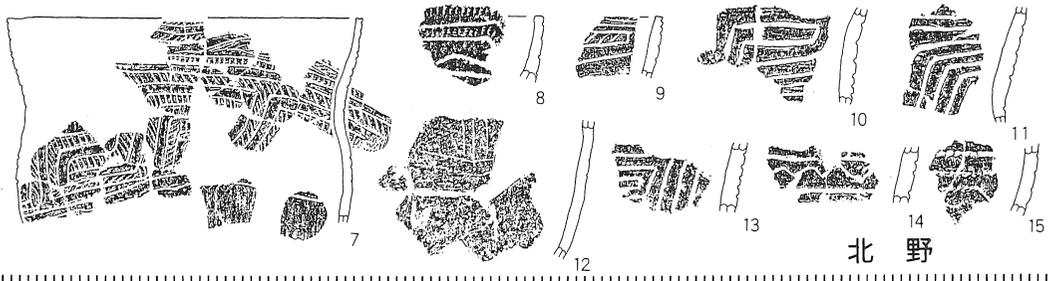


根室

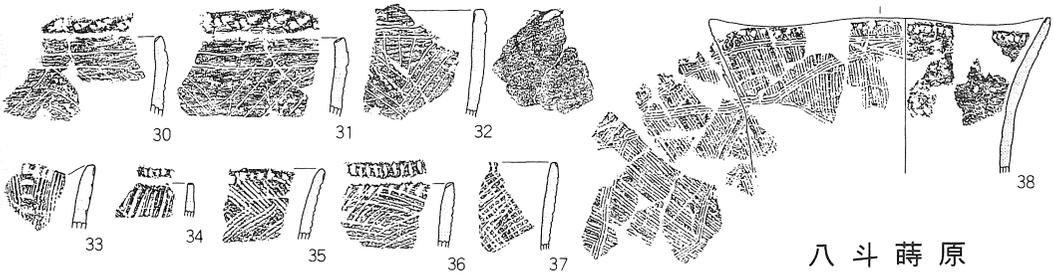
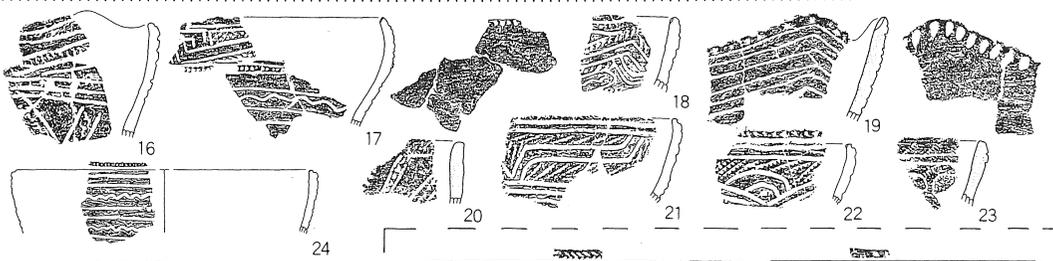
第17図 下荒田遺跡・南山A遺跡・根室遺跡出土土器



貫ノ木

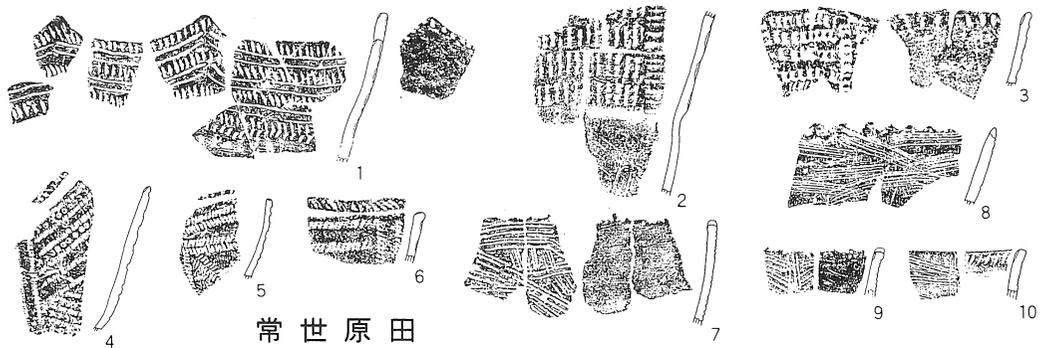


北野

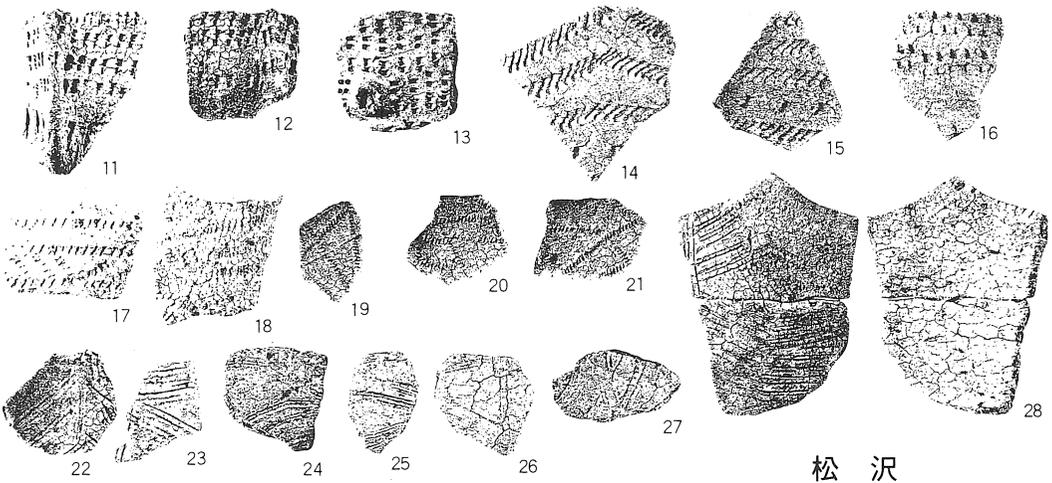


八斗蒔原

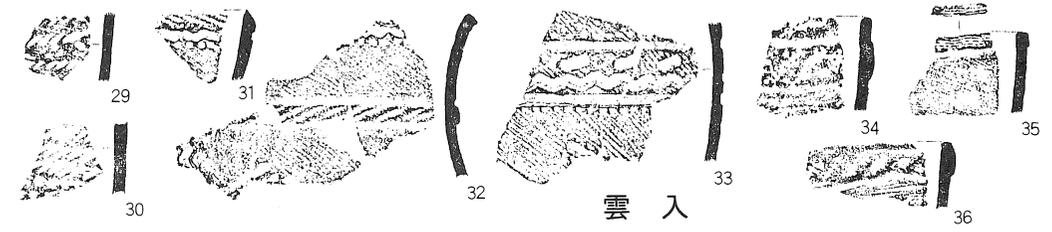
第18図 貫ノ木遺跡・北野遺跡・八斗蒔原遺跡出土土器



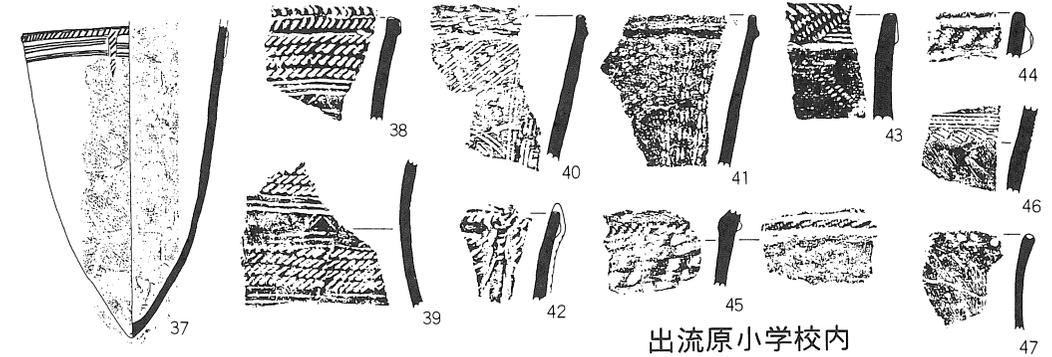
常世原田



松沢

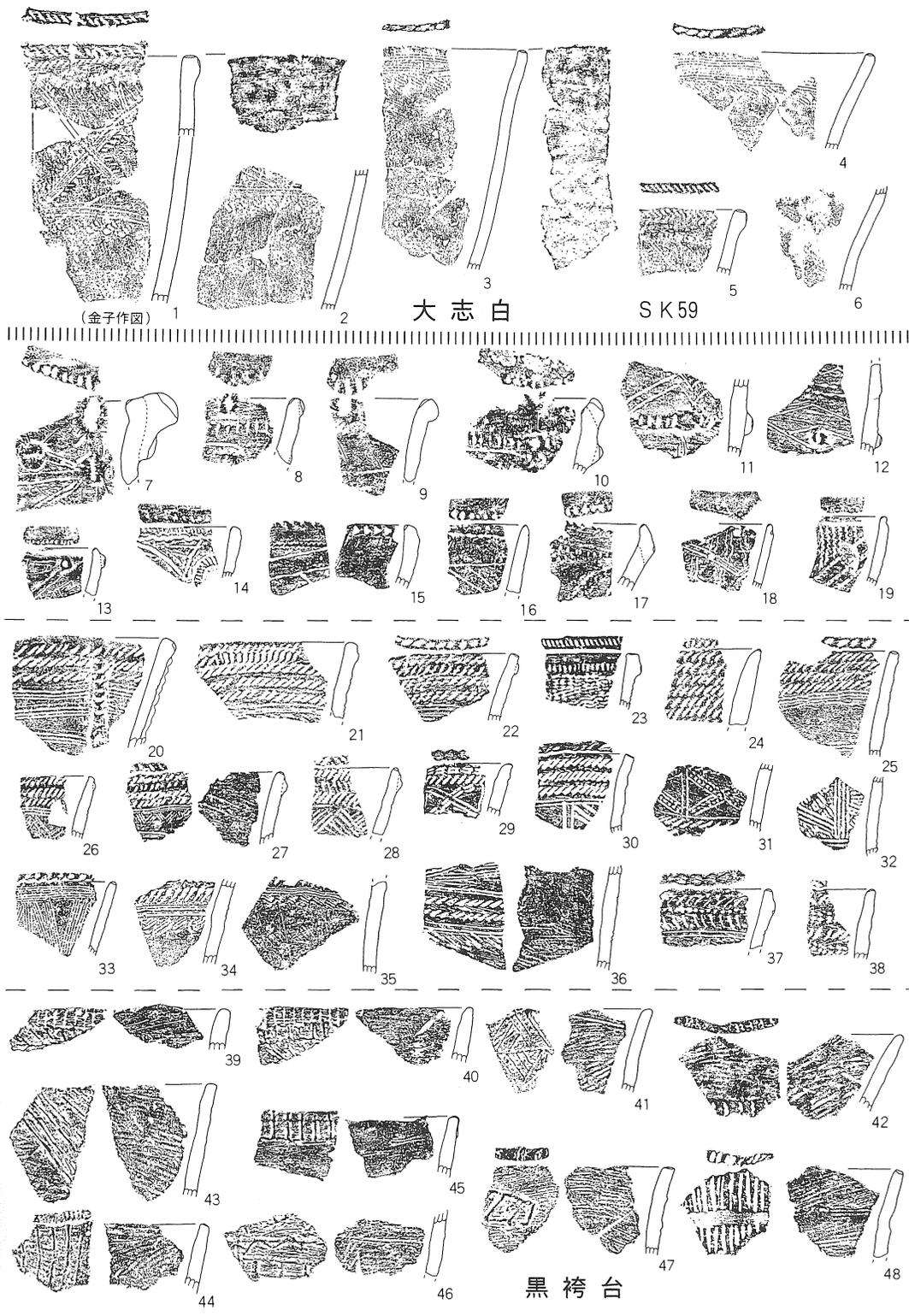


雲入



出流原小学校内

第19図 常世原田遺跡・松沢遺跡・雲入遺跡・出流原小学校内遺跡出土土器



第20图 大志白遺跡・黑袴台遺跡出土土器

などの刻みに施文する行為は、絡条体圧痕文を口唇部に施文する行為、または、胴部のトメ文として施文する行為は、絡条体原体、櫛歯状工具との置換行為として認識され、関連性から同時性を保障する重要な要素となる。

〈大寺・常世式系土器群の検討〉

下荒田遺跡出土の刺突文列を持つ平行沈線文下に集合鋸歯状沈線文を施文する土器は、中部地方で在地化した貝殻沈線文系土器群からの変化として捉えられているが、文様構成上類似した土器群が、いわゆる常世式とされる土器群の中に存在する。福島県いわき市南山A遺跡（猪狩1995）では（第17図20～26）、第5号土壌から横位の絡条体圧痕文を多段に施文し、胴部に斜格子目沈線文を施文する土器（21）と、同様に横位の連続刺突文を多段に施文する土器（22）、貝殻文を多段に施文する常世式土器（20）が共伴している。21、22とも口縁部から短い隆帯が垂下し、22は隆帯上に刻みを施している。また、包含層からは貝殻文（23）や連続刺突文（24）を多段に施文する常世式と共に、口縁部に絡条体圧痕文で菱形状文を描き、胴部に沈線格子目文を描く土器（25）や、櫛歯状工具により菱形状文と条線格子目文を描く土器が出土している。これ等の土器群が、下荒田遺跡の複列刻帯文土器と構成上類似し、相互に関係する土器群であることは自明であろう。南山A遺跡第17図25の絡条体圧痕文土器を子母口式平行と認定せず、常世式全般を田戸上層式段階に比定する（領塚1997）のであれば明瞭なのであるが、田戸上層式直後の子母口式平行と認識するからこそ、常世式の新しい段階が子母口式平行に比定されるのであろう（小笠原2001）。

また、福島県いわき市根室遺跡（矢島2002）では口縁部に2本対の押引沈線を3段、胴部に鋸歯状文を施し、内外面に条痕整形を施す土器（第17図26）が出土している。下荒田遺跡と南山A遺跡の折衷的な土器として、根室遺跡出土土器を位置付けることができよう。これ等の様々な土器群が押型文系終末期や沈線文系終末期の土器群と連鎖するからこそ、田戸上層式新段階から直後段階の様相把握は難しく、各氏の編年案の齟齬という形で現れるのであろう。

上越地方と長野県北部地域における田戸上層式段階の土器群は、長野県信濃町貫ノ木遺跡（中島1998）（第18図1～6）、新潟県上川村北野遺跡（荒谷2003）（第18図7～15）、新潟県中郷村八斗蒔原遺跡（坂上2004）（第18図16～38）で古段階の良好な土器群が出土している。ペン先状の結節沈線（3、15）、平行沈線のクランク文を主にしたモチーフを描き、貝殻腹縁文を充填施文する土器群が出土しており、口縁部と胴部の2文様帯を構成する土器群を含む。

八斗蒔原遺跡ではクランク文を主とする上層古段階の土器群（16～25）と、間に貝殻腹縁文を施文する平行沈線文を鋸歯状に施文する上層式新段階と思われる土器群（30～32）が出土している。また、古段階に位置付けた24、25は、文様帯に幅狭な横位多帯区画を施し、少波状文を施文することから上層式の新段階に位置付けることも可能となるが、17と器形、文様構成が類似し古段階との区分が難しい。さらに、26、27の集合鋸歯状沈線文土器、33～38の条線文土器が出土しており、30～32の貝殻沈線文土器と伴出するかどうか問題となる。26は胴上半部に押引状の集合鋸歯状沈線文を施文する、集合沈線文下には地文状に横位波状沈線文が多段に施文されている。この波状沈線文の構成が、25と類似し、同じ時間帯か、直後段階に置かれる可能性が高いと判断される。また、27は集合鋸歯状太沈線文を多段に施文するもので、太沈線の一部が

押引状を呈し、相木式と連鎖する様相が窺われる。口縁部の横位沈線文間に縦位の刻みを施文する手法（28、29）は、穂谷式や宮の平式の口縁部突帯の刻みに通じるものが看取される。さらに、条線文土器は縦位に垂下する刻み（33）、菱形状（36）や格子目状（37）に施文するもの、大きな菱形状を描くもの（38）などがあり、押型文終末期に伴う土器群に類似している。八斗蒔原遺跡出土土器群が、16～23から24～32、そして26～38のへと変遷するとすれば、それぞれ田戸上層古段階、新段階、直後段階へと位置付けることも可能となる。しかし、上層新段階と直後段階は非常に近接した土器群であることが把握される。

さらに東北南部から北関東地域にかけては、非常に位置付けの難しい土器群が出土している。福島県塩川町常世原田遺跡（田中1999）では（第19図1～10）、平行沈線間に押引状の刺突列を施文するもの（1）や縦横に押引状刺突文列を施文するもの（2、3）、絡条体圧痕文でモチーフを描くもの（4～6）、条線文をモチーフ状に施文するもの（7～10）等が出土しており、条線文土器は八斗蒔原遺跡の第18図33～38、平行沈線文土器1は下荒田遺跡第17図12と連鎖する。同様な資料に福島県会津高田町松沢遺跡（石田1987）出土土器（第19図11～28）があり、櫛歯状工具の押引文を口縁部に横位に施文するもの（11～13）、ヘラ状工具の連続刺突文（14、15）、角状工具の押引文（16）と、絡条体圧痕文を施文するもの（17～21）、条線文土器（22～28）が組成する。11、12は垂下する隆帯を口縁部に貼付し、13は円形貼付文を施文するものである。

常世式土器は土器群の特徴や組成が非常に類似し、本来細分が大変難しい土器群で、常世式の次型式はいずれの地域でも細隆起線文を特徴とする槻木下層式土器が編年付けられることから、いわゆる子母口式に併行する土器群が常世式の中に存在するはずである。であるとすれば、常世式も田戸上層式新段階以降子母口式併行までの幅の継続的な様相を持つ土器群であると位置付けなければならない。また、明らかに絡条体圧痕文を文様要素として施文することからも、大半が子母口式と関連する土器群であることも考えなければならないであろう。絡条体圧痕文の要素が、田戸上層式新段階に存在するのか、また、その絡条体圧痕文と子母口式が区分できるのかが問題となるが、この地域においても押型文終末期の土器群の様相と同様に、田戸上層式新段階もしくは直後段階から子母口式にかけての幅に、絡条体圧痕文は明確に存在しているのである。

〈北関東地方の様相〉

栃木県矢板市雲入遺跡（塙1966）出土土器（第19図29～36）、栃木県佐野市出流原小学校内遺跡（矢島1984）出土土器（第19図37～47）は、従来、田戸上層式新段階と子母口式土器が混在しているものと把握されてきた。これに対し、筆者は両者が共伴関係にあり、子母口式段階に組成する土器群であろうことを指摘してきた（金子1994）。近年、宇都宮市大志白遺跡第59号土壙（上野川2000）から、両者の良好な共伴関係を捉えられる土器群（第20図1～6）が出土し、筆者の指摘が的を射ていたことが明らかとなってきた。1、2、5は同一固体で、1は図上復元したものであり、沈線を垂下して文様帯を分割、内部を襷状に区画し、区画線に沿って幅広の連続刺突文を施文するものである。口縁部肥厚帯の上端と外端には斜位の刻みを施し、合わせると矢羽根状を呈する。さらに文様带上端部には押引状の連続刺突文、下端には櫛歯状工具による斜位のトメ文を施文する。3、4は口縁部に2条の条線文を横位施文して口縁部を区画し、下端にトメ文を施文するもので、口唇部には絡条体圧痕文の刻みを施文する。6は緩い波状の条線文を

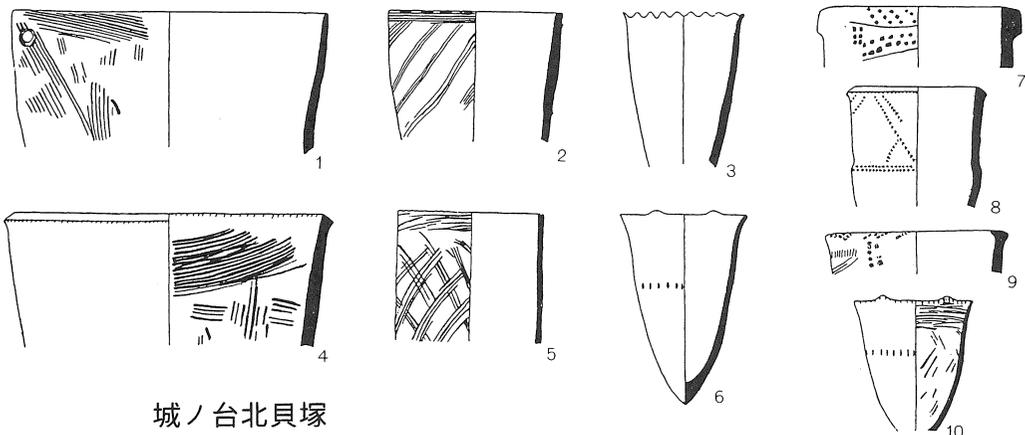
胴部に施文する、常世式系の土器である。これ等の幅広の文様帯を持つ連続刺突文土器1は第19図40、41と連鎖し、幅狭な常世式系土器と絡条体圧痕文の要素が共伴したことは、雲入遺跡や出流原小学校内遺跡出土土器群が子母口式段階に組成する良好な土器であることを物語っている。

さらに、栃木県佐野市黒袴台遺跡（芹澤2001）では（第20図7～48）、田戸上層式でも比較的新しいと思われる土器群（7～17）がまとまって出土しており、常世式でも古い段階のもの（18、19）が組成するものと思われる。そして、次の子母口式段階が20～36の出流原式と、37、38の常世式新段階の土器群が伴うものと思われる。出流原式土器は口唇部に絡条体圧痕文を施文するものが多く、口縁部の連続刺突文帯下に横帯区画文を持つもの（21、22、23、25）、鋸歯状文を施文するもの（26、27）、集合鋸歯状文を施文するもの（28）、縦位区画文を持つもの（29、30）、菱形文を描くもの（31）、条線文と刺突文を施文するもの（32）、判ノ木山西式的な条線文土器（33）などが、常世式の新しい様相を持つもの（37、38）と伴出しているものと思われる。さらに、次の段階の野島式の段階に、口縁部に貝殻腹縁文を施文する木の根A式土器（39、40、42）、槻木下層式的な微隆起線文土器（41）、野島式の細隆起線文土器（43～47）、東海地方的な凹線を施文する縦位沈線文土器（48）が出土している。46は細隆起線文で文様帯間に鋸歯状文を構成している点が重要であり、この段階まで鋸歯状文が継承されていることを物語っているのである。

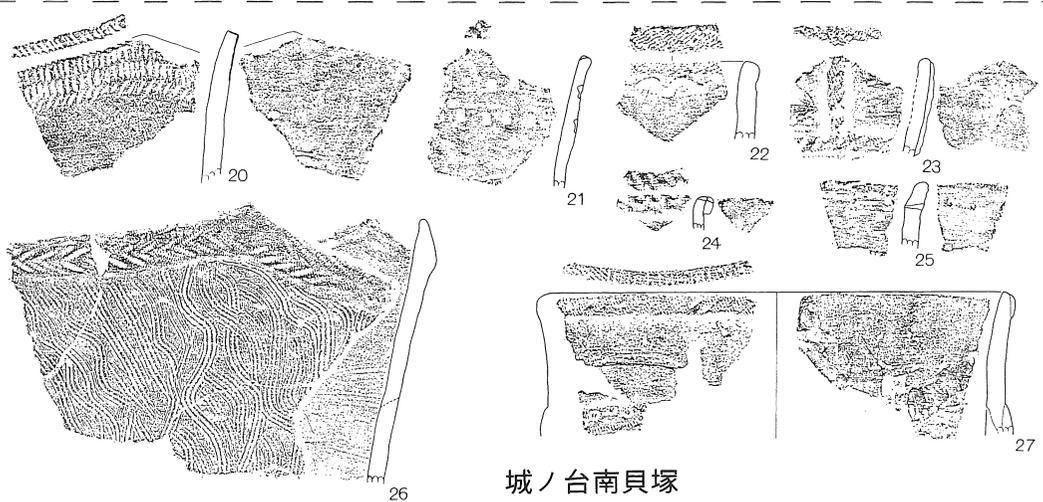
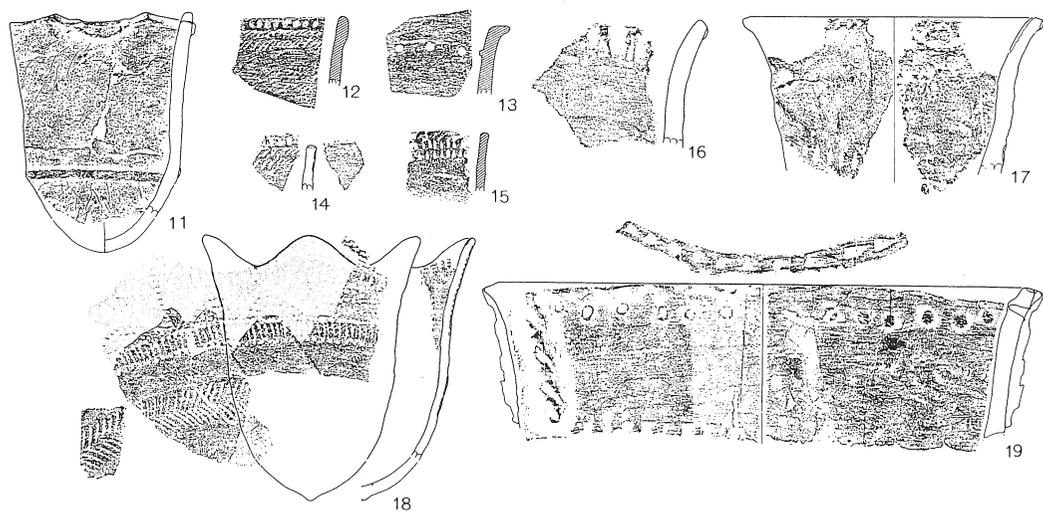
以上、北関東地方の土器群はいわゆる出流原式を介在し、雲入遺跡では物見台式、黒袴台遺跡では常世式的な要素を継承して、田戸上層式直後段階から子母口式段階の土器群を構成しているものと思われる。さらに、子母口式段階の直後が、木の根A式と野島式古段階の土器群であることから、土器群のモデルチェンジは大きいもの、継続的に変化変遷していることが把握される。

〈南関東地方東部地域の様相〉

南関東地方は西部地域と、東部地域では土器群の様相が多少異なる。東部地域では田戸下層式、田戸上層式、子母口式が層位的に検出された遺跡として、千葉県小見川町城ノ台北貝塚（吉田1995、平野1988）（第21図1～10）、城ノ台南貝塚（池田1950、小笠原1994）（第21図11～27）がある。1～10は田戸上層式より層位的に分離され、第五類土器として抽出された土器群で、子母口式に比定された土器群である。今日では、これ等の土器群の中に田戸上層式的な土器群も含まれ、しかも、タイプサイトである子母口貝塚出土土器群（金子1992b）と異なることから、城ノ台南貝塚の層位的な出土傾向にある土器群と比較されて、田戸上層式の新段階に位置付けられている（小笠原1994）。筆者も、城ノ台北貝塚第五類土器に対して子母口貝塚出土土器群を基準とした狭義の子母口式との比較から、子母口式から外れる土器群であることを述べてきた（金子1992c）。しかし、城ノ台北貝塚第五群土器は田戸上層式の系譜を引くものの、いわゆる田戸上層式とは層位的に区分された土器群で、型式学的な検討が行われた上で分離された（吉田1995）一群であった。また、田戸上層式新段階の組成及び型式内容も不明瞭で、新段階の土器群との型式学的な区分もまた不明瞭である。なおかつ、子母口式との分離も漸化的な変化は把握されずとも、絡条体圧痕文の有無のみがメルクマールとなる状況である。その意味では、城ノ台北貝塚第五群土器はまさしく田戸上層式と子母口式を繋ぐ土器群であり中間的な様相を持つ土器群なのである。

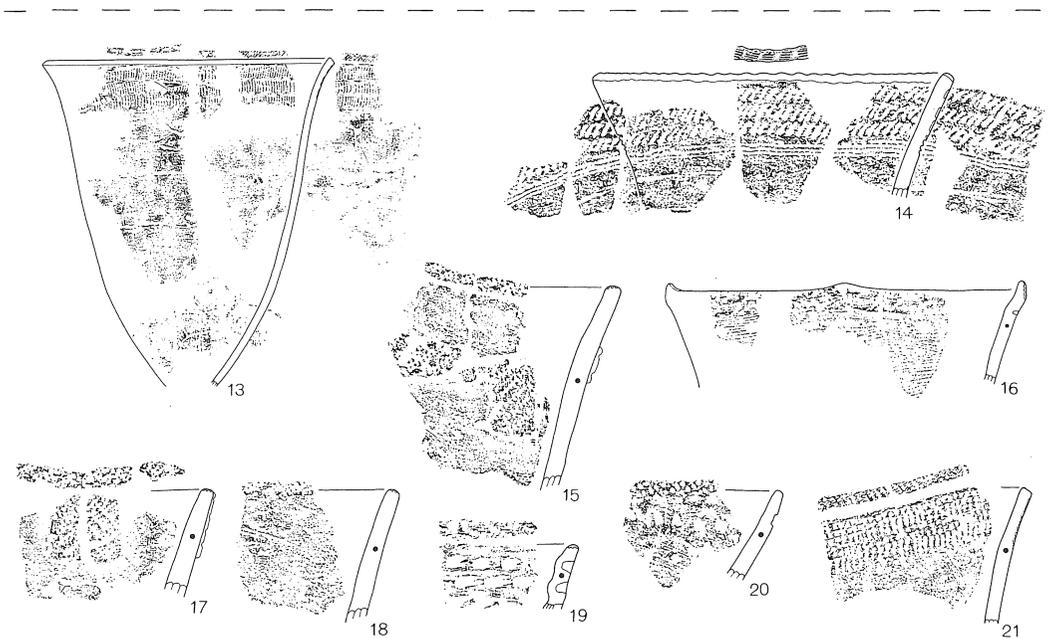
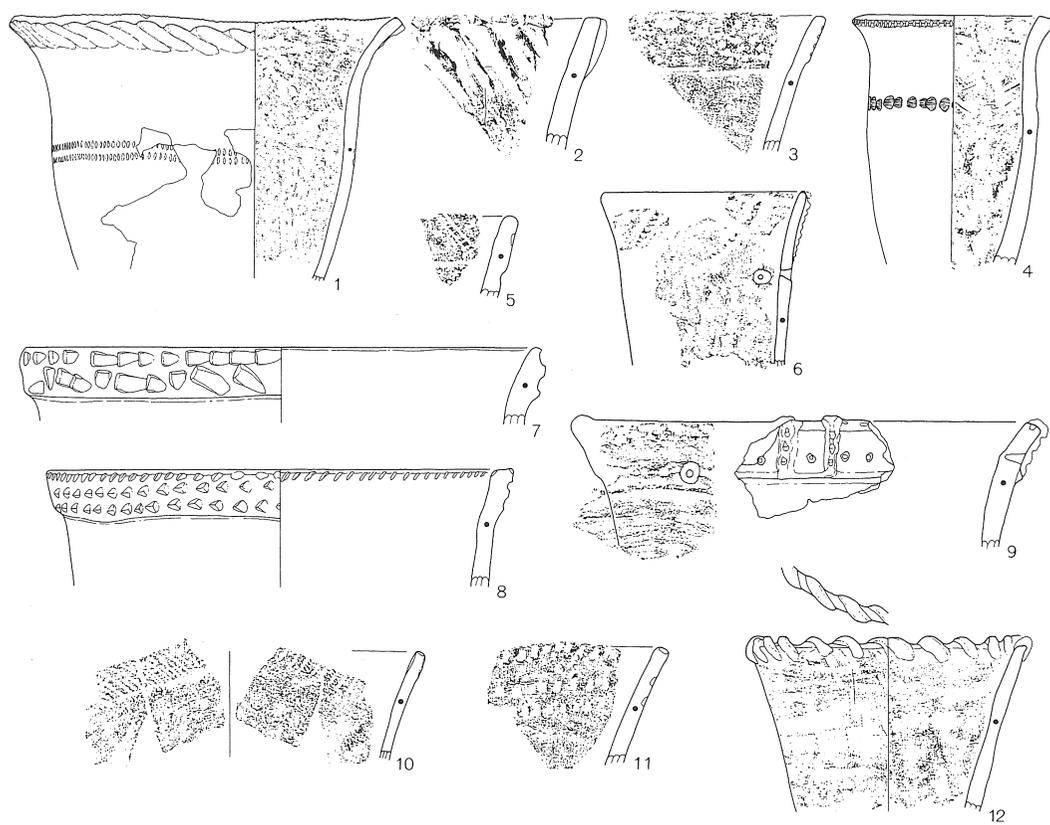


城ノ台北貝塚



城ノ台南貝塚

第21図 城ノ台北貝塚・城ノ台南貝塚出土土器



桜井平

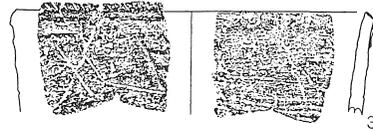
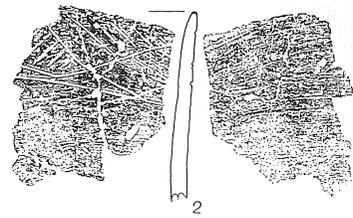
第22図 桜井平遺跡出土土器

従って、筆者はこの段階の土器群について田戸上層式直後段階と表現して記述してきた。上述してきたように、今回問題となっている土器群はまさしくこの城ノ台北貝塚第五群土器に併行する土器群と思われ、城ノ台北貝塚第五群土器には存在しないが、他の地域では明らかに絡条体圧痕文を保有する土器群なのである。この段階の土器群は、押型文と沈線文の折衷化が進み沈線文系及び押型文系土器群が変容して在地化した土器群として成立している。

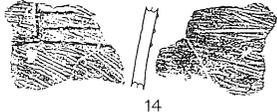
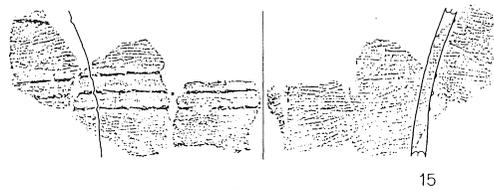
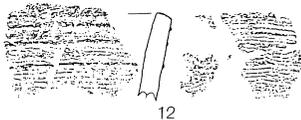
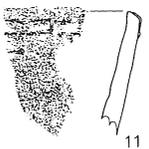
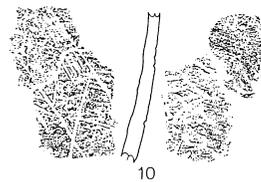
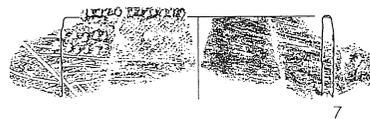
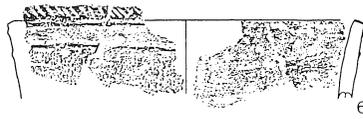
第21図1～10は城ノ台北貝塚出土土器群で、無文化傾向が強い中でも、文様帯幅を広く設定するもの(8)、口縁部付近に文様帯を持つもの(9)、口縁部に肥厚帯を持つもの(7)等が存在し、胴部に刺突文を廻らす6、10は典型的な子母口式として知られた土器である。他に斜行(2)、格子目状(5)の条線文土器、条痕文土器(1、4)等が存在している。

さらに、城ノ台南貝塚出土の土器群(11～27)は、11～19が城ノ台北第五群土器に相当し、20～27が子母口式に比定されている。11は底部付近に突帯を廻らすもので、押型文土器的な器形を呈する。また、12、14、15の押引刺突文は子母口式のそれとの明瞭な区分が難しい土器群であり、18の貝殻腹縁文土器は、千葉県成田市椎ノ木遺跡(高橋1987)出土の子母口式土器と近似する。19の円孔文も子母口式に通例で、刻みを施す隆帯を垂下する要素は判ノ木山西式、出流原式、常世式等に通例の要素で、口縁部文様帯を刺突文で幅広に区画する要素も四街道市割山遺跡(高橋1986)の子母口式へと連鎖する。やや外削状に口縁部が肥厚する26は、矢羽根状の絡条体圧痕文を施文しており、笹見原遺跡第9図8や西洞遺跡第10図1等の口縁部に見られる矢羽根状の刻みと連鎖し、口縁部の肥厚状態からは長野県望月町平石遺跡(福島1989)出土の口縁部矢羽根状刻み土器に連鎖する要素を持つ。もともと、田戸上層式の口唇部形態の変化で捉えられる土器群であろう。

近年、報告された千葉県干潟町桜井平遺跡(蜂谷1998)では、田戸上層新新段階(上層直後段階)に比定された土器群(第22図1～21)が出土した。1～12は新新段階(直後段階)とされた土器群である。口縁部に斜位の凹線を施文(1)し、凹線間が隆起線化するもの(2)、口縁部に肥厚帯を持ち、口縁部文様帯を形成するもの(3、5、7、8)、口縁部から斜位の隆帯を垂下するもの(6)、口縁部を隆帯で区画し、2本隆帯を垂下するもの(9)、口縁部内外面に貝殻腹縁文を施文するもの(10)、口縁部に刺突文列を施文するもの(11)、口唇部に斜位に隆帯が巻き付くもの(12)等がある。かつて、1、2、12については、高山寺式の内面斜行沈線文の文様への転写行為であることを指摘した。また、今回押型文終末期の土器群を検討する中で、7、8の口縁部形態及び処理の仕方について、口縁部の肥厚帯に縦横の沈線で区画を施す、宮の平式等に見られる口縁部に類似することを指摘しておきたい。13～21は子母口式に比定されている土器群で、14は文様帯が1段であることから子母口式と折衷化した出流原式土器と思われる。出流原式はその様相から、古くて田戸上層式新段階、新しくは子母口式との対比が考えられていることを考慮すると、桜井平遺跡出土土器群が1時期の遺物として認定される可能性もあり、また、どこまでが新新段階(直後段階)で、どこからが子母口式段階なのかの線引きも難しくなる可能性がある。そこでも、最大のメルクマールは絡条体圧痕文であり、直後段階の絡条体圧痕文がこの地域でも存在するとすれば、田戸上層式土器の段階区分の中でこれらの土器群を新新段階として位置つけるのは、意味論的に矛盾を来たすことになるだろう。



066 号住



グリッド

新井花和田

第23図 新井花和田遺跡出土土器

子母口式段階の遺跡は東部地域では比較的多く存在しており、ここでは主体的には取り上げずに検討を後の機会に譲るが、最新段階の様相については若干触れて置きたい。子母口式の最新段階の良好な遺跡として、千葉県市原市新井花和田遺跡（牧野2001）がある。土器群は田戸上層式新段階～野島式古段階（第23図1～15）までが出土しており、子母口式新段階木の根A式段階の土器群を主体とする。1～4は066号住居跡出土土器で、1は口唇部に絡条体圧痕文の刻みを施し、口縁部に3本セットの角状工具の刺突文列を3段に施文する。2は波状口縁を呈し、口唇部に絡条体圧痕文の刻みを持ち、口縁部に単沈線の粗い幾何学状区画文を施文し、単沈線を充填施文する。3は口縁部に2条の細隆起線を廻らせ、その間に3本の細隆起線を垂下する。さらに、口縁部区画の細隆起線から2本対の細隆起線と沈線を斜位に垂下させ、細隆起線間には梯子状の細隆起線を配する。4は胴部が括れ、口縁が内湾して開く器形の大型土器で、口縁部に5本、胴部に4本の細隆起線を廻らして区画し、口縁部と胴部の細隆起線を3本の斜位細隆起線を部分的に、区切り状に施文するものである。2～4は住居跡内の土壌状の掘り込み部分からまとまって出土しており、一括性が押さえられる土器群であるが、1との同時性は保証されない。

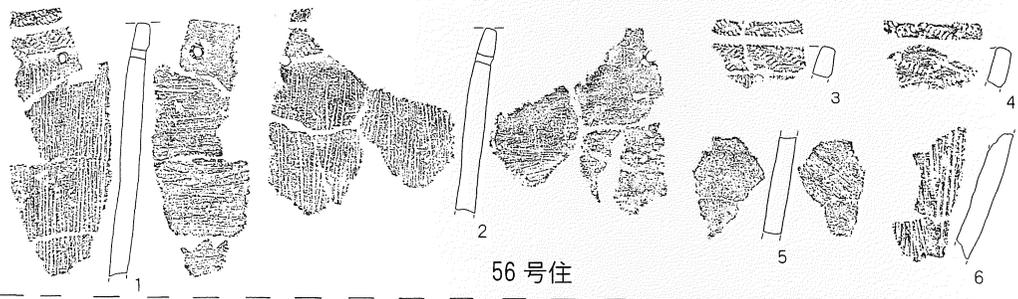
包含層からは、横位の絡条体圧痕文を口縁部に多段に施文するもの（5）、同様な構成を束ねた角状工具の押引文で施文するもの（8）、口縁部に細隆起線2本を廻らし、細隆起線下に貝殻腹縁文を縦位施文するもの（6）、細隆起線で粗く区画し、沈線で幾何学状区画を施した後に集合沈線を充填施文するもの（9、10）、細隆起線のみで文様を描くもので、水平と垂直線を基調にするもの（11、12、14、15）、幾何学区画文内に充填施文する構成のもの（13）等、槻木下層式とも共通する土器群が出土している。特に、併行区画線を斜めに区切り、菱形状のモチーフを構成する土器群は、槻木下層と酷似する。

これ等の特徴を持つ土器群は、子母口式の新段階として設定された「木の根A式」（安孫子1982）と近似する型式内容を持ち、筆者はこれ等の土器群に内在する区画内充填文手法を基準に、野島式の最古段階に位置付ける見解を示してきた（金子1993）。絡条体圧痕文、細隆起線文等子母口式の要素を多分に持ち、まさしく子母口式と野島式を繋ぐ土器群として位置付けられるが、子母口式の要素を残存するものの、条痕文系土器群への変革期としての様相を持ち、野島式要素の萌芽をみることから、野島式に含める考えを示してきた。この段階は、東海地方の線状絡条体圧痕文が盛行する時期で、東海の線状絡条体圧痕文と関東の絡条体圧痕文や多条角状押引文の類似性等から、両者の関係性及び併行関係が十分検証されることを指摘して置きたい。特に、新井花和田遺跡は東京湾内湾である市原市に所在するため、海を伝わってのコミュニケーションが図られていたものと想像される。千葉県でも北東部、霞ヶ浦付近では、常世式の影響下にある要素が残存している傾向がある。

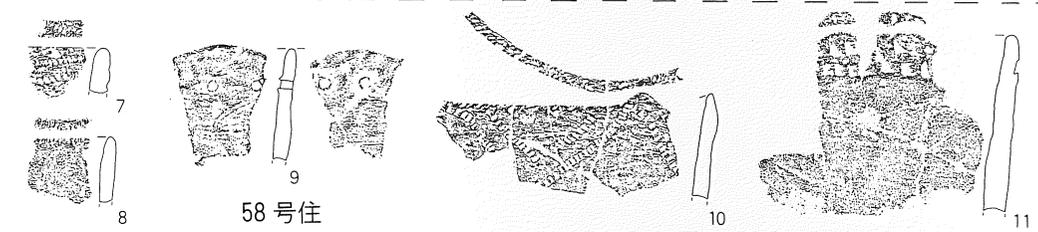
〈南関東地方西部地域の様相〉

東部地域と同様に、子母口式段階の遺跡は比較的多く存在するが、田戸上層式新段階、直後段階の遺跡は少なく、また、子母口式段階では田戸上層直後段階との識別が難しい土器群と出土する古段階と、野島式との区分が難しい土器群と出土する新段階の遺跡に分かれる傾向がある。

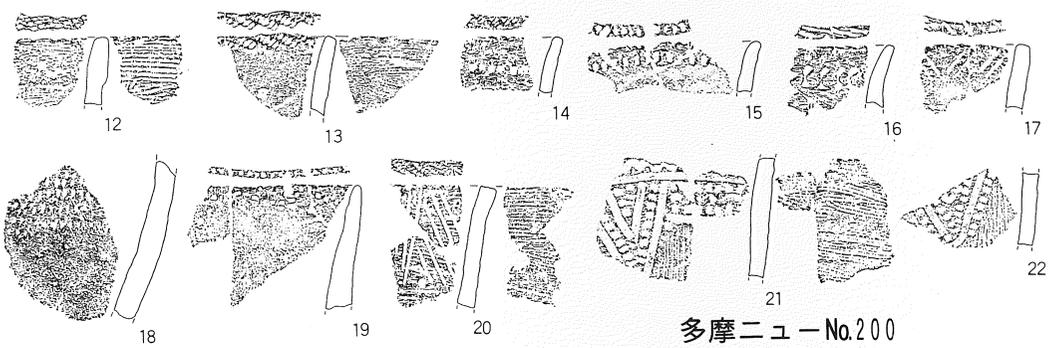
東京都の西部地区では、田戸上層式新段階の遺跡は町田市戸場遺跡（小葉1984）が知られる程度で、まとまった土器群を出土する遺跡は殆どない。戸場遺跡では第2号住居跡から刺突を施



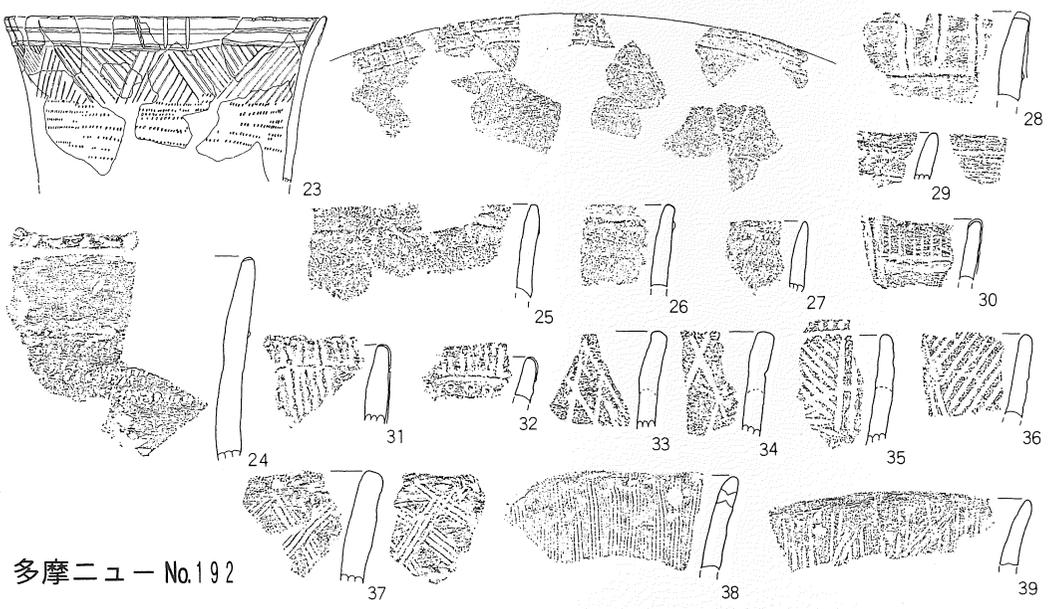
56号住



58号住



多摩ニュー-No.200



多摩ニュー-No.192

第24図 多摩ニュータウンNo.200 遺跡・No.192 遺跡出土土器

す隆帯で、胴上半部に大きな鋸歯状文を描く土器が、包含層からは刻みを施す隆帯を区画文やモチーフの描線に使用する土器が出土している。他に、角状刺突文列を施す土器、絡条体圧痕文土器と無文土器が出土しており、住居跡出土の隆帯文土器が、田戸上層新段階なのか、あるいは直後段階（新新段階）に位置付けられるのか、積極的な根拠はない。また、多摩市向ヶ岡遺跡（桐生1983）では、波状口縁土器の口縁部に隆帯を沿わせ、隆帯脇に貝殻腹縁文を施文する土器や、隆帯文土器が少量出土している。武蔵国分寺市北方遺跡（小葉2003）でも、田戸上層式新段階と思われる土器群が出土しているが、土器群の組成は不明瞭である。

多摩ニュータウンでは、No.200遺跡（及川2002）で子母口式期の良好な集落遺跡が存在している（第24図1～22）。第56号住居跡からは波状口縁を呈し、若干肥厚する口縁部の肥厚帯に絡条体圧痕文を施文する土器（1～5）、条線文土器（6）が、第58号住居跡からは絡条体圧痕文土器（7）、円孔文土器（9）、口縁部に小突起を持ち、大形の鋸歯状文を2列の角状刺突文列で施文するもの（10）、口縁部に2列の刺突文列を施文する土器（11）が出土している。包含層からは絡条体圧痕文土器（12、13）、線状絡条体圧痕文土器（18）、刺突文土器（15、16、19）、沈線文土器（17、20～22）が出土している。19の刺突文のモチーフは口縁部付近で小さな弧状を描き、田戸上層式新段階からの系譜が考えられ、20の集合鋸歯状沈線文は判ノ木山西式と連鎖する。また、21は太い角状沈線でモチーフを施文するもので、胴部を波状沈線文を挟む平行沈線で区画し、区画下に刺突文を挟む平行沈線でV字状のモチーフを描いている。さらに、V字状文脇に横位の太沈線文と刺突文列を施文するもので、横位区画を縦位モチーフで切断する構成は、石敷遺跡第5図23や禅海塚遺跡第6図9と連鎖するものである。また、区画線下にV字状文を施文する構成は、根室遺跡第17図26と酷似する。

ほぼ同地域の遺跡として、小山田遺跡群No.23遺跡（安孫子1983）からも良好な子母口式土器が出土している。No.23遺跡では、円孔文土器、貝殻腹縁文を口縁部に施文する土器、貝殻背圧痕文を文様要素として施文する土器、絡条体圧痕文土器、刺突文土器等、比較的古い要素を持った土器群が出土している。

さらに、田戸上層直後段階と思われる土器群と、絡条体圧痕文を持つ古段階の子母口式が出土した遺跡として、あきる野市引谷ヶ谷戸（黒尾1998）、国立市緑川東遺跡（馬橋2001）などがあり、いずれも隆帯文に絡条体圧痕文を施文するものや、角状刺突文列を施文する土器が出土している。明瞭な田戸上層式新段階の土器群は殆ど存在せず、しかも押型文終末期の土器群や、いわゆる判ノ木山西式の沈線文土器も出土していないのが特徴的である。

子母口式の新段階では、東海地方の清水柳E式に相当する土器群が出土している。多摩ニュータウンNo.192遺跡（小葉2004）では、搬入品に近い清水柳E式土器が出土している。小葉一夫氏は考察の中で、多摩ニュータウン地域内の子母口式期の遺跡を比較して土器群の分析を行い、子母口式を清水柳E式を含む子母口式新段階と、含まない子母口式古段階とに分離し、明言を避けているが新段階の土器群が木の根A式に併行する子母口終末から野島式初頭に編年付けられることを示唆した。No.192遺跡出土土器は、清水柳E式の組成そのものと言えるが、条線文を施文する土器群が卓越する点がやや異なる点である。23は口縁部に2本隆起線を廻らし、3本の短隆起線を垂下して区切り、区画線下に集合鋸歯状沈線文を施文し、さらに下部に線状絡条体圧痕文

を施文する構成を採っている。他に、線状絡条体圧痕文土器 (24~30)、細隆起線文土器 (31)、細隆起線文と円形竹管文を併施文する土器 (32)、沈線文土器 (33~36)、条線文土器 (37~39) が組成する。

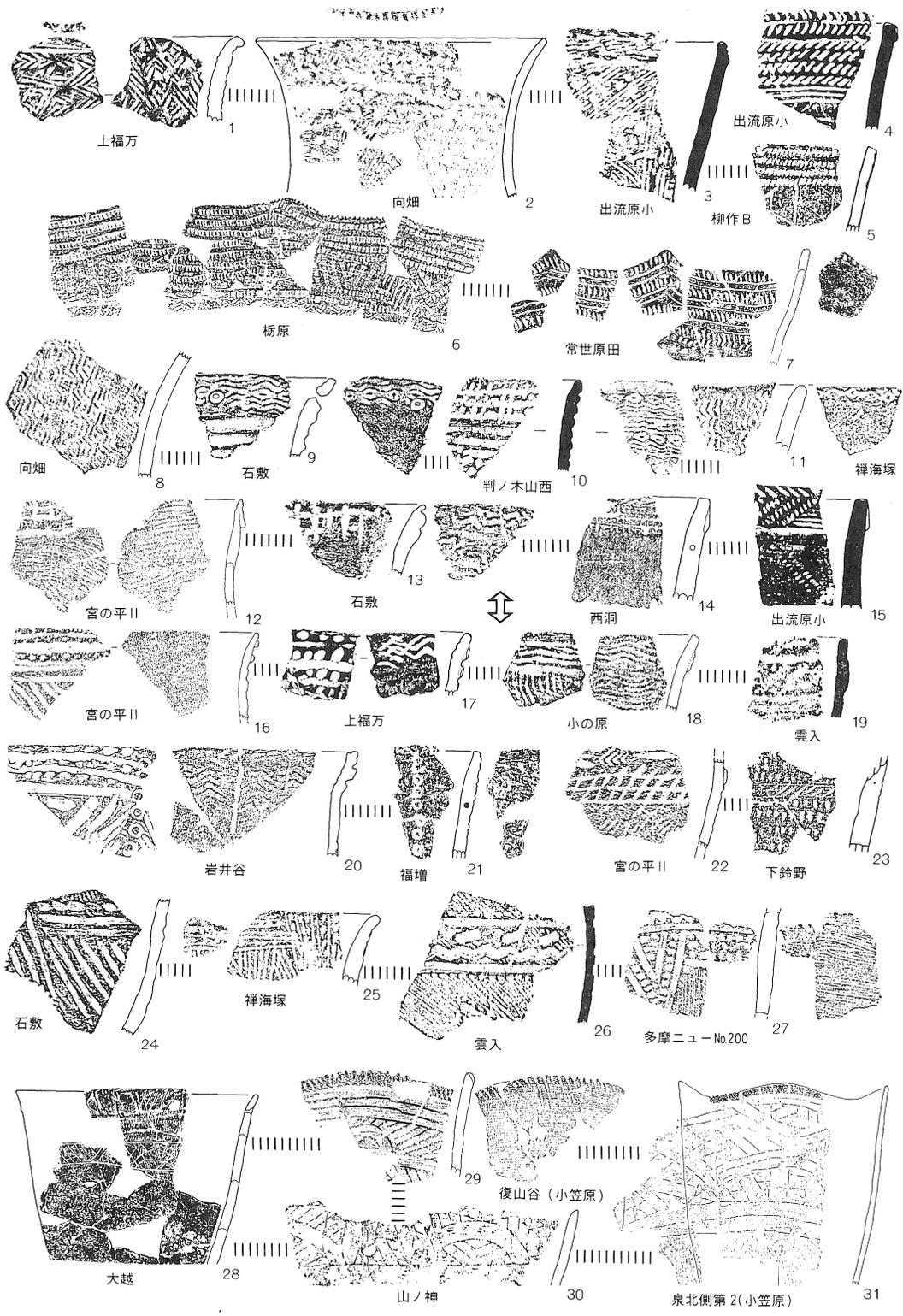
同様に線状絡条体圧痕文土器は、町田市田中谷戸遺跡 (安孫子1976)、小山田遺跡群No.15遺跡 (安孫子1984) などで出土している。田中谷戸遺跡では胴部を隆帯文で区画する線状絡条体圧痕文土器が出土しており、細隆起線と貝殻腹縁文を併施文する清水柳E式土器、口唇部に絡条体圧痕文を施文した野島式の細隆起線文土器が伴出している。先に説明を加えた徳倉B遺跡第15図14、恩名沖原遺跡第16図13の線状絡条体圧痕文を施文する隆帯文土器も、組成する土器群が同様の状況を呈している。従って、清水柳E式と多摩ニュータウンNo.192遺跡、新井花和田遺跡066号住居跡出土土器群はほぼ同時期に位置付けられ、子母口式新段階の木の根A式段階で、筆者の野島式最古段階に位置つけることが可能になるのである。

従って、関東地方の田戸上層式以降の土器群の大枠の変遷は、田戸上層式直後段階・子母口式古段階→子母口式段階→子母口式新段階・野島式最古段階→野島式段階へと変遷するものと捉えることが可能になるのである。移行期の土器群に対して名称を与えるとすれば、城ノ台北貝塚第五類土器が城ノ台北式 (高橋1981) と呼ばれたことから、筆者の田戸上層直後段階、小笠原氏の上層新新段階は、城ノ台北式と便宜的に呼ぶことがふさわしいものと思われる。従って、絡条体圧痕文を一つの基準とするならば、既に絡条体圧痕文の成立が見られる段階としての城ノ台北式 (子母口式古段階) →子母口式→木の根A式 (野島式最古段階) →野島式という大枠の編年案を提示することが可能となる。これらの名称は段階名称であり、型式内容についてさらに詰める必要があるが、さらに大きな枠組みとして、また大きな土器群の変革期としての意味合いを考えるならば、子母口式までが沈線文系土器群の枠組みで、木の根A式から条痕文系土器群の枠組みで把握する必要があるものと考えられる。

6 押型文系土器群と沈線文系土器群の関係性

〈要素の関係性〉

ここで、いままで検討してきた土器群に見られる関係性を、簡略に整理しておきたい (第25図)。まず、相木式と沈線文土器の関係を見ると、向畑遺跡で問題とされた山形押型文土器と矢羽根状刺突文を施す沈線文土器 (2) は、上福万遺跡の羽状を示す山形文土器 (1) の置換現象と捉えられることなどから、共伴関係が認められるものと思われる。それは、また「玉抱き山形文」(8)、が石敷遺跡 (9)、判ノ木山西遺跡 (10)、禅海塚遺跡 (11) の押型文終末期の遺跡から出土していることから判断される。さらに、2の文様構成は口縁部が横位構成、胴部が集合鋸齒状文構成で、施文具と胴部文様の類似性が別個体となるが出流原小学校内遺跡出土土器と類似し、絡条体圧痕文を口縁部に横位施文する柳作B遺跡例 (5) (国井1999) と類似する。出流原小学校内遺跡出土土器が子母口式に比定され、向畑遺跡2にも絡条体圧痕文が施文されていることから、それぞれが同一段階に位置付けられるであろうことを示している。さらに、栃原遺跡出土の相木式土器 (6) (守屋1997) の胴上半部にみられる横位線と鋸齒状文構成は、2と極めて類似し、口縁部構成は常世原田遺跡例 (7) と類似する。それぞれが非常に強い相関性を持つこ



第25図 文様要素の関係性図

とが窺われ、時間差が有るとしても非常に短い時間で、しかも、ほぼまとまりのある同系列の土器群と認識されるのである。通常、同一段階に置かれる要素を持つ土器群と思われるが、時間差のある型式として分けられているのが現状である。

また、穂谷式と沈線文土器との関係は、宮の平式が設定されたことでより鮮明になろう。宮の平式で問題となるのは、口縁部や胴部などに同様相を持つ土器群に対して、押型文の有無の判断で、新旧関係が把握されるのか否かという点である。まず、口縁部の肥厚帯は、横位の沈線と縦位の刻みを施す特徴が、宮の平Ⅱ遺跡(16)と石敷遺跡(13)で類似し、この構成は西洞遺跡(14)へと連鎖し、14は出流原小学校の子母口式と口縁部形態が酷似する。出流原遺跡出土土器が相木式等と関係性の強い土器群であることから、これ等の土器群も非常に短時間内に位置付けられるもので、口唇部の形態、施文技法等はバリエーションとして把握される可能性がある。

同様に、口縁部に刻み突帯を貼り付ける手法は宮の平Ⅱ遺跡(20)、上福万遺跡(17)などの穂谷式では通例であるが、同時に、上述した口縁部に肥厚帯を持つ土器群と出土していることが多い。これは、両者の進化的発展過程を示しているのではなく、口縁部形態のバリエーションを表しているものと思われる。特に、押型文土器終末期では両者が共存することが通例的であり、宮の下Ⅱ遺跡出土土器がその状況を良く示しているであろう。さらに、小の原遺跡例(18)(宇野1991)のように口唇下に間隔を開けて低平な隆帯を廻らせ山形文を施文する穂谷式は、施文具を絡条体圧痕文に変えると雲入遺跡の子母口式(19)となる。ここで検討した穂谷式や相木式に類似すると認定した子母口式は、組成する沈線文系土器群が北関東地方において田戸上層式新段階に位置付けられている(阿部1998、守屋1999)土器群である。今回の検討において、子母口式として分離されてきた土器群でさえも、穂谷式や相木式との関係性が把握できることから、出流原小学校内遺跡、雲入遺跡の土器群は共存関係にあり、子母口式の範疇で捉えられ、しかも穂谷式や相木式と時間的に近い土器群であることが明らかになろう。

この様に、穂谷式、相木式と子母口式の様相が近い例は、岐阜県岩井谷遺跡(河瀬2000)の相木式(20)に見られる口縁から垂下する円形竹管文列が、千葉県福増遺跡(渡邊1999)の子母口式土器(21)の口縁部から垂下する円形竹管文列と酷似し、奈良県宮の平Ⅱ遺跡(22)の併行沈線を斜位に区切る胴部区画沈線手法が、千葉県下鈴野遺跡の横位刺突文列を施す土器(23)の胴部区画文沈線と同様な手法であることなどに見られる。この胴部区画線を斜めに区切る手法は、新井花和田遺跡066号住出土の第23図4の胴部区画線にまで継承されている手法である。また、太沈線(24)や、沈線間に刺突文を挟む沈線(25)で縦横位の区画を施す土器群や、刺突文を伴う幅広の沈線は多摩ニュータウンNo.200遺跡(27)と雲入遺跡(26)が類似し、いずれも27、26は子母口式に比定される段階である。さらに27の胴部区画線には波状沈線が施文されており、26にも波状沈線が施文される。この波状沈線は、田戸上層式の新段階に認定される重要な要素であるが、子母口式段階にも確実に存在していることを確認して置きたい。この胴部を区画する横位波状沈線文の要素は、下荒田遺跡、笹見原遺跡で田戸上層式新段階と認定されてきた土器群の要素と密接な関係性を持つであろう。26、27を根拠として、下荒田遺跡、笹見原遺跡の曲線文を持つ土器群は遡っても、子母口式直前の段階に位置付けられるであろうこと指摘しておきたい。

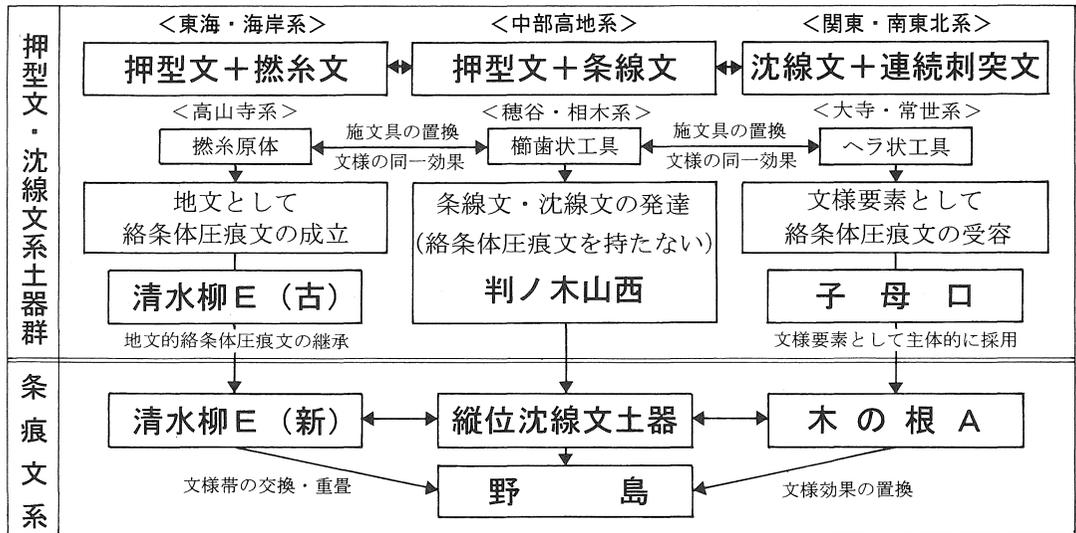
さらに、条痕文系土器群の初頭期に位置付けられる大越遺跡(28)、復山谷遺跡(29)(小笠原2002)、山ノ神遺跡(30)、泉北側第2遺跡(31)(小笠原2002)は弧状モチーフを持つ土器群として共通している。28と29は文様構成、文様帯構成が類似しており、28の細隆起線と沈線が垂下する口縁部文様帯は、29の絡条体圧痕文を深く施文する口縁部に相当し、頸部の線状絡条体圧痕文帯は横位の細隆起線文帯と、集合鋸歯状沈線と半弧状文を組み合わせた文様帯は、同様のモチーフを構成する細隆起線文帯と相同関係にある。また、29は口縁部裏面に深い絡条体圧痕文を縦位に施文しており、常世式の要素を残している。口縁部の深い絡条体圧痕文は、その間が隆起線状となり、やはり口縁部縦位の細隆起線を意識しているものと判断される。30と31は上下対弧状のモチーフ構成を採り、31は口縁部に縦位の絡条体圧痕文を密に施文するもので、木の根A式の典型例と言えよう。これ等の土器群が条痕文系土器群の最初頭の、野島式最古段階に位置付けられことは上述してきた通りである。

〈絡条体圧痕文の成立とその変遷〉

いわゆる子母口式のメルクマールである絡条体圧痕文について、その成立と変化変遷についてまとめて置きたい。絡条体圧痕文の成立は関野氏が指摘するように(関野1988)、撚糸文土器との関係において把握されるものと考えられる。押型文終末期で高山式に多く伴う傾向にある格子目状撚糸文が、格子目沈線文の成立要因になっていることは諸氏が指摘するところである。また、絡条体条痕と条線文の関係も、撚糸文と沈線文の置換関係になぞられるものと思われる。黒田向林遺跡で高山寺式終末の撚糸文土器に絡条体圧痕文のトメ文の成立を見たが、これは相木式に伴う沈線文の文様帯下端区画に沈線施文具のトメ文を施文する手法と連動するものと認定される。また、上福万遺跡に見られる口唇部の絡条体圧痕文は、沈線文系土器群の櫛歯状工具による口唇部の刻みと酷似する。どちらが先かは判断されないが、撚糸文と沈線文、条線文が密に関係していたであろうことは想像に難くない。両者が同じ文様効果を発揮する点において、撚糸文と、条線文は同様に使用されていたものと判断される。

高山寺式終末と相木式の併行関係を前提とすれば、高山寺式と撚糸文、相木式と条線文という地域的な相異が把握される。まず、発生の順序とすれば、絡条体圧痕文の原体である撚糸原体が存在する必要があり、撚糸文が地文であるとすると、高山寺式から成立する絡条体圧痕文は地文としての性質を持って出現する。この撚糸文起源の絡条体圧痕文の文様効果は、条線文の工具においても類似効果を表出できることから、櫛歯状工具の口唇部刻みや胴部トメ文として採用される。また、絡条体原体が施文具として流通する場合もあり、絡条体圧痕文が遠隔地で文様要素として採用されることもあるものと考えられる。絡条体圧痕文は大寺・常世式に特徴的な連続刺突文とも類似効果を持っており、常世式では絡条体条痕文も存在していることから、およそ田戸上層式終末期にかけて押型文と沈線文が折衷化する過程において、撚糸文を持たない地域へ絡条体圧痕文が波及したと思われる。その結果、常世式においても絡条体圧痕文を施文した土器群が成立し、やがて無文化が進み東北系の要素を多く継承する子母口式において積極的に採用され、子母口式のメルクマールの一つになったものと想定される。

しかし、城ノ台北段階で相木式と判ノ木山西式が伴う条線文を主体とする中部高地では、類似効果を持つとしても、絡条体圧痕文を殆ど使用していない現象がある。これは、高山寺式の押型



第1表 絡条体圧痕文の変遷表

文や燃糸文の文様構成を、沈線文に写し変えたのが判ノ木山西式であることに関係があるものと判断される。つまり、穂谷式や相木式は文様構成の中に沈線文系土器群の文様要素を受け入れて変容した土器群で、押型文系土器群と沈線文系土器群のキメラあるいはハイブリッドであるが、判ノ木山西式は高山寺式の押型文や燃糸文の地文としての文様構成を受容して成立した土器群として認識され、本来燃糸文や絡条体圧痕文を使用する必要のない土器群なのである。

穿った見方をすれば、穂谷式・相木式と排他的関係にある高山寺式の要素を沈線文化して受容したのが判ノ木山西式で、高山寺式と穂谷・相木式の仲介役としての役割を持っていたものと想像される。その後、子母口段階では、判ノ木山西式土器は格子目文などの地文から発展した文様構成と、沈線文系土器群に継承されてきた集合鋸歯状沈線文などの文様構成を融合させ、中部高地の沈線文系土器として揺ぎ無い地位を占めるようになったものと想像される。そして、子母口段階にあっても系統性を強く保持し、絡条体圧痕文は使用していない。その系統上の土器群は、田中氏が口縁部縦位沈線文土器と呼んだ土器群へと変遷し、静岡方面では線状絡条体圧痕文土器と伴出して清水柳E式の組成となるが、自身が絡条体圧痕文を施文することはなく、強い系統性を保持しているのである。

文様要素として採用された絡条体圧痕文は、以上のような変遷を辿るものと推測されるが、地文として成立した絡条体圧痕文は、不明瞭ではあるが子母口式段階にも存在すると思われ、木の根A式の野島式段階になってから爆発的に増加するものと判断される。その要因は不明といわざるを得ないが、清水柳E式の大半が木の根A式段階に併行することは検討してきたとおりである。下島健弘氏の子母口式と清水柳E類の線状絡条体圧痕文とでは系統が異なるという指摘は重要である（下島2003）が、東海地方で西洞遺跡段階が存在する以上、高山寺式終末から清水柳E式への積極的な発展的継承要素を見出せず、現在では子母口式との関係で存在していたものと推測せざるを得ない状況にある。

以上、絡条体圧痕文の成立と変遷を検討してきたが、中部高地に少なく、東海、関東、南東北

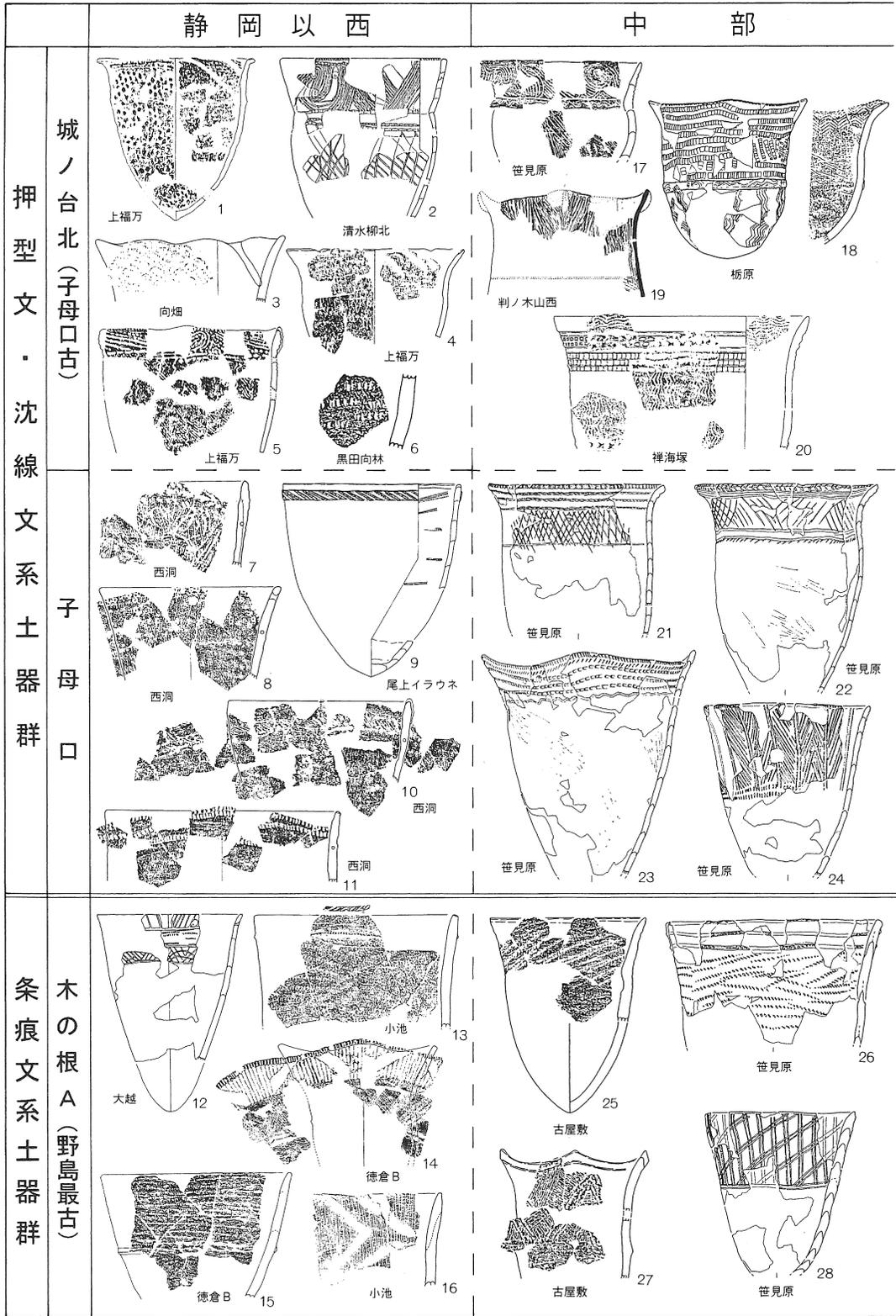
の海岸沿いに多く存在することが指摘される。高山寺式の内面斜行沈線文の影響が看取される土器群は海岸沿いに多く、絡条体を取り入れた常世式土器も太平洋側からの影響が及んだものと推測される。高山寺式土器、撚糸文土器、絡条体圧痕文などの要素は太平洋側で主体的に交流し、穂谷・相木式と条線文・沈線文土器は中部高地を中心に交流する土器群と思われ、黒田向林遺跡と石敷遺跡の相違はこの系統差に由来するものと考えられる。関東の子母口式に中部高地的な沈線文土器が少ないのも、上述した理由によるもので、高山寺式系と相木式系の系統差が現れているものと判断される。さらに、子母口式以降に野島式土器が出現する背景には中部高地の沈線文系土器群の要素が強く反映されており、在地の子母口式から野島式への系統が不連続に映るのはこの系統差が一要因になっているものと判断される。

〈土器群の変遷〉

以上、田戸上層式終末期から条痕文系土器群初頭期にかけての土器群に対して、地域的に、または系統的に検討を加えてきた。該期の土器群が絡条体圧痕文とも絡むことから、押型文、沈線文、絡条体圧痕文の要素を組み合わせてつづ、押型文・沈線文系土器群から条痕文系土器群への変遷について概括しておきたい。

押型文系終末期の土器群については、高山式の細分研究（関野1988、和田1988）、シンポジウム「押型文と沈線文」（長野県考古学会）、相木式の研究（守屋1999）などから、伴出する沈線文系土器群との関係で、大方では高山寺式から穂谷式への変遷観が支持され、押型文の最終末の姿を相木式に求めている。これ等の研究の視点には傾聴に値するものが多く、関野哲夫氏の見解では、高山寺式最終末に絡条体圧痕文が成立し、子母口式との接点が見出されており、また、土肥孝氏も近畿地方の押型文土器の変遷を検討する中で、高山寺式最終末に見られる絡条体圧痕文を子母口式との関連で捉えている。さらに氏は、高山寺式（新）－穂谷式－相木式－子母口式という横の地域間連鎖を捉えており、筆者の今回の検討結果と近い編年観を提示している（土肥1988）。守屋氏は相木式について詳細に検討した結果、穂谷式と相木式の併行関係を考えているが、高山式との関係においては相木式を新しく捉えている。さらに、地理的に離れるが手向山式を検討した遠部慎氏は、刻み突帯文の成立を本州の穂谷式等の関係で捉えようとしている（遠部2001）。最近では、岡田憲一氏が穂谷式に後続する押型文系の土器群として宮の平式を設定して、関東地方の子母口式までを射程とした編年的位置付けを行った。

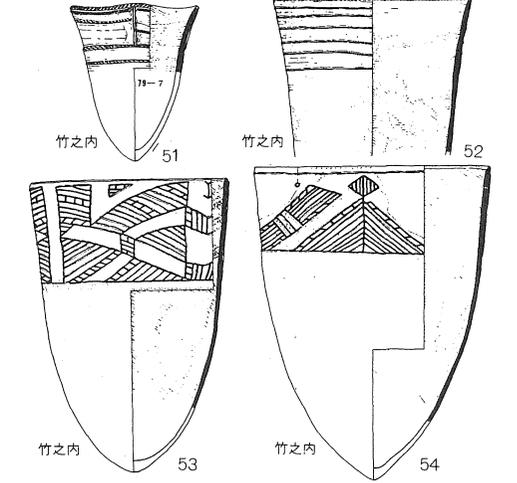
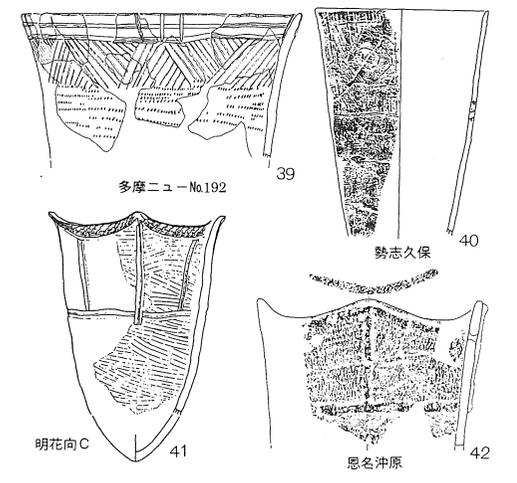
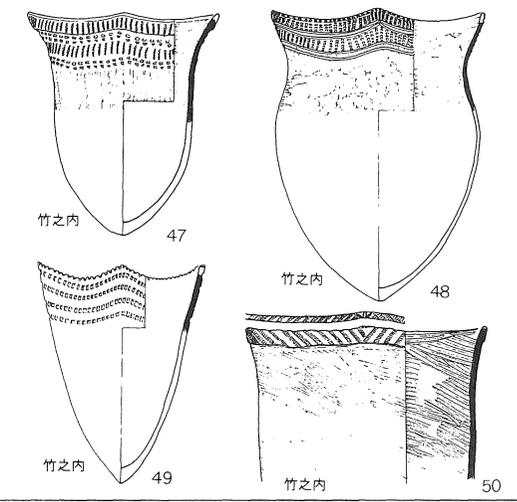
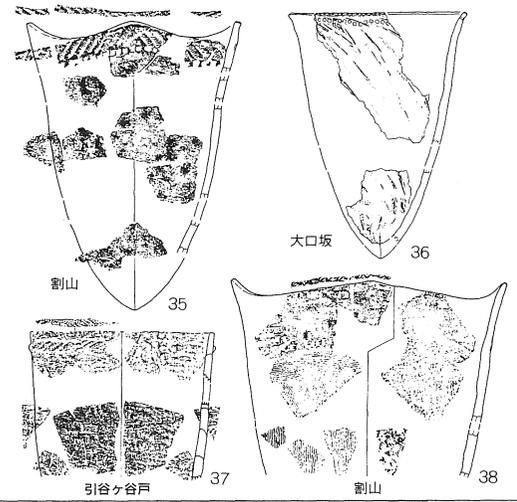
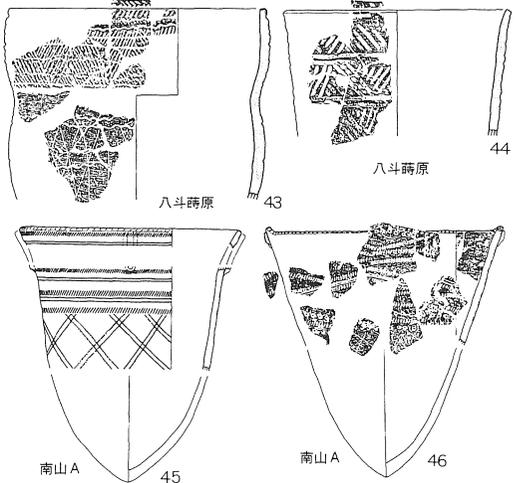
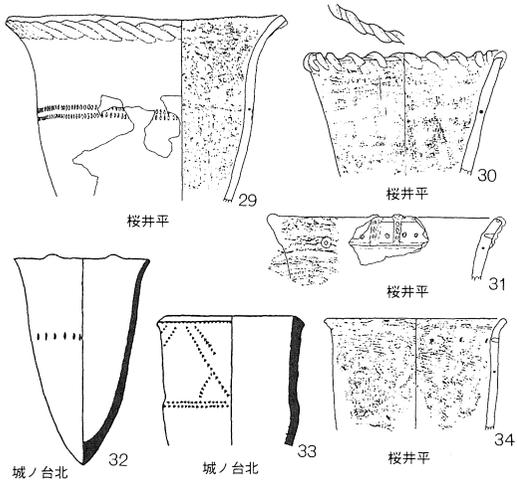
これ等の研究で明らかなように、押型文終末期において広範囲に亘る土器群との関係性が考慮され始めており、如何に条痕文系土器への変遷を捉えるかが検討課題とされている様子が窺われる。従来、押型文系土器群の終末を田戸上層式の終末内に納め、子母口式への連携を模索していたのは、子母口式が条痕文系土器群の初頭に位置付けられていたことに起因しよう。筆者は、子母口式を沈線文系土器群の終末に位置付ける考えを提示して、押型文系土器群終末期の土器群との関係性を模索してきたが、田戸上層式に新新段階が提唱されたことにより、併行段階の土器群の把握に困難さを感じていた。その最大の原因は絡条体圧痕文の存在であり、城ノ台北貝塚第五類土器には絡条体圧痕文は存在しないが、各氏が併行関係と捉える土器群には明らかに絡条体圧痕文が存在している。絡条体圧痕文が唯一絶対のメルクマールではないが、城ノ台北貝塚や南貝塚で新新段階が設定された理由は、絡条体圧痕文の有無が最大の理由と判断される。新新段階が

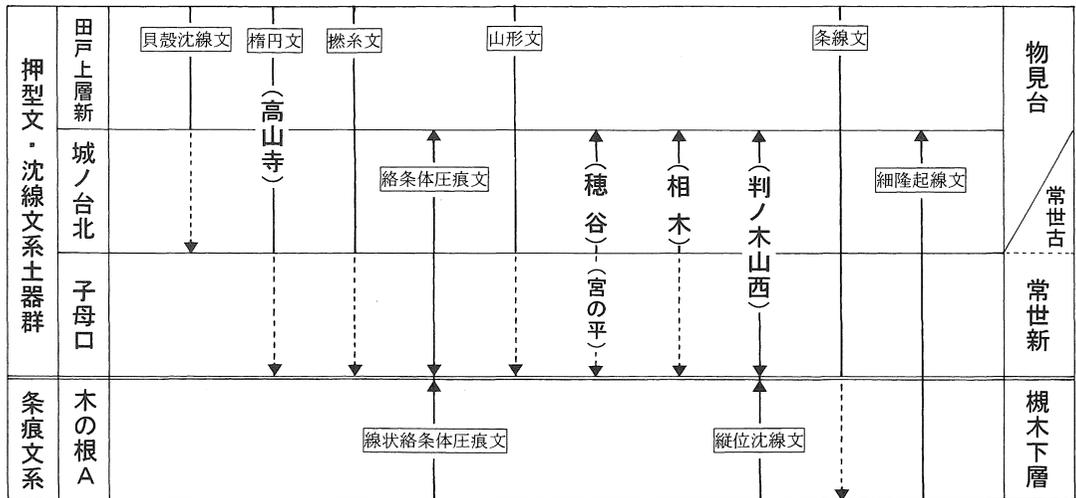


第26図 押型文・沈線文系終末期土器群の変遷図

関東

南東北





第2表 押型文・沈線文系終末期土器群の編年案

田戸上層式と子母口式を繋ぐ中間的な様相を示すことは確かであるが、周辺地域では田戸上層式新段階から直後段階にかけて土器群が大きく変貌を遂げて画期を迎えており、関東でも新新段階がちょうどこの時期に相当している。従って、絡条体圧痕文も成立していることからこの段階を画期として判断し、子母口式古段階と認識する結果となった。押型文終末期の土器群は、田戸上層式新新段階から子母口式段階にかけての幅のある土器群との関係性が看取される。かつて、筆者は城ノ台北貝塚第五類土器を子母口貝塚出土土器との比較から、狭義の子母口式から外し、中間的な位置付けを与えていた（金子1993）。その際、命名など行わなかったが、この段階に対して田村隆氏はタルカ作遺跡の報文で田戸上層式から外れる考えを示しており（田村1985）、高橋雄三氏は安孫子氏の第1段階を評価するとともに、城ノ台北式の名称を使用している。今回の検討で、特に東関東地域以外ではこの段階の土器群と、子母口式段階の土器群とを明瞭に区分しきれないことが明らかになってきた。そして、田戸上層式新新段階の土器群の中で古相を帯びる土器群を、新段階と区分することもまた至難なことと思われる。従って、筆者はこの段階を田戸上層式直後で広義の子母口式の範疇と再認識し、子母口貝塚の子母口式より古い、城ノ台北式と呼ぶことを支持することとした。土器群の内容については、小笠原氏が検討している内容（小笠原1995、1999、2001）を踏襲するが、古相を持つ土器群については田戸上層式新段階との区分において躊躇を覚える。

城ノ台北段階

城ノ台北段階については、かつて筆者は桜井平遺跡出土の口縁部凹線状沈線が高山寺式の内面斜行沈線の転写現象であることを指摘したが（金子2000）、同様に、小笠原氏は谷津台貝塚出土の胴部隆帯上に施文された鋸歯状沈線文が、相木式の山形押型文と類似することを指摘し、氏の田戸上層式新新段階と相木式が併行関係にあることを指摘する（小笠原2000）など、押型文系土器群と沈線文系土器群が折衷化、融合化し、相互の土器群の構造が変換していく段階として捉えることができる。この点に関しては別稿で詳細に述べる予定であるが、一例として、押型文系

土器群における口縁部文様帯の形成や胴部区画文の成立を挙げることができる。押型文土器の文様構造原理を大きく変換させるもので、文様要素に沈線文系要素を取り込む点などに、構造的な折衷化、及び融合化を看取できる。また、沈線文系土器群が押型文土器分布圏内深くまで分布していることは、沈線文系土器群の進出が押型文系土器群の構造的変革をもたらしたものと推測されるのである。とくに、この城ノ台北段階を契機として、一時的に東西の壁が緩むのである。

関東中央部では田戸上層式系土器群の延長上に無文化の進んだ土器群が位置付けられ、南東北では常世式の古い段階の土器群、周辺地域では田戸上層式新段階以降在地化した沈線文系土器群と押型文土器及び組成する土器群と折衷化した、高山寺式終末の土器群、相木式、穂谷式、判ノ木山西式などの土器群が成立しており、子母口式段階の北関東出流原式などと新旧を分ち難い様相を持つ土器群となっている。

また、田戸上層式の系譜を引く沈線文系土器が伴い、九州地方では胴部に縦位回転縄文を施文する平椀式系土器群が成立しているものと推定され、手向山土器の終焉と共に平椀式系土器群が主体となり、条痕文系土器群の成立を迎えるものと思われる。平椀式系土器群の構造原理は、いわゆる沈線文系土器群の構造原理を踏襲しているものと思われ、田戸上層式系土器群の要素が不在では成立しえない構造と思われる。田戸上層式系土器群が広域的に確認されることから、城ノ台北段階にホライズンを設定することが可能になる。

子母口段階

子母口式自体は非常に田戸上層式の系統上にある無文化の進んだ土器群で、絡条体圧痕文と、刺突文を主たる文様要素とするが、周辺地域では沈線文系の判ノ木山西式や常世式の新しい段階の土器群、その中間的な出流原式などが存在している。押型文系土器群終末期の多くの土器群は、この段階まで残存するものと思われるが、直接的な比較が困難な状況にある中では、関係性の検討から併行関係を推測せざるを得ない。この推測が正しいとすれば、子母口式段階での土器群のあり方は、関東中央部に無文化の進んだ子母口式、南東北に常世式の新しい段階の土器群、北関東に出流原式、中部地方に判ノ木山西式、相木式、東海地方に穂谷式、高山寺式終末の土器群が分布していることになる。中部、東海地方では、穂谷式と高山寺式の併行関係の問題や、西洞遺跡における関東的な子母口式と在地系土器群との関係、判ノ木山西式系の沈線文土器との問題が未解決であり、様相把握に混乱が生じている可能性もある。城ノ台北段階のホライズンの終末が、子母口式の終末に相当するものと考えて置きたい。

木の根A段階

野島式の最古段階とした木の根A式段階では、沈線文や細隆起線文土器において区画内充填文手法が成立する。東海地方では清水柳E式土器、南関東地方では木の根A式土器、南東北地方では槻木下層式土器が出土する。特に南関東地方の海岸部では清水柳E式の線状絡条体圧痕文の影響を受けてか、絡条体圧痕文土器が残存する傾向にあり、より子母口式的な様相が残存している。また、線状絡条体圧痕文と同様な文様効果を持つ連続刺突文土器も、刺突文の条数を増やし文様帯幅を広げる土器群が増えてくる。その様な土器群の中においても、区画文を構成する土器群は区画充填文手法を採用しており、野島式の萌芽が看取される。東海地方にあっても、線状絡条体圧痕文は木の根A式段階を境として衰退していくものと考えられる。また、中部高地の判ノ木山

西式の系譜下にある沈線文土器の文様要素は、子母口式からの細隆起線文の要素と融合して野島式土器を生成した、一大要因になっているものと判断される。

以上、該期土器群は城ノ台北式段階から大半が胎土に繊維を含み、条痕文や条線文を施文するものとなる。その意味からでは、既に条痕文系土器群化しており、この時点で土器群の変化を捉えることもできるが、城ノ台北段階は押型文系土器群の構造的な変革期に相当する時期で、沈線文系土器群においても変革期に相当するが、構造的には沈線文系土器群の終末に位置付けられるものである。また、子母口段階はこれ等沈線文系土器群の要素を継承する終末段階と認識され、この段階までを沈線文系土器群の範疇として把握したい。さらに、全国的に見て、木の根A式段階で土器群に構造的変換が行われていることから、この段階を以って条痕文系土器群の開始と判断したい。

7 おわりに

いつもながら冗長にという言葉が常套句になってしまったが、今回の検討は広範囲に亘る地域相と時間的な幅があること、また、いままでの筆者の見解を総括する目的があったことなどから、特に長いものとなってしまった。重複する部分が多く、さらなる整理が必要と思われるが、現時点での筆者の考えをまとめたものである。時期区分を設定するに当たり、先学の業績が重くのしかかるが、やはり自分自身の基準を設け、自身の価値判断で意味論的な矛盾を来さぬよう心がけたつもりであるが、どこまで自身の見解を通せたか心もとないところでもある。物事の区分に対し、特に時系列の区分について、筆者は変化の最初を以って頭切りで区切るよう心がけている。そして、終焉で区切る後切りを行うことで残存要素の判断をあやまる危険性があることも、明らかなる基準では遅すぎることもあるという認識基準を持ち合わせていることから、考古学的の区分基準にもそれを当てはめて思考するよう心がけてきた。

ここで取り扱った土器群は大半が遺構の一括遺物ではなく、包含層出土土器群で、詳細な型式学検討から細かな時間差として編年付けられる可能性もある。しかし、現時点で一括性の保障が無い以上、大枠で比較検討し、可能性を十分に検討する必要があるものと思われる。何でも一緒という意味ではないが、分けられる根拠が無い以上、また類似性を否定する根拠が無い以上、複雑に絡んでいるあらゆる関係性の検討を可能なまで推し進めることこそが、真の型式学的な研究であると私考する。ここでの検討は決して結論ではなく、一通過点であることを明記し、更なる研鑽を積むことを心に刻んで置きたい。

なお、本文を草するに当り、多くの方々から文献の涉猟、資料実見等に際し御高配を賜り、また有益なる御教示も賜った。ここに御芳名を記して、深甚なる敬意を表したい。

会田 進 荒谷伸郎 池谷信之 石岡憲雄 井上 賢 小笠原永徳 岡田憲一 及川良彦
遠部 慎 小崎 晋 小林達雄 斉藤弘道 坂上有紀 笹原千賀子 笹原芳郎 佐野恵理
下島健弘 新東晃一 芹澤清八 関根慎二 武部真木 田中 聡 谷井 彪 中沢道彦
中島 宏 贄田 明 西本正憲 蜂谷孝之 原川雄二 毒島正明 細田 勝 牧野光隆
増子康真 三田村美彦 宮崎朝雄 宮田栄二 守屋豊人 八木澤一郎 山下勝年

引用・参考文献

- 会田 進 1998 「間下丸山・禅海塚遺跡」 郷土の文化財20
安孫子昭二 1976 「田中谷戸遺跡」 町田市田中谷戸遺跡調査会
安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討」 東京考古1
安孫子昭二 1983 「小山田遺跡群II」(No.12・13・23遺跡) 小山田遺跡調査会
安孫子昭二 1984 「小山田遺跡群IV」(No.15遺跡) 小山田遺跡調査会
阿部芳郎 1990 「古屋敷遺跡発掘調査報告書」 富士吉田市史史料叢書8
阿部芳郎 1997 「判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」 シンポジウム押型文と沈線文本編 長野県考古学会縄文時代(早期)部会
阿部芳郎 1998 「縄文時代早期後葉土器編年における北関東地方の様相―栃木県佐野市出流原遺跡出土土器の型式学的検討―」 駿台史学第106号
荒谷伸郎 2003 「北野遺跡I(下層)」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第119集
安藤道由 2001 「上用瀬遺跡III」 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第167集
池田次郎 1950 「城ノ台貝塚出土早期縄文土器の細別」 広島医科大学論文集第2集
池谷信之 2002 「西洞遺跡(c・d区)発掘調査報告書」 沼津市文化財調査報告書第78集
石田明夫 1986 「松沢遺跡発掘調査概報」 会津高田町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
猪狩忠雄他 1995 「南山A遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告第40冊
宇野治幸 1991 「小の原遺跡・戸入障子暮遺跡」 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
江藤千萬樹・長田實 1939 「北伊豆に於ける古式縄紋式遺跡調査報告」 考古学10巻5号
太田正康 1985 「上福万遺跡・日下遺跡・石州府第I遺跡・石州府古墳群」 鳥取県教育文化財団報告書17
小笠原永隆他 1994 「城ノ台南貝塚発掘調査報告書」 千葉大学文学部考古学研究報告第1冊
小笠原永隆 1997 「関東地方における田戸上層式・子母口式土器の様相―認識の再認識を中心として―」 シンポジウム押型文と沈線文本編 長野県考古学会縄文時代(早期)部会
小笠原永隆 1999 「中部地方を中心とする縄文時代早期中葉土器群の展望―「シンポジウム」の再検討を中心とした若干の予察―」 長野県考古学会誌87・88
小笠原永隆 2000 「谷津台貝塚出土の田戸上層式終末期の土器」 貝塚研究第5号
小笠原永隆 2001 「子母口式成立前後の広域編年作業にむけての問題点」 先史考古学研究第8号
小笠原永隆 2002 「千葉ニュータウン周辺における縄文時代早期中葉の土器資料―子母口式及びその前後形式を中心として―」 研究連絡誌第63号 千葉県文化財センター

- 岡田憲一 2003 「宮の平遺跡Ⅱ」 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第86冊
- 岡田憲一 2003 「鵜山遺跡第2次調査」奈良県遺跡調査概報 奈良県立橿原考古学研究所
- 小野真一 1971 「沼津市荒区遺跡調査概要報」 駿豆考古第10号
- 小野真一 1975 「ゆずり葉」 加藤学園考古学研究会
- 小野真一 1976 「桜台-田方郡修善寺町桜台遺跡発掘調査報告-」 修善寺町教育委員会
- 及川良彦 2002 「多摩ニュータウン遺跡」No.200遺跡(第2・3次調査) 東京都埋蔵文化財センター調査報告第108集
- 遠部慎・柳田裕三 2001 「九州押型文土器終末期の本州系土器-菅無田遺跡の資料紹介を兼ねて-」 鹿児島考古第35号
- 金子直行 1982 「野島式土器に付いて-金平遺跡出土土器を中心として-」 土曜考古第6号
- 金子直行 1984 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 金子直行 1985 「貝塚山遺跡発掘調査報告書-第2地点-」 富士見市遺跡調査会調査報告第24集
- 金子直行 1986 「猿貝北・新町口」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第61集
- 金子直行 1992 a 「田戸遺跡資料」 山内清男考古資料4 奈良国立文化財研究所史料第34冊
- 金子直行 1992 b 「子母口貝塚資料・大口坂貝塚資料」 山内清男考古資料5 奈良国立文化財研究所史料第35冊
- 金子直行 1992 c 「子母口式土器研究序説-子母口貝塚の実態と研究史を中心にして-」 縄文時代3
- 金子直行 1993 「子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討-細隆起線文土器の出自と系譜を中心として-」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要 第10号
- 金子直行 1994 「貝殻沈線文系土器群終末期の様相-吹切沢式と子母口式の関係について-」 縄文時代5
- 金子直行 1998 「土器型式編年論-早期-」 縄文時代9
- 金子直行 2000 a 「野島式土器の成立について-一条痕文系土器群成立期の型式学的な系統整理を中心として-」 土曜考古第24号
- 金子直行 2000 b 「土器型式編年論-早期-」 縄文時代11
- 神奈川考古同人会 1983 「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 資料集」
- 加藤賢二 2003 「評論「清水柳E類」」 利根川24・25
- 上野川勝 2000 「大志白遺跡群発掘調査報告書」 河内町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 神村 透 1986 「信濃の押型文土器とその文化」 歴史手帳2
- 加納 実 1999 「市原市大作頭遺跡」 千葉県文化財センター調査報告第355集
- 川口正幸 1986 「築田寺南遺跡」 築田寺南遺跡調査会
- 河瀬実浩 2000 「岩井谷遺跡」 岐阜県文化財保護センター調査報告書第60集
- 北浦弘人 1986 「上福万遺跡Ⅱ」 鳥取県教育文化財団報告書22
- 木村 直 1987 「下鈴野遺跡」 市原市文化財センター調査報告書第16集
- 桐生直彦 1983 「向ヶ岡遺跡」 多摩市埋蔵文化財調査報告6
- 黒尾和久 1998 「坪松B・引谷ヶ谷戸・儘上・天王沢」 あきる野市秋川南岸道路関連遺跡調査会
- 国井秀紀 1999 「柳作B遺跡」 福島県文化財調査報告書第359集
- 小葉一夫 1984 「戸場遺跡」 町田市戸場遺跡調査会
- 小葉一夫 2003 「武蔵国分寺跡遺跡北方地区」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第136集
- 小葉一夫 2004 「多摩ニュータウン遺跡」No.192遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告第152集

- 小林秀雄 1981 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3-判ノ木山西遺跡-」
- 坂上有紀 2004 「八斗蒔原遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第129集
- 迫 和幸 2000 「恩名沖原遺跡発掘調査報告書」 恩名沖原遺跡発掘調査団
- 笹原千賀子 1998 「小池遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第105集
- 佐野恵里 2000 「石敷遺跡」 富士宮市文化財調査報告書第25集
- 下島健弘 2003 「縄文時代早期清水柳E類の成立過程」 利根川24・25
- 須磨 満他 1976 「沼津木戸上遺跡の調査-第1次調査概報-」 考古学ジャーナルNo.119
- 瀬川裕市郎 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」 沼津市歴史民俗資料館紀要1
- 瀬川裕市郎 1982 「条痕文土器 縄文土器I」 縄文文化の研究3
- 関野哲夫 1988 「高山寺式土器の編年-その細分と西日本地域との関係について-」 先史考古学研究第1号
- 関野哲夫 1990 「清水柳北遺跡発掘調査報告書その2」 沼津市文化財調査報告書第48集
- 関野哲夫 1992 「尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書II」 沼津市文化財調査報告書第53集
- 芹澤清八 2001 「黒袴台遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 高尾好之 1989 「中見代第1遺跡調査報告書」(足高尾上No.5遺跡) 沼津市文化財調査報告書第45集
- 高橋 誠 1986 「割山遺跡」 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第5集
- 高橋 誠 1987 「椎ノ木遺跡」 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第15集
- 高橋雄三 1981 「子母口式土器研究における問題点」 福島考古第22号
- 武部真木 2003 「八王子遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第112集
- 田中 敏 1999 「常世原田遺跡-吉田格氏昭和23年調査資料-」 福島県立博物館
- 田中 聡 1997 「中部・東海地方における沈線文土器の様相」 シンポジウム押型文と沈線文本編 長野県考古学会縄文時代(早期)部会
- 田中 聡 1999 「中部地方における縄文早期沈線文土器群の終末について-関東以西における早期前半から後半への移行期の問題-」 長野県考古学会誌87・88
- 田村 隆 1985 「佐倉市タルカ作遺跡」 千葉県文化財センター
- 寺田光一郎 1992 「徳倉片平山J遺跡」 三島スプリングスC. Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書II
三島市教育委員会
- 土肥 孝 1988 「近畿押型紋土器素描」 第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題
- 土肥孝・宮崎朝雄・金子直行 1992 「田戸遺跡資料」 奈良国立文化財研究所史料第34冊
- 長尾 修 1987 「松沢遺跡C地点=北松沢遺跡」 松沢遺跡発掘調査概報 会津高田町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 中沢道彦 1995 「下荒田遺跡」 長野県御代田町教育委員会
- 中島英子 1998 「貫ノ木遺跡・西岡A遺跡」 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書35
- 中村五郎 2000 「平椿・塞ノ神型式群土器について」 古代第108号
- 仲家三千彦 1998 「徳倉B遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第100集
- 賛田 明 2001 a 「万場遺跡」 中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 長野県木曾郡大桑村
- 賛田 明 2001 b 「吉野遺跡群」 中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 長野県木曾郡上松町
- 西本正憲 2003 「笹見原遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」 忍野村教育委員会・笹見原遺跡発掘調査団
- 峰屋孝之 1998 「桜井平遺跡」 千葉県文化財センター調査報告書第321集
- 塙 静夫 1966 「雲入遺跡-矢板市下伊佐野・雲入遺跡調査報告書-」 作新学院考古学資料室調査報告3

- 平野 功 1988 「城ノ台北貝塚・白井長谷遺跡・山川ショウフ井戸遺跡」 小見川町文化財報告第13集
- 福島邦男 1988 「平石遺跡」
- 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の検討（上）」 土曜考古第7号
- 毒島正明 2004 「子母口式土器研究の検討（下）—子母口式2細分試論—」 土曜考古第28号
- 牧野光隆 2001 「市原市新井花和田遺跡」 市原市文化財センター調査報告書第74集
- 松田光太郎 1999 「臼久保遺跡」 かながわ考古学財団調査報告60
- 馬飼野行雄 1986 「黒田向林遺跡」 富士宮市文化財調査報告書第9集
- 増子康真 1998 「東千町遺跡」『上村川下流域の考古学的調査』 上矢作町内遺跡発掘調査報告書
- 三田村美彦 1998 「矢坪遺跡・談合坂遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第151集
- 三田村美彦 2003 「笹見原遺跡上層文下層から出土した縄文時代早期土器群について」 笹見原遺跡発掘調査報告書 忍野村教育委員会
- 三田村美彦 2003 「山梨の縄文時代早期沈線文土器群終末期前後の検討」 山梨県埋蔵文化財センター研究紀要19
- 宮崎朝雄・金子直行 1989 「井草式土器及び周辺の土器群について」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第5号
- 宮崎朝雄・金子直行 1995 「回転文様系土器群の研究—表裏縄文系・撚糸文系・室谷上層系・押型文系土器群の関係—」 日本考古学第2号
- 宮下健司 1988 「長野県史 考古資料編」 1—3
- 森 幸彦他 1986 「富作遺跡発掘調査概報」 福島県立博物館調査報告第13集
- 森 幸彦 1999 「常世原田遺跡」 福島県立博物館
- 守屋豊人 1997 「中部地方における押型文土器後半期の様相」 シンポジウム押型文と沈線文本編 長野県考古学会縄文時代（早期）部会
- 守屋豊人 1999 「東海地方押型文土器後半期の編年と相木式土器の成立について」 長野県考古学会誌87・88
- 矢島敬之 2002 「根室遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告第83冊
- 矢島俊雄 1984 「出流原小学校内遺跡発掘調査報告書」 佐野市教育委員会
- 山村貴輝 1995 「大越遺跡」 武蔵考古学研究所
- 横手浩二郎 1998 「押型文土器様式最終末の様相—九州手向山式土器の再検討—」 古文化談叢第41集
- 吉朝則富 1983 「向畑遺跡」 高山市埋蔵文化財調査報告書第6号
- 吉朝則富 1984 「向畑遺跡の遺物」 高山市埋蔵文化財報告書第8号
- 吉田 格 1955 「千葉県城ノ台貝塚」 石器時代第1号
- 領塚政浩 1997 「常世式土器の再検討—常世Ⅰ式土器の成立過程と編年的位置をめぐって—」 シンポジウム押型文と沈線文本編 長野県考古学会縄文時代（早期）部会
- 和田秀寿 1988 「縄文早期高山寺式土器の成立過程と細分編年」 古代学研究117
- 渡邊高弘 1999 「市原市福増遺跡」 千葉県文化財センター調査報告第366集

研究紀要 第19号

2004

平成16年7月26日 印刷

平成16年7月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社